

ミトロ遺跡

国道195号道路改築工事に伴う発掘調査報告書

2007.12

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

ミトロ遺跡

国道195号道路改築工事に伴う発掘調査報告書

2007.12

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

今回報告いたしますミトロ遺跡は、高知市と南国市にまたがる遺跡です。周辺は県内でも周知の遺跡が密集する地域にあたり、豊かな自然環境のもと古くから人々の生活の舞台となってきたことを窺い知ることができます。代表的な遺跡には土佐国衙跡、岡豊城跡等があり、土佐の中心的な役割を果たしてきた地域でもあります。

発掘調査では、弥生時代中期前半と弥生時代後期末～古墳時代前期初頭を中心とする遺構、遺物を検出することができました。弥生時代中期前半では溝跡から土器、石器類が出土しました。石器類は伐採斧、加工斧と主要な道具類が揃っています。未製品も出土しており当時の手工業生産の復原に迫ることができます。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭では小形ながら竪穴住居跡等が検出され、出土遺物等から鉄器製作にかかわる工房跡の可能性がります。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては高知市布師田地区の皆様をはじめ、高知県高知土木事務所、高知市教育委員会、南国市教育委員会の埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査報告書作成においても関係各位の皆様に多大なご指導並びにご教示を頂いたことを厚くお礼申し上げます。この報告書により一人でも多くの方が地域の埋蔵文化財に対して興味・関心を持っていただければ幸いです。

平成19年12月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 汲田幸一

例言

1. 本書は、国道 195 号道路改築工事に伴うミトロ遺跡の発掘調査報告書である。
2. ミトロ遺跡は高知市布師田に所在する。
3. 調査は高知県高知土木事務所の委託を受け、高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間

試掘確認調査 平成 17 年 1 月 11 日～2 月 28 日

本調査 平成 17 年 8 月 22 日～12 月 5 日

5. 調査面積

試掘確認調査 108 m²

本調査 2,414 m²

6. 調査体制

- (1) 調査担当

平成 16 年度（試掘確認調査）

調査課長兼第二班長 横山耿一

主任調査員 坂本憲昭

平成 17 年度（本調査）

調査課長 森田尚宏

第二班長 藤方正治

専門調査員 岩本繁樹

調査員 久家隆芳

平成 18・19 年度（整理作業）

調査課長 廣田佳久

第一班長 山本哲也

主任調査員 久家隆芳

- (2) 総務担当

平成 16 年度

次長兼総務課長 久川清利

主任 池野かおり

主幹 長谷川明生

平成 17 年度

次長兼総務課長 湯浅文彦

主任 池野かおり

主幹 長谷川明生

平成 18 年度

次長 森田尚宏

総務課長 戸梶友昭
主任 池野かおり

平成 19 年度

次 長 森田尚宏
総務課長 戸梶友昭
主任 谷 真理子

7. 本書の執筆は岩本・久家が分担し、遺物写真撮影・編集は久家が行った。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたり、高知市布師田地区の皆様、下條信行氏（愛媛大学）、村上恭通氏（愛媛大学）、植地岳彦氏（財団法人徳島県埋蔵文化財センター）、信里芳紀氏（香川県教育委員会）にご教示を賜った。記して感謝する次第である。
9. 発掘・整理作業員
 - (1) 発掘作業員
猪野光明、岡上忠稔、小野妙子、加治宣子、河村美佐子、窪田泰詔、公文朱美、黒岩幸子、澤本昌明、秦泉寺真行、杉本晴男、竹内 保、竹崎芳子、田所 妙、田中 穰、永野宏幸、浜田寅彦、久竹 孝、宗石久子、和田宣郎
 - (2) 整理作業員
岩崎佐枝、門田美知子、門脇菜乃花、齋藤美幸、藤原ゆみ、西田由紀
10. 出土遺物については「04-13KNM」（試掘確認調査時出土遺物）、「05-9KNM」（本調査時出土遺物）と注記し、関連図面・写真等とともに高知県立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録の緯度・経度は世界測地系で記してある。

本文目次

第I章 調査に至る経過と調査の方法(久家).....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 試掘確認調査.....	1
第3節 調査の方法.....	6
第II章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境(岩本).....	9
第1節 地理的環境.....	9
第2節 歴史的環境.....	10
第III章 調査成果(久家).....	13
第1節 基本層序.....	13
第2節 I区の遺構と遺物.....	16
第3節 II区の遺構と遺物.....	59
第IV章 まとめ(久家).....	65
第1節 検出遺構について.....	65
第2節 出土遺物について.....	69
付編	
1.ミトロ遺跡の自然科学分析.....	75
2.高知県ミトロ遺跡出土木製品の樹種調査結果.....	87

挿図目次

第1図 試掘トレンチ位置図	
第2図 試掘トレンチ柱状図	
第3図 試掘調査出土遺物実測図	
第4図 調査区位置図	
第5図 遺跡位置図	
第6図 ミトロ遺跡周辺の遺跡地図	
第7図 I区基本層序1	
第8図 I区基本層序2	
第9図 II区基本層序	
第10図 I区遺構配置図	
第11図 II区遺構配置図	
第12図 ST1遺物出土状況図・セクション図	
第13図 ST1-P1セクション図	
第14図 ST1出土遺物実測図	
第15図 SD1遺物出土状況図	
第16図 SD1セクション図1	
第17図 SD1セクション図2・セクション位置図	
第18図 SD1出土遺物実測図1	
第19図 SD1出土遺物実測図2	
第20図 SD1出土遺物実測図3	
第21図 SD1出土遺物実測図4	
第22図 SD1出土遺物実測図5	
第23図 SD1出土遺物実測図6	
第24図 SD1出土遺物実測図7	

第25図	SD1出土遺物実測図8
第26図	SD1出土遺物実測図9
第27図	SD2遺物出土状況図・セクション図
第28図	SD2出土遺物実測図
第29図	SD1～2出土遺物実測図
第30図	SD3S遺物出土状況図・エレベーション図・セクション図
第31図	SD3S出土遺物実測図
第32図	SD3セクション図
第33図	SD3出土遺物実測図1
第34図	SD3出土遺物実測図2
第35図	SD3出土遺物実測図3
第36図	SD3出土遺物実測図4
第37図	SD3N出土遺物実測図
第38図	SD2～3出土遺物実測図
第39図	SD4セクション図
第40図	SD4出土遺物実測図
第41図	SD5セクション図
第42図	SD5出土遺物実測図1
第43図	SD5出土遺物実測図2
第44図	SK1セクション図・出土遺物実測図
第45図	ST2遺物出土状況図・セクション図・中央ピットエレベーション図
第46図	ST2出土遺物実測図
第47図	SB1平面図・セクション図
第48図	SB1柱実測図
第49図	SK3セクション図
第50図	SK4セクション図・出土遺物実測図
第51図	SK5セクション図・出土遺物実測図
第52図	SK6セクション図・出土遺物実測図
第53図	SD6セクション図・出土遺物実測図
第54図	SD7出土遺物実測図
第55図	包含層出土遺物実測図
第56図	田村遺跡群検出の溝跡全体図
第57図	田村遺跡群検出の溝跡
第58図	中期前半の土器変遷図
付編1	
図1	調査地点位置図
図2	各地点の花粉化石群集
図3	各地点の植物珪酸体含量

表目次

第1表	試掘確認調査結果一覧表
第2表	遺物観察表(土器・土製品／石器／木製品／金属製品)
付編1	
表1	花粉分析結果
表2	植物珪酸体含量

表3 樹種同定結果
 付編2
 表1 木製品樹種同定表

図版目次

PL.1 調査区遠景
 PL.2 I区完掘状況全景／SD1完掘状況／SD1・5完掘状況／SD2・ST1完掘状況／SD3完掘状況
 PL.3 完掘状況／I区基本層序／ST1完掘状況
 PL.4 ST1遺物・焼土・炭化物出土状況
 PL.5 ST1東西セクション
 PL.6 SK1セクション／SD1セクション／SD1遺物出土状況
 PL.7 SD3Sセクション／SD3S遺物出土状況／II区完掘状況／II-1区完掘状況
 PL.8 II区完掘状況遠景
 PL.9 II-1区西壁セクション／II-1区南壁セクション／ST2完掘状況／ST2セクション／ST2-SK1遺物出土状況
 PL.10 SB1完掘状況／P5セクション／P3／P4
 PL.11 SK3セクション／SK5セクション／SK4遺物出土状況／SK5完掘状況
 PL.12 出土遺物(21・46・51・80・118)
 PL.13 出土遺物(125・126・144・150・172・174)
 PL.14 出土遺物(185・190・192～195)
 PL.15 出土遺物(202・206・230・240・248)
 PL.16 出土遺物(262・276・277・303・300)
 PL.17 出土遺物(322・335・332・336・342)
 PL.18 出土遺物(12・36・47・52・68・79・92・124・127・134)
 PL.19 出土遺物(136・147・159・166・183・200・191・201・203)
 PL.20 出土遺物(204・221・224・237・241・242・245～247)
 PL.21 出土遺物(251・253・259・261・263・265・266・268・270・274)
 PL.22 出土遺物(278・286・295・296・299・306～308・312)
 PL.23 出土遺物(314・320・328・334・340・341・349・358・360・364)
 PL.24 出土遺物(25・29・33・40・42・43・54・57・72・75・158／32・37・41・59・62・64・94・95・108・122・123・151・152)
 PL.25 出土遺物(16・19・22・23・27・65・66・69・70・73／16・19・22・23・27・65・66・69・70・73)
 PL.26 出土遺物(28・31・35・38・44・56・78・149・155／82・83・89・90・105・107・109・111・114)
 PL.27 出土遺物(83・85・86・96・103・104・106・119／98・99・101・112・122・123・154)
 PL.28 出土遺物(18・20・60・61・63・153／26・146／77・131／276・280／87・90)
 PL.29 出土遺物(39・49・50・71／30・34・67・76)
 PL.30 出土遺物(19・116／88・91／282・283／130・132・133・135・137・139・140・142・143)
 PL.31 出土遺物(167・169・170・172・173・319・345・365)
 PL.32 出土遺物(13～15・168・171・256・257・293・359・363・366)
 PL.33 出土遺物(香川県からの搬入土器)
 付編1
 図版1 花粉化石
 図版2 木材・植物珪酸体
 付編2
 図版1 顕微鏡写真

第 I 章 調査に至る経過と調査の方法

第 1 節 調査に至る経過

一般国道 195 号は、高知市を起点とし、四国山地を通り徳島県阿南市を最短で結ぶ幹線道路である。また、県都高知市と物部川流域の市町村（南国市、旧土佐山田町、旧香北町、旧物部村）を結び、生活、産業、経済、文化の発展に重要な役割を果たしてきている。

しかし、現道は、高知市から南国市にかけては路面電車が並走し、車道幅員が狭く歩道の整備も行われていない。また、高知市周辺の市街化により車の増加などによる幹線道路の交通渋滞は慢性化している。これらの問題を解消するため国道 195 号において高知市弥右衛門から土佐山田町中組に至る延長 11.5 km におよぶ 4 車線のバイパスが計画された。通称「あけぼの街道」と称される一般国道である。

このあけぼの街道建設により周辺幹線道路の交通渋滞の緩和はもちろんのこと、交通安全対策や幹線道路としての機能をより充実させ、物部川流域の地域発展に貢献することが期待されている。四国の交流軸としての役割を果たすとともに周辺住民に安心感を与え、活力を生み、魅力を備えた地域を形づくる礎となるだろう。

あけぼの街道が計画されている地域（国分川左岸から長岡台地にかけての地域）は遺跡の密集地域であり、高知県教育委員会では文化財保護の立場から高知土木事務所と協議を重ねてきた。計画地が遺跡範囲内及び遺跡に近接する場合には、記録保存のための調査あるいは埋蔵文化財の有無を確認する試掘確認調査が必要であることを訴え、埋蔵文化財に対する理解と協力を求めてきた。今回の対象範囲には周知の遺跡であるミトロ遺跡が含まれていたため、予定地内における遺構・遺物の分布範囲及びその密度を確認するために試掘確認調査を実施することとなった。その結果をもとに協議を行い、遺構・遺物が確認された範囲について記録保存を目的とした本格的な発掘調査を行うことになった。

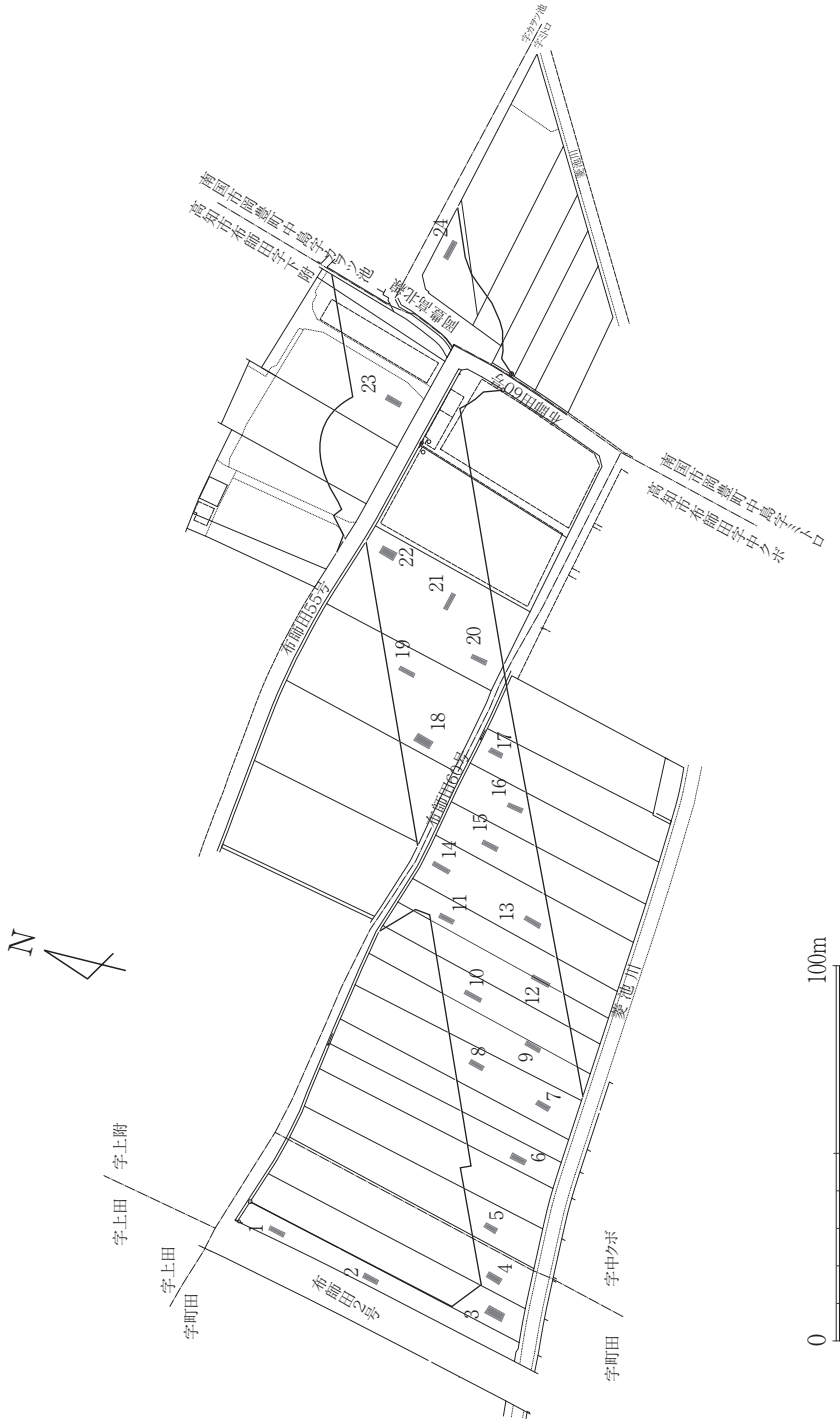
第 2 節 試掘確認調査

平成 16 年度に試掘確認調査が実施された。約 5,400 m² の調査対象地に 24 箇所の試掘トレンチ (TP) を設定して調査を行った (表 1 参照)。

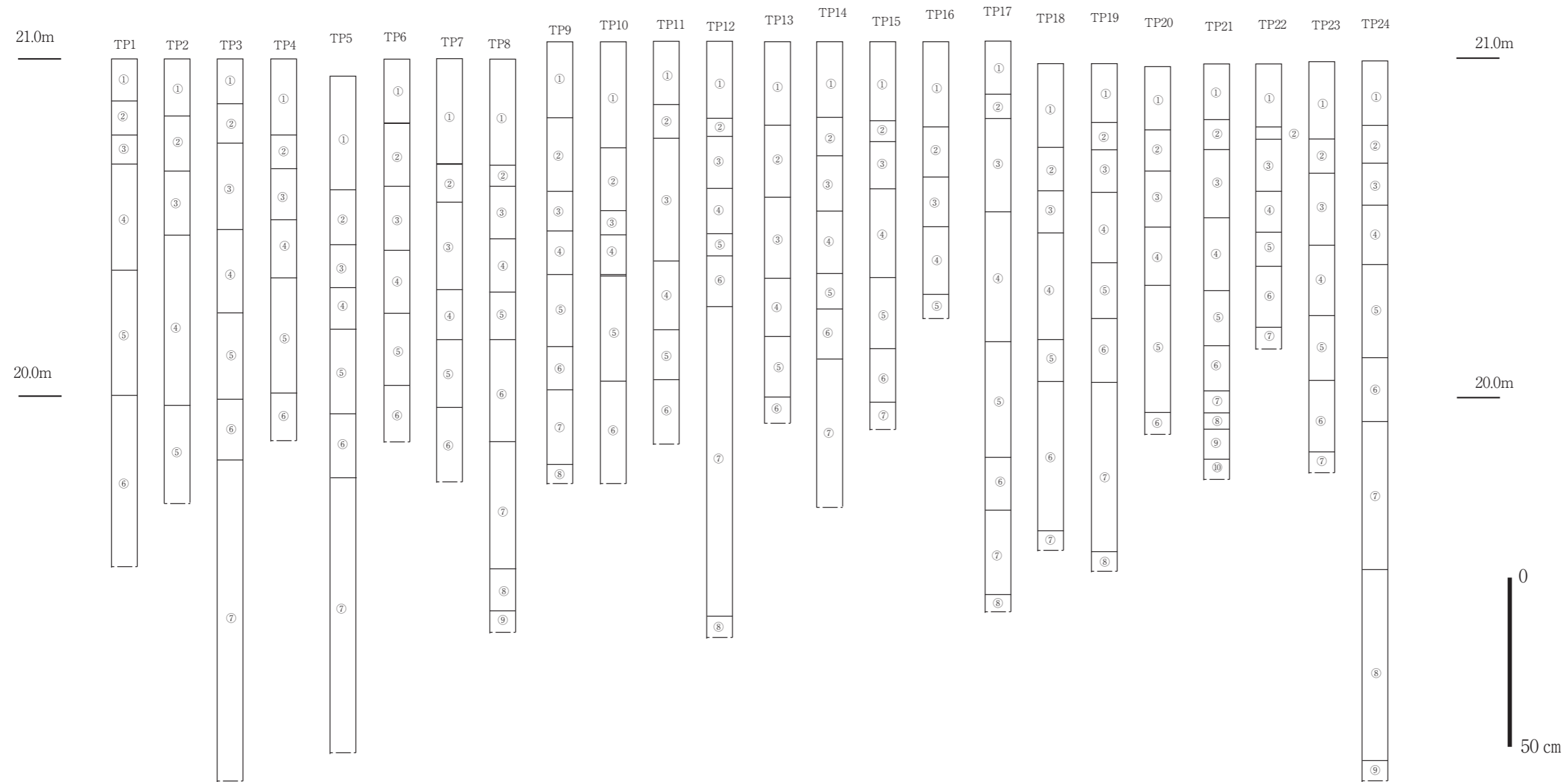
遺構・遺物が確認できた TP は第 1 表試掘 TP 結果表のとおりである。

調査対象地南側にあたる TP1 ～ TP17 からは遺物は出土したが遺構を確認することはできなかった。TP6 から出土した須恵器壺の口縁は摩耗が著しく流れ込みの可能性が高いと考えられる。このほかの TP から出土した遺物は土師質土器を中心とする中世の遺物と考えられるが、いずれも細片であり摩滅した状態であった。遺物の出土層位は灰色粘土層で遺物密度が少なく遺物包含層と判断できない。この灰色粘土層の下層には遺構形成面となりうる層がみられないため、これらの遺物は流水堆積によるものであり、当該調査区が原因地でないと判断されるが周辺には古代～中世の遺跡の存在が推定される。

調査対象地北側の一段高くなっている部分には TP18 ～ 24 を設定して調査を行った。TP22 から



第1図 試掘トレンチ位置図



第2図 試掘トレンチ柱状図

第 I 章 調査に至る経過と調査の方法

TP1

1表土
2表土下バン
3灰色土 黄橙色礫混じる
4灰色粘土 植物根入る
5暗灰色土 植物根入る
6灰色粘土 植物根入る

TP2

1表土
2表土下バン
3灰色土 褐色礫混じる
4灰色粘土 植物根入る
5暗灰色土 植物根入る

TP3

1表土
2表土下バン
3灰色土 黄橙色礫混じる
4灰色土
5暗灰色土 植物根入る
6灰色粘土 植物根入る
7灰色粘土 植物根入る

TP4

1表土
2表土下バン
3灰色土石混じる
4灰色土 黄橙色礫混じる
5灰色土
6暗灰色土 植物根入る

TP5

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
4灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
5灰色粘土
6青灰色粘土 植物根入る
7暗灰色粘土

TP6

1表土
2灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
3灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
4灰色粘土
5青灰色粘土 植物根入る
6暗灰色粘土

TP7

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
4灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
5灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
6灰色粘土

TP8

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘土
4灰色粘土 黄橙色礫混じる
5青灰色粘土
6暗灰色粘土
7緑灰色粘土 下層礫混じる
8灰色砂礫土
9砂礫土 水湧出

TP9

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘質土 黄橙色礫混じる
4灰色粘質土 黄橙色礫混じる 粘性強
5灰色粘砂土 水分含む
6暗灰色粘質土 水分含む
7暗灰色粘土
8灰色砂礫土

TP10

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘土
4灰色粘土 黄橙色礫混じる
5青灰色粘土 植物根入る
6暗灰色粘土

TP11

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘質土 黄橙色礫混じる
4灰色粘土 黄橙色礫混じる 植物根入る
5灰色粘土 植物根入る少量
6暗灰色粘土

TP12

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘砂土
4灰色粘土 黄橙色礫混じる
5灰色粘土 暗灰色粘土混じる
6暗灰色粘土 植物根入る
7暗灰色粘土 水分多く含む
8灰色粘土

TP13

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3灰色粘土 植物根入る
4灰色粘土
5灰色粘土 植物根入る
6暗灰色粘土

TP14

1表土
2表土下バン 黄橙色礫混じる
3暗灰色砂質土
4灰色粘土
5灰色粘土 砂混じる
6暗灰色粘土
7緑青色シルト

TP15

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土
4灰色粘質土 黄橙色礫混じる
5褐色粘土 水分多
6オリブ灰色粘土 水分多
7灰色砂礫土

TP16

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土
4灰色粘土 黄橙色礫混じる
5青灰色粘土
6暗灰色粘砂土

TP17

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土
4灰色粘土
5青灰色粘土
6暗灰色粘土
7緑青色粘性シルト
8灰色砂礫土 礫10cm大

TP18

1表土
2表土下バン
3暗灰色粘質土
4青灰色粘土
5暗灰色粘土
6緑青色粘性シルト
7灰色砂礫土 礫10cm大

TP19

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土 植物根入る
4灰色粘土
5青灰色粘土
6褐色粘土 包含層
7黄褐色粘土 遺構面
8緑青色シルト

TP20

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
4灰色粘性シルト
5灰色粘土
6暗灰色粘土

TP21

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土 黄橙色礫混じる
4褐色粘質土
5褐色粘土
6暗褐色粘土 包含層
7暗褐色粘土 包含層
8黄褐色粘土 上層暗褐色土混じる 遺構面
9黄褐色粘土 礫混じる
10黄褐色粘土 10cm大礫混じる

TP22

1表土
2表土下バン
3暗灰色砂質土 黄橙色礫混じる
4灰褐色粘質土
5暗褐色粘土 包含層
6暗褐色粘質土 包含層 遺構埋土
7黄褐色粘土 遺構面

TP23

1表土
2表土下バン
3灰色粘砂土
4灰褐色粘質土
5褐色粘土 包含層
6灰褐色粘土 包含層
7黄白色(褐色混じる) 遺構面
8暗灰色粘土

TP24

1表土
2表土下バン
3灰色粘質土
4灰色粘土 黄橙色礫混じる
5暗灰色粘土1
6暗灰色粘土2
7黒灰色粘土
8緑灰色粘土
9緑灰色砂

第1表 試掘確認調査結果一覧表

TP番号	検出遺構の有無	出土遺物の有無	遺物包含層の有無	TP番号	検出遺構の有無	出土遺物の有無	遺物包含層の有無
TP1	無	有	無	TP13	無	有	無
TP2	無	有	無	TP14	無	無	無
TP3	無	有	無	TP15	無	有	無
TP4	無	無	無	TP16	無	有	無
TP5	無	無	無	TP17	無	有	無
TP6	無	有	無	TP18	無	有	無
TP7	無	有	無	TP19	無	有	有
TP8	無	無	無	TP20	無	有	無
TP9	無	有	無	TP21	無	有	有
TP10	無	無	無	TP22	有	有	有
TP11	無	無	無	TP23	無	有	有
TP12	無	無	無	TP24	無	無	無

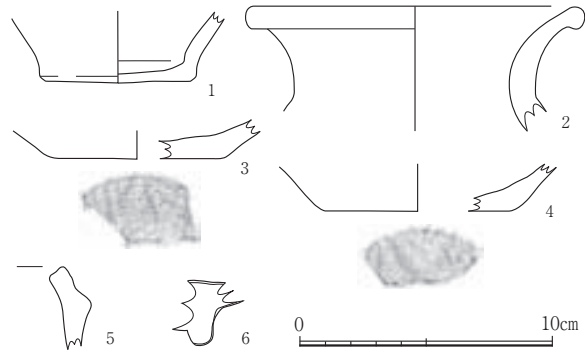
は弥生時代の包含層と考えられる暗灰褐色土を検出できた。包含層中には遺物集中出土点のみならず確認したところ住居跡の可能性が高い事を確認した。

このほか、TP19、21、22からも弥生時代の包含層が確認できた。これらのTPでは遺構の検出はできなかったが包含層の下層には黄褐色土の遺構形成面と考えられる層が確認できており周辺に遺構が存在する可能性が高いものと考えられる。

出土遺物は1は壺の底部である。平底から体部は外上方へのびる。内外面ともナデ調整である。2は須恵器の壺である。体部から緩やかに外反し口唇部は玉縁状を呈する。ローリングを受けている。3・4は土師質土器の杯である。内外面ともロクロナデ調整であり、底部には回転糸切り痕跡が認められる。5は土師質土器の鍋である。

口唇部は凹面状を呈しやや内傾する。口縁部からやや下がった位置に鏝が巡る。6は青磁の碗である。削りだし高台であり、外底面は蛇ノ目状に釉薬を剥ぎ取る。釉調はオリーブ灰色である。

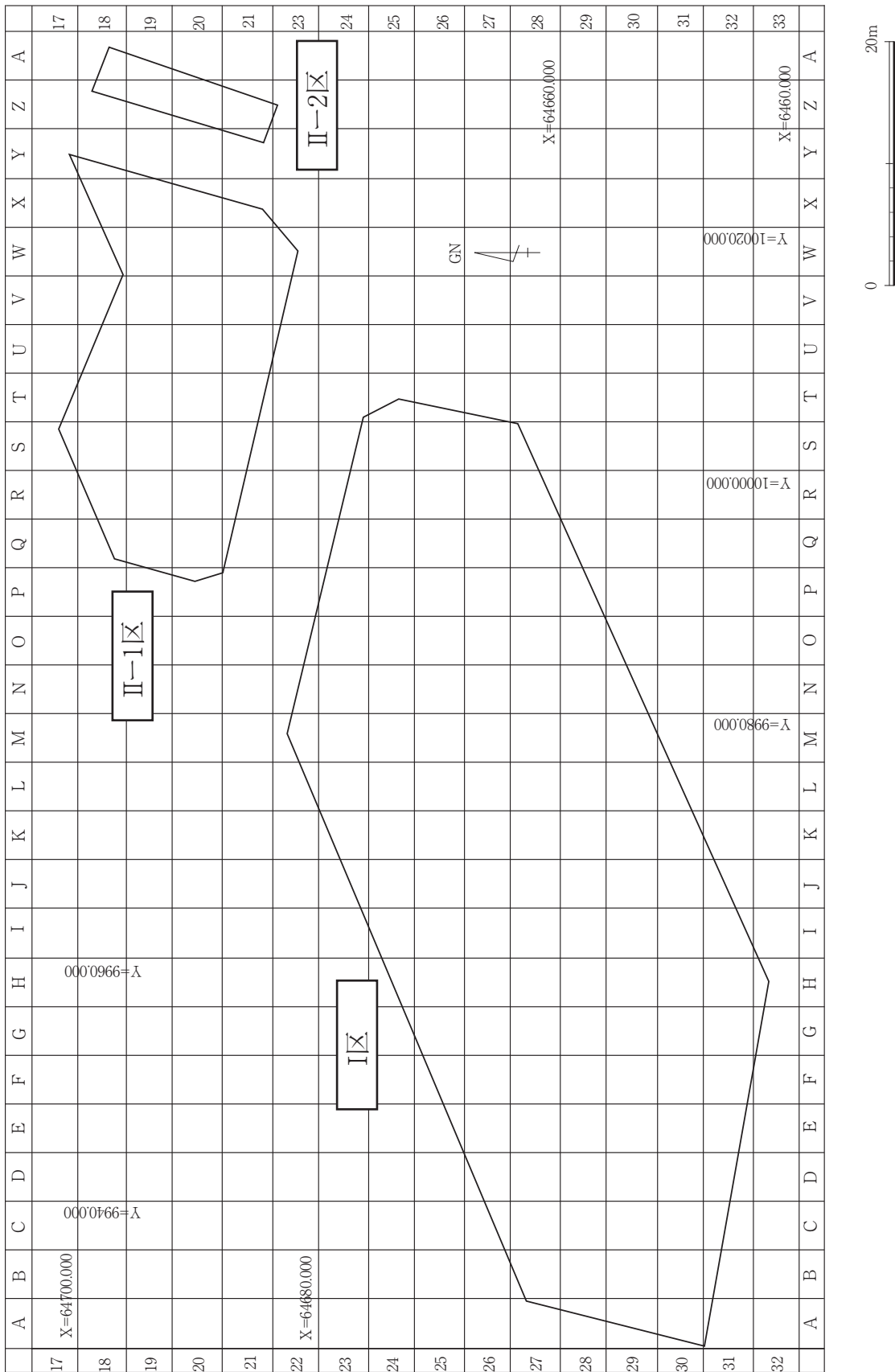
これらの結果、遺構・遺物が確認された3,443㎡のうち2,414㎡について本格的な調査を実施した。



第3図 試掘調査出土遺物実測図

第3節 調査の方法

本調査は平成17年8月22日から12月5日にかけて調査を実施した。現況道路（布師田55号）を挟んで南側をⅠ区、北側をⅡ区とし、Ⅱ区は私道を挟んで西側をⅡ-1区、東側をⅡ-2区として調査を実施した。試掘確認調査結果をもとに無遺物層を重機で掘削し、遺物包含層は人力により掘削した。遺構検出、遺構掘削は人力で行った。世界測地系に基づく公共座標により4mメッシュを設定して、遺物を取り上げ、検出遺構を実測した。東西方向はアルファベットで、南北方向



第4図 調査区位置図

はアラビア数字を用いて表した。このグリッドにより包含層、遺構内出土遺物を取り上げた。また、遺構内の遺物については遺構の状況等を考慮に入れて層位を併記して取り上げた。必要に応じて写真撮影、遺物出土状況図、断面図等の記録類を作成した。

第Ⅱ章 ミトロ遺跡周辺の地理的・歴史的環境

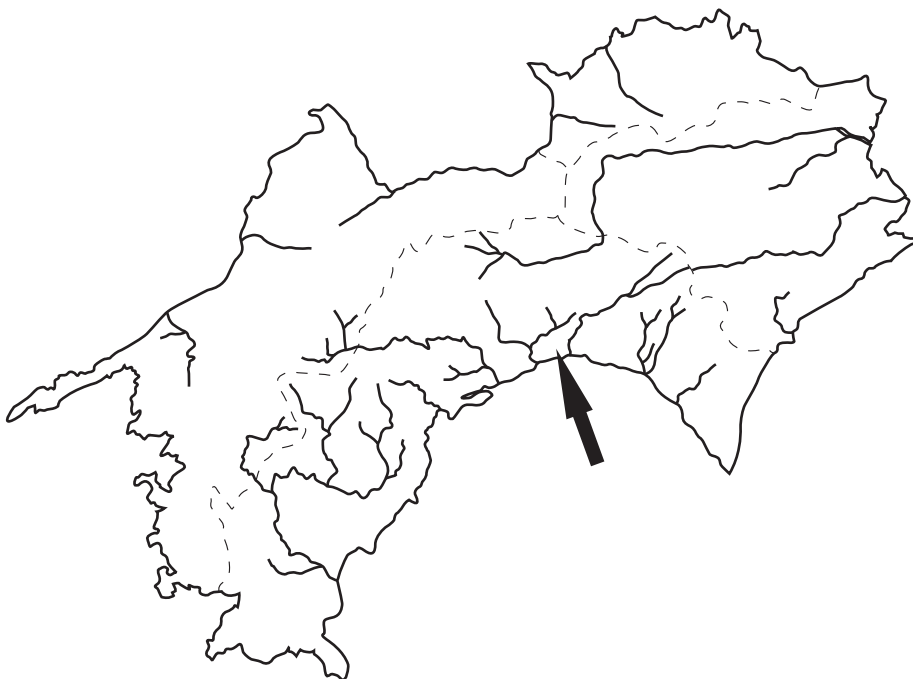
第1節 地理的環境

ミトロ遺跡は、高知県の中央部である高知市の北緯 33 度 34 分 59 秒、東経 133 度 36 分 27 秒に位置している。遺跡は、岡豊山稜の南側を流れる国分川沿いに広がる水田地帯にあり、今回の調査区を含めた南国市域まで遺跡の範囲は確認されている。

高知県の平野部は、東西に長く連なった急峻な四国山地やその山々が海側まで迫っているため、河川流域と沿岸部などの限られたところに形成される。このような山地は、太平洋側の海嶺から生まれ移動するプレートがトラフ（海溝）へ沈み込んでいく時、プレート上に載った堆積物だけ陸側に押しつけられ順々に付け加わった結果である。そのため四国を横断する中央構造線と南側の御荷鉾部構造線、仏像構造線の各断層に挟まれた三波川帯、秩父帯、四万十帯の地層は、南側ほど新しく、各地層は特徴ある岩石で構成されることになる。高知平野（高知市域）は、その中の秩父帯にあり、主に古生代の岩石が多く、砂岩、泥岩、チャートの他、石灰岩や蛇紋岩など種々の岩石からなる。

高知平野の前身は、この中の秩父帯中帯から南帯にかけて起こった地殻変動により沈降した窪地（盆地）であり、その窪地に国分川や鏡川などの河川によって運ばれた砂礫や粘土が積もってできた沖積平野である。さらに後世の埋め立てによって現在の高知平野が形成されている。また堆積した粘土層下には、砂礫層が広がり国分川から派生した旧河道がみられる。このように砂礫層が堆積している河床をもつ河川水は、地下に浸透し伏流水となって浅い地下水脈をつくっている。

ミトロ遺跡の東には、洪積世の最終氷河期（今から 2 万 8000 年前）に物部川水系によってつくられた古い扇状地がある。この扇状地は長岡台地と呼ばれ、旧土佐山田町で長さ 8km、最大幅 2km、標高 50m と周辺より一段高くなっている。西南部に向けて次第に高度が緩やかに傾斜して



第5図 遺跡位置図

いき、ミトロ遺跡 3km 東側の小籠付近が長岡台地の端部となる。高知平野は、北側の岡豊山丘陵と長岡台地の間を流れる国分川によってつくられた扇状地性低地で、高知市側では平野部の規模が小さい。

標高約 2.2m の自然堤防上に立地したミトロ遺跡は、

このような地理的、地形的な影響のもとで弥生時代に営まれたムラである。

第2節 歴史的環境

高知県内でも有数の水田地帯である高知平野周辺には、旧石器時代から近世までの遺跡が多く点在している。

周辺の遺跡を概観すると、この地での人類の活動は、1万2千年前の後期旧石器時代まで遡る。岡豊山丘陵の岩陰周辺からチャート製のナイフ形石器や細石刃・スクレイパーなど多くの石器類が見つかった奥谷南遺跡があげられる。遺跡周辺には、チャートや石灰岩・砂岩等の岩塊が分布している。また高天原山の高間原1号墳からは、古墳石室内の土砂中に紛れ込んだチャートの細石核が見つかった。

縄文時代になると、河岸段丘や平野部でも遺跡が見られるようになる。旧石器時代から続く丘陵上の奥谷南遺跡から縄文時代草創期の押型文土器や早期の植物繊維を含んだ繊維土器、サヌカイト製の石鎌などが出土している。平野部では、高知龍馬空港の田村遺跡群から縄文中期の船元式土器や九州との関わりを示す縄文時代後期の鐘崎式土器が出土していることから当時の人々の移動を考える上で貴重な資料となる。

また奥谷南遺跡の丘陵下にある栄エ田遺跡では、縄文時代前期初頭の羽島下層式土器をはじめ後期初頭の中津式土器から晩期までの土器が見つかった。これらの土器とともに使われた磨製石斧や叩き石などから、縄文時代を通して長期に続く集落を想定できる。

弥生時代になると、平野部に集落が生まれてくる。特に、高知龍馬空港での拡張工事で見つかった田村遺跡群は、弥生時代前期から後期まで一貫した集落が築かれ、弥生時代の全体的様相を知る上で貴重な遺跡である。集落内には河川を利用した水田跡や環濠もあり、大溝や流路沿いに多くの住居跡が林立している様子は、拠点集落として機能していたことを物語っている。一方人口増加による分村化も弥生前期後半には始まり、湧水の多い大篠遺跡やミトロ遺跡にも新たなムラが築かれていった。北には縄文時代から続く栄エ田遺跡があり、大篠式土器などの弥生時代前期末から後期終末にかけての土器が出土し、南に行くと、介良遺跡からも溝状遺構や流路跡に同時期の壺・甕や石庖丁などが出土している。

弥生時代後期になると、それまでの中心的な集落であった田村遺跡群は衰退し、物部川によって形成された長岡台地周辺に東崎遺跡、小籠遺跡、金地遺跡、三島遺跡など集落が点在するようになる。これらの遺跡では鉄製品も出土していることから製品の製造・流通が集落間で行なわれた可能性がある。今回のミトロ遺跡も、これらの遺跡の縁辺部にあり、弥生時代中期前半と弥生時代後期終末期の大きな集落や小中規模の集落と関わりをもつ遺跡と考えられる。

弥生時代終末で特徴的なのは、庄内式土器などの搬入土品がミトロ遺跡を含む遺跡から見つかることで、古墳時代へ向けての新たな動きが土佐にも波及するようになる。

古墳時代になると、古墳時代前期の介良遺跡で流路跡等の遺構から祭祀関連の小形丸底壺や初期須恵器、木製品ではナスビ形農具、牛馬耕で使われた軛などが出土している。昔、介良は土佐で最も古い荘園のひとつ介良荘があった所で、この頃から発展的にムラ作りが行なわれていたと考えら



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	奥谷南遺跡	旧石器～近世	12	西野ノ遺跡	弥生～中世	23	野中廢寺跡	古代
2	栄工田遺跡	縄文～近世	13	介良遺跡	弥生～中世	24	介良野遺跡	弥生～中世
3	田村遺跡群	縄文～近世	14	長畝古墳群	古墳	25	介良城跡	中世
4	大篠遺跡	弥生	15	狭間古墳	古墳	26	田辺島城跡	中世
5	ミトコ遺跡	弥生	16	小蓮古墳	古墳	27	大津城跡	中世
6	東崎遺跡	弥生～中世	17	布師田古墳	古墳	28	池城跡	中世
7	布師田新屋敷遺跡	古代	18	高間原古墳群	古墳	29	布師田八頭城跡	中世
8	三島遺跡	弥生～平安	19	明見彦山古墳群	古墳	30	布師田金山城跡	中世
9	里改田遺跡	弥生～中世	20	土佐国分寺跡	古墳～近世	31	田村城跡	中世
10	小籠遺跡	弥生～近世	21	比江廢寺跡	古代	32	西谷遺跡	中世
11	土島田遺跡	弥生	22	土佐国衙跡	古代	33	岡豊城跡	中世

第6図 ミトコ遺跡周辺の遺跡地図

れる。古墳では、前期古墳（4世紀）にみられる副葬品が出土した長畝2号墳が最も古く、次いで、5世紀中頃に粘土を敷いた組合せ式木棺墓の狭間古墳が続く。後期になると独立丘陵上や山麓部に横穴式石室をもつ小蓮古墳、明見彦山古墳群、布師田古墳、高間原古墳群などの小規模の古墳群が次々と築造される。

60歳で国司として土佐へ赴いた紀貫之は、承平4（934）年帰京後の「土佐日記」に大津の港を船出して京都まで帰る当時の様子を書いている。ミトロ遺跡の南側には、中島、大津、川原島、田辺島、北浦などの地名が残り、紀貫之の土佐日記の頃にはまだ海か、入り江であった。国分川上流域には、今も律令制下の条理が分布し、土佐国衙跡や土佐国分寺跡、比江廃寺といった官衙跡や寺院跡から土佐の古代の中心地であった往時が偲ばれる。田村遺跡群には、平安時代前半の建物群が残り、「田村荘」に関わる官衙施設と考えられている。8世紀後半頃使われた円面硯や11世紀後半頃の楠葉型瓦器、布目瓦が出土した栄エ田遺跡は、寺院に関わる遺跡でもある。これらの遺跡は、古代の土佐の繁栄を裏付ける貴重な資料となる。

中世になると、高知市域には、池城跡（池豊前守頼定）、大津城跡（細川天竺弾門、天竺孫八郎）布師田金山城跡（石谷民部少輔重信）、布師田八頭城跡（石谷民部少輔重信）、介良城跡（横山九郎兵衛）、田辺島城跡（福留弾正）の山城跡が、独立丘陵上や周辺山麓部に多く作られるようになる。詰や堀切、堅堀などの遺構が残り、山城として戦国期に機能していたものと考えられる。南国市域では、土佐の守護代細川氏の居館田村城跡や戦国時代の土佐の覇者長宗我部氏の居城岡豊城跡と伝長宗我部氏屋敷跡と言われる西谷遺跡等が知られている。高知市とその周辺部は中世以降の埋め立てによる土地の拡張、水路の整備によって生産性を高め、土佐の穀倉地帯として栄え、現在の姿となっている。

参考文献

- 高知地盤図 社団法人高知県建築設計監理協会 1992年
- 高知市史 上巻 高知市 1958年
- 南国市史 南国市 1979年
- 高知の研究1 清文堂 1983年
- 田村遺跡群Ⅱ 第一分冊 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 里改田遺跡－室ノ内・岩路地区－ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- 小籠遺跡Ⅰ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 小籠遺跡Ⅱ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 小籠遺跡Ⅲ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 奥谷南遺跡Ⅲ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- 介良遺跡Ⅰ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 介良遺跡Ⅱ 高知市教育委員会 1998年
- 介良遺跡Ⅲ 高知市教育委員会 1999年
- 高知市遺跡地図台帳(二訂版)高知市教育委員会 2001年
- 金地遺跡 南国市教育委員会 1992年
- 岡豊城跡－第1～5次発掘調査報告書－ 高知県教育委員会 1990年
- 岡豊城跡Ⅱ－第6次発掘調査報告書－ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- 比江廃寺跡発掘調査概報 高知県教育委員会 1991年

第三章 調査成果

第1節 基本層序

基本層序1（第7図）は、I区北東部で観察したものである。①層は耕作土であり、②層は床土である。③層は、にぶい黄橙色粘質土であり、この層の上面で遺構を検出した。③'層・⑤～⑧層・⑨層はSD1の埋土であるが、③'層と⑨層については不確実さが残る。③'層は遺構面形成土層である③層と酷似しており、SD1の立ち上がりは非常に曖昧であった。⑨層についてはSD1の平面で検出したラインとややずれていることから土坑等の遺構が重複している可能性がある。

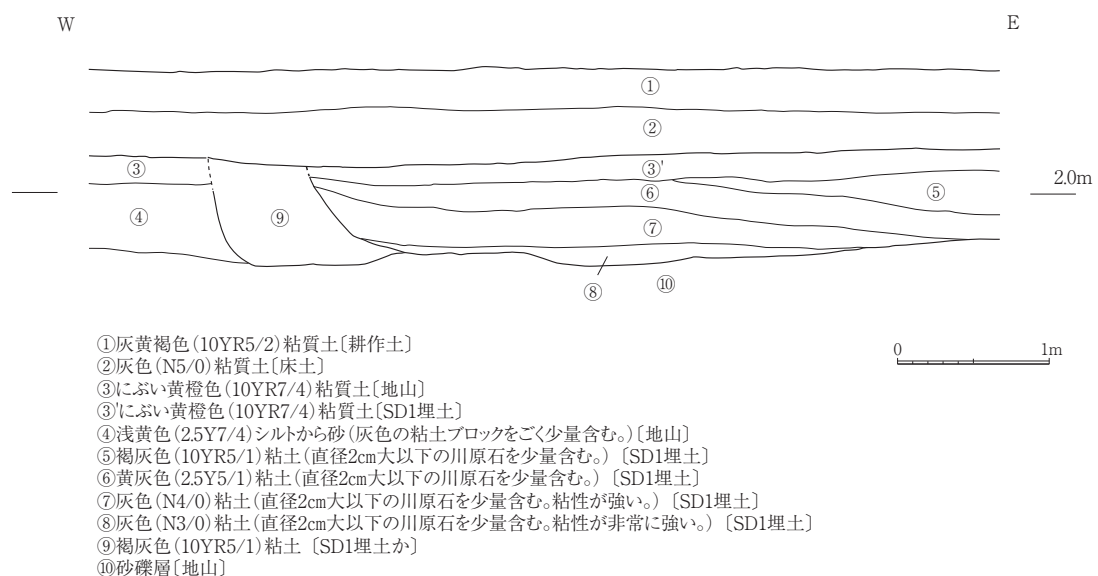
柱状図1は、I区南東部で観察したものである。①層は耕作土であり、②層は床土である。③層は灰色砂層、④・⑤層は灰色粘土層である。⑥・⑦層は青灰色砂層、⑧層は砂礫層である。

柱状図2は、I区北東部で観察したものである。①層は耕作土であり、②層は床土である。③・④層は灰色粘土層であり、④層には流れ込みと思われる土器片をごく少量含む。⑤層は明黄褐色粘土層であり、遺構面を形成する土層と考えられる。⑥層は明緑灰色の細砂混じり粘土層であり、⑦層は砂礫層である。

柱状図3は、I区南東部で観察したものである。基本層序1の南に位置する。①層は盛土である。②層は、にぶい黄色の粘質土であり、③層は黄灰色粘質土である。④層は灰白色粘土、⑤層は灰色粘土である。⑥層は、にぶい黄橙色粘土層であり、層厚約2cmと非常に薄い。⑦層は浅黄色粘土であり、この層の上面で遺構を検出した。

柱状図4は調査区外ではあるが、体積状況を確認する機会を得たので簡単に記録を作成した。概ねS33グリッド付近に位置する。盛土下は灰色粘土層であり、I区南部の様相と一致する。遺構面を形成する土層はみられなかった。

以上の所見からI区の堆積状況は現地表から耕作土、床土、無遺物層、遺物包含層、遺構面を



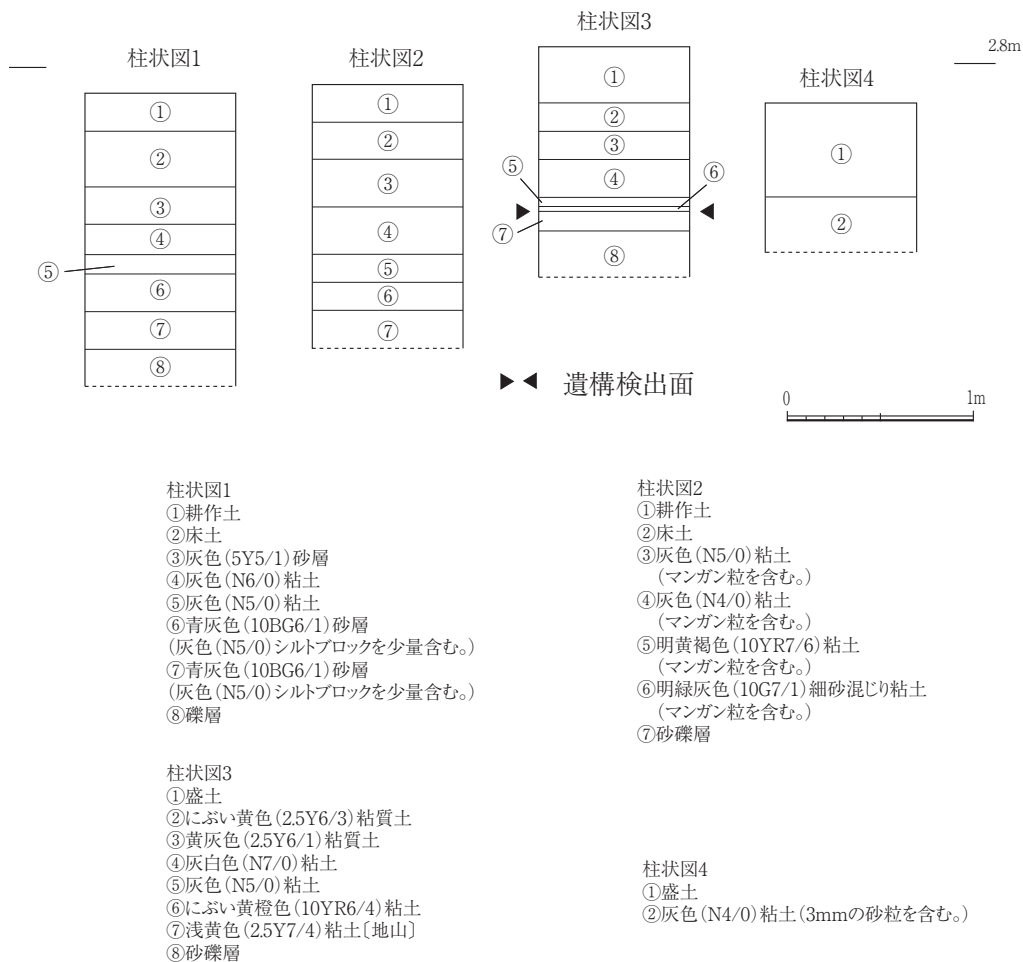
第7図 I区基本層序1

形成する土層、砂層、礫層の順である。表土、床土、砂礫層は調査区全面に分布している。遺物包含層については調査区の北端中央部のみに分布しており、SD5と平面的に重複する。後述するがSD5の埋土は拳大の砂礫まじりの粘土であり、水流の強い力により一気に埋まったような状況を呈している。このことから遺物包含層形成とSD5の埋没は密接に関連している可能性があり本来は一体的に捉えられるものと推測される。遺構面を形成する土層は調査区東部と北部に分布するのみであり、それら以外は灰色粘土の無遺物層が堆積している。また、微地形的には北東方向から南西方向にむかい標高が低くなる傾向がある。

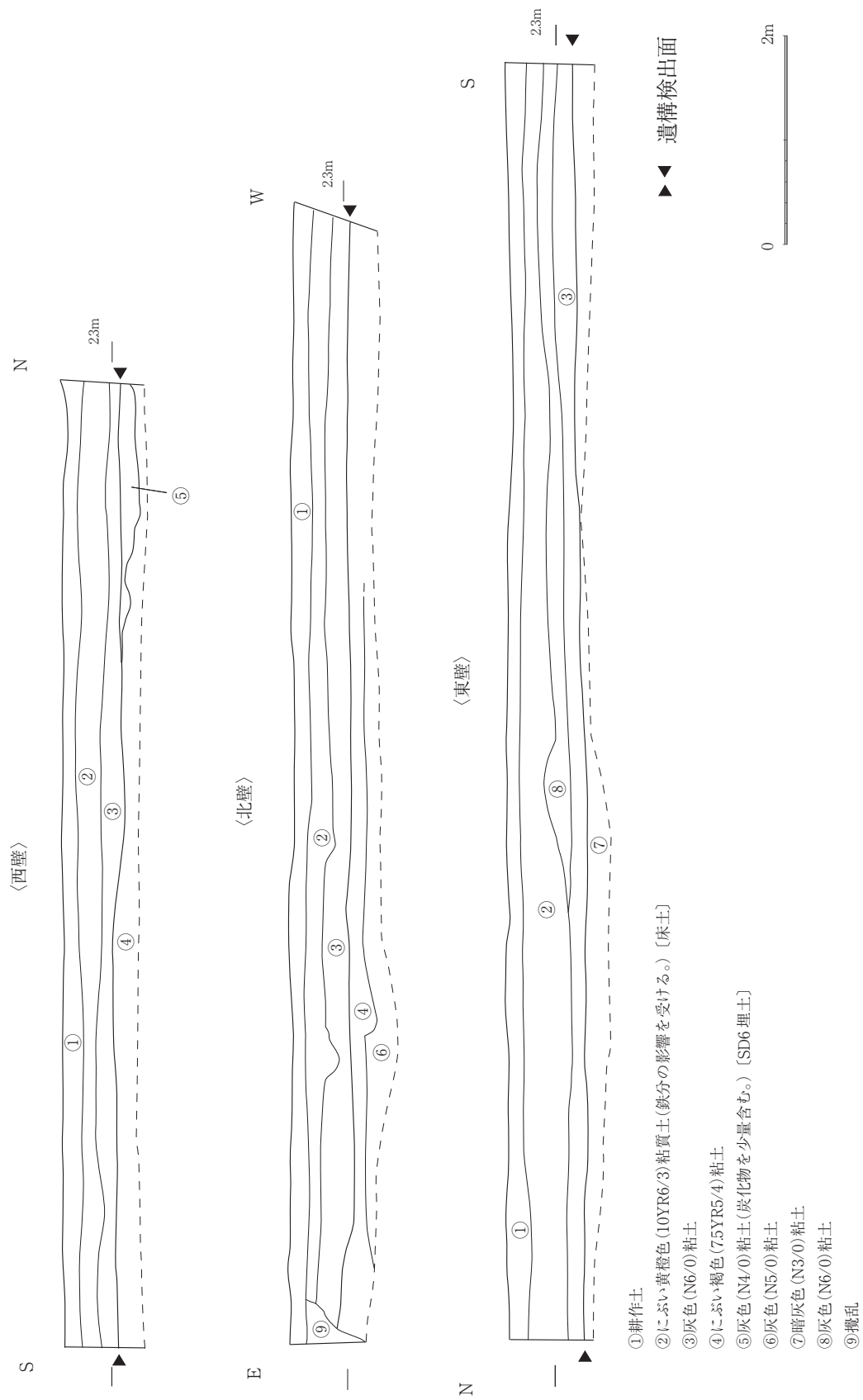
II -1区は東壁、北壁、西壁で土層の堆積状況を観察した。

①層は耕作土、②層は床土であり、調査区全域に分布する。③・⑧層は灰色粘土の無遺物層であり、調査区全域に分布する。西壁・南壁では④層であるにぶい褐色の上面で遺構を検出した。東壁では⑦層である暗灰色粘土の上面で遺構を検出した。

地下水の影響からかI区に比べ全体的に色調は暗い。また、遺構面を形成する土層は北東方向に下がっている。



第8図 I区基本層序2



第9図 II区基本層序

以上の所見から、遺構面が残存している範囲はⅠ区では北～北東部、Ⅱ－Ⅰ区では南～北東部に掛けてであり、現況道路を挟んで南東～北西部にかけて幅約30mのやや狭い自然堤防状の微高地上に遺構が展開していることになる。また、試掘確認調査結果を考慮に入れると微高地は東側へはのびていない。また、周辺の微地形、遺跡の分布から今回の調査で明らかになったような幅の狭い自然堤防状の微高地が複数存在するものと推測される。

第2節 Ⅰ区の遺構と遺物

(1) ST1

調査区北東部(Q24グリッド)で検出した竪穴住居跡である。SD2を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸約3.5m、短軸約3.0m、検出面からの深さは約0.1mである。埋土は大きく三層に分層でき、Ⅰ層は褐灰色(7.5YR4/1)粘質土、Ⅱ層は炭化物層、Ⅲ層は褐灰色(7.5YR4/1)粘質土である。焼土は東端部に偏在する。焼土下には土器が置かれていたような状況で出土した。炭化物は住居跡の中央部周辺に分布が認められた。床面精査時には四隅にピットを4基検出し掘削したが、その結果2基についてはシミによるものであった。残りの2基は支柱穴と考えられるが、ともに規模は小さく支柱穴として機能していたかは不明瞭である。中央ピットはSD2との重複のため、正確な平面形、規模を確認できなかったが、竪穴住居跡のほぼ中央に不整形の土坑状の落ち込みを復原できる。

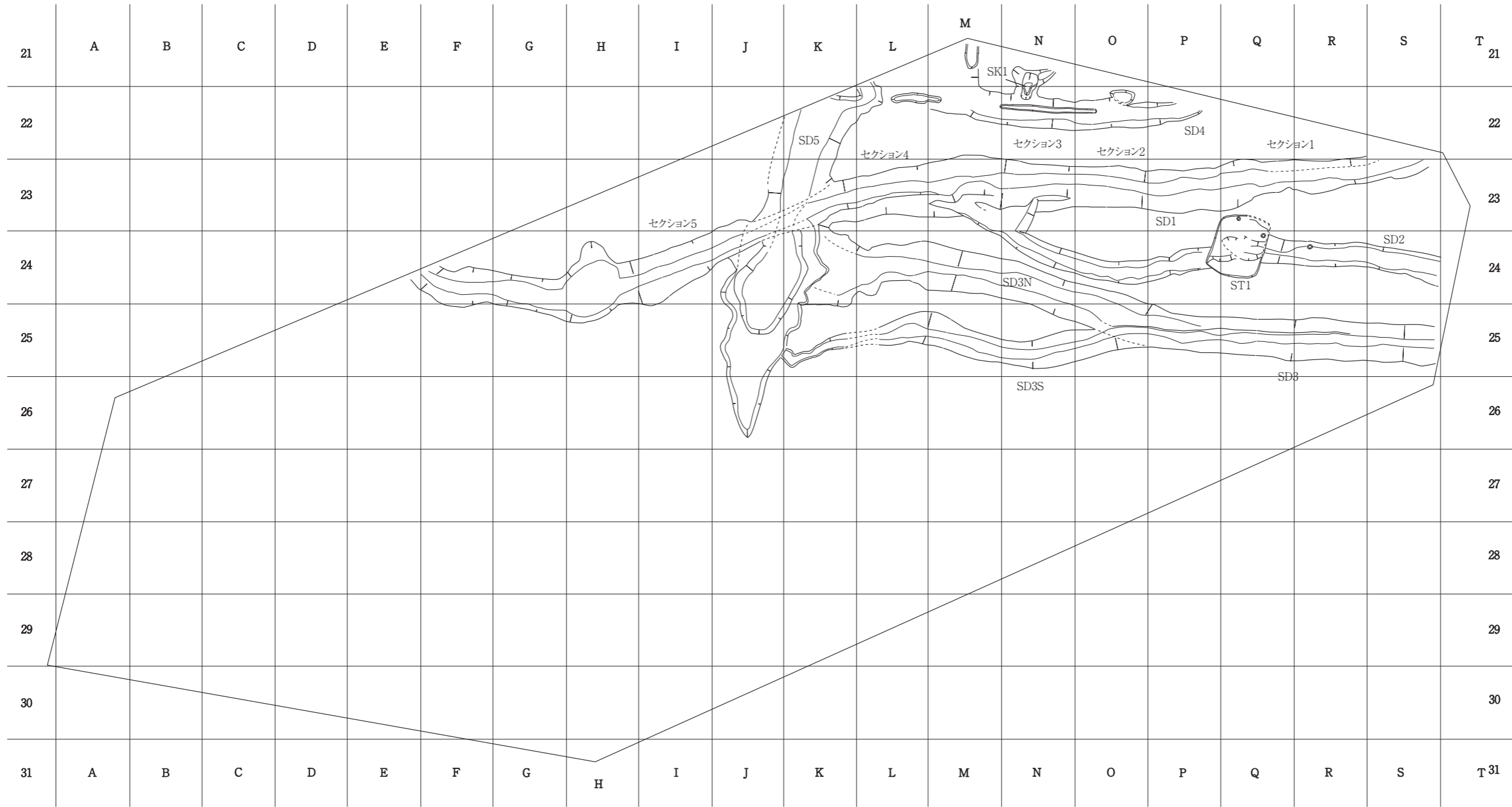
出土遺物は弥生土器、石器が少量出土しているのみである。7は壺の口縁部であり、粘土接合面で剥離している。口唇部は強いヨコナデにより凹面状を呈し、上下に僅かに突出する。全体的に摩耗しており調整は不明である。8は小形甕の口縁部である。叩き後、粗いハケ調整を施す。外面に煤が付着する。9～10は鉢である。8は頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は外反し、口唇部はヨコナデにより平坦を意識する。外面はナデ調整、内面はハケ調整である。10は底部片である。外面には叩き目が明瞭に残存する。底端部を指頭により丸みを持たせる。11は器壁が薄く全体的に丁寧なつくりの鉢である。外面は僅かに叩き目が見られるが全面にナデ調整が施される。内面もナデ調整と考えられるが、ハケ目状に調整痕が認められる。胎土には直径4mm大以下の小礫が目立つ。12は支脚と考えられる。中実であり、端部はひろがる。全体的に摩耗しており調整は不明である。二次被熱の痕跡が認められるが、破断面にも見られることから本来的な使用での痕跡かは即断できない。鉄器製作に使用された可能性がある石器、水銀朱が付着した石器等が出土していること、床面積が小形に属することから工房的な性格の建物であった可能性がある。

出土遺物から時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭である。

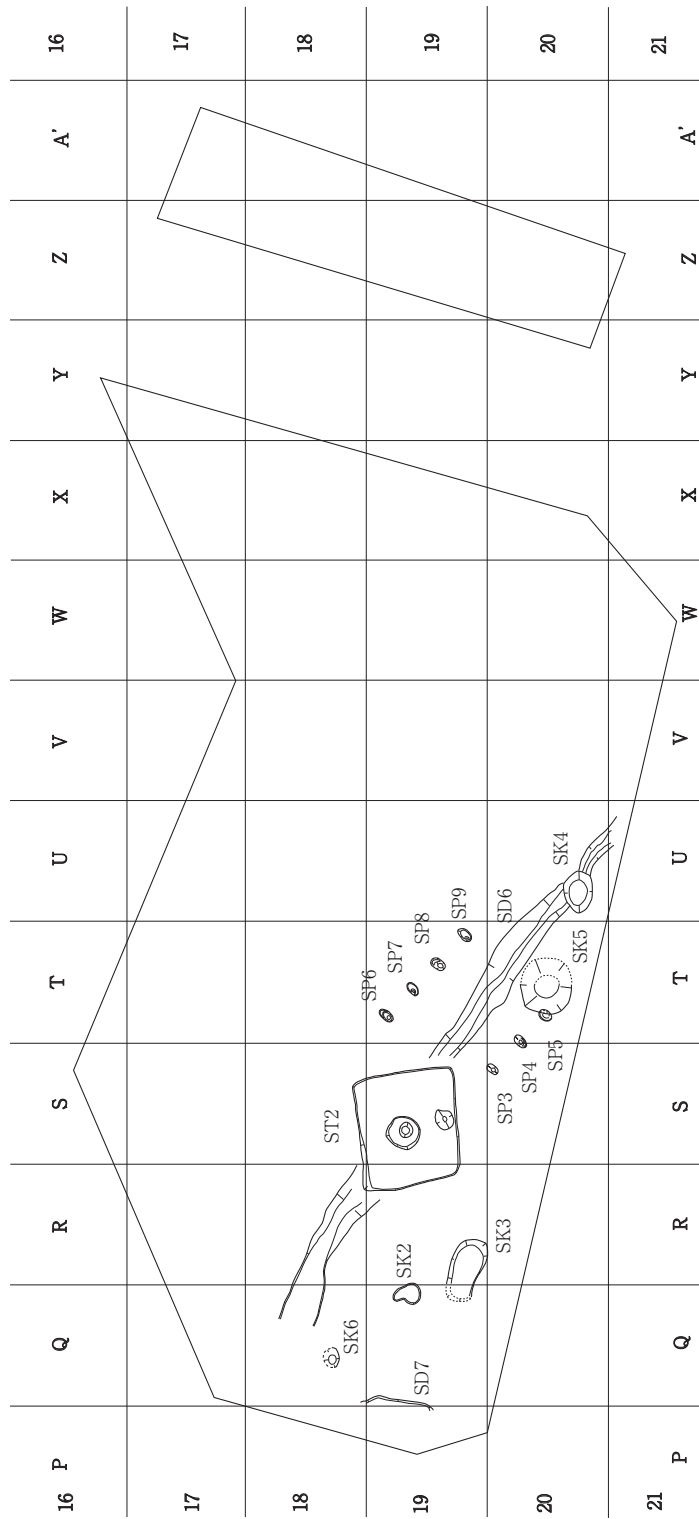
(2) SD1

調査区北部で検出した。幅1.7～2.5m、深さ0.26～0.48mであり、約56mを検出した。調査区東北端からはほぼ直線的に西走し、ごく僅かに蛇行しながらさらに西へのび、両端は調査区外へと続く。SD5に切られる。また、SD2に接続する。

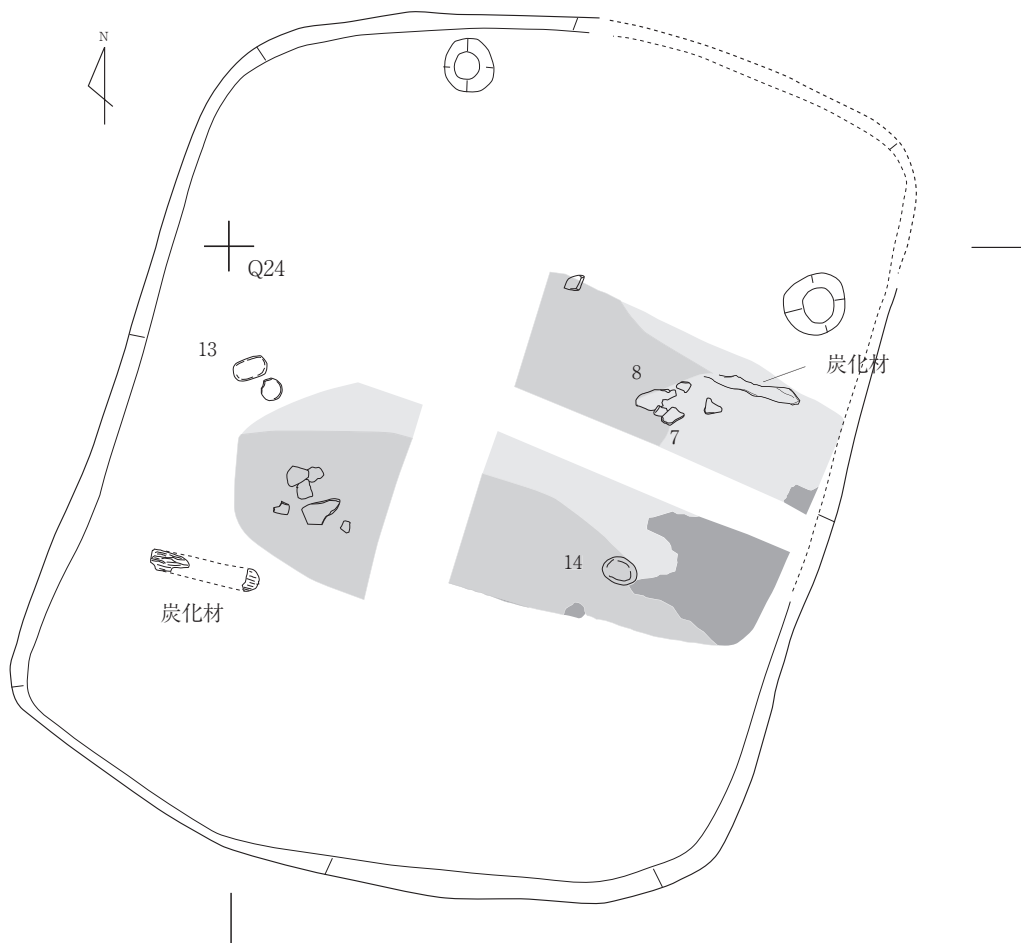
5ヶ所でサブトレンチ・セクションベルトを設定し溝の断面形、埋土の堆積状況等を把握することに努めた。セクション1はQ23グリッドに位置し、調査区内では最も東側に位置する。断面形



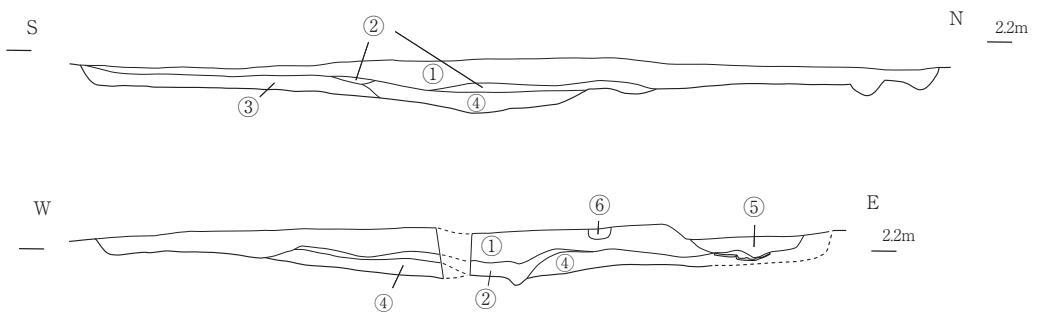
第10図 I区遺構配置図



第11図 II区遺構配置図



- 炭化物の薄い分布範囲
- 炭化物の濃い分布範囲
- 焼土の分布範囲

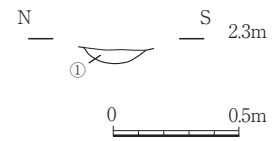


- ① 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土
- ② 炭化物層
- ③ 褐灰色(7.5YR5/1)粘質土
- ④ 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土
- ⑤ 焼土層
- ⑥ 攪乱



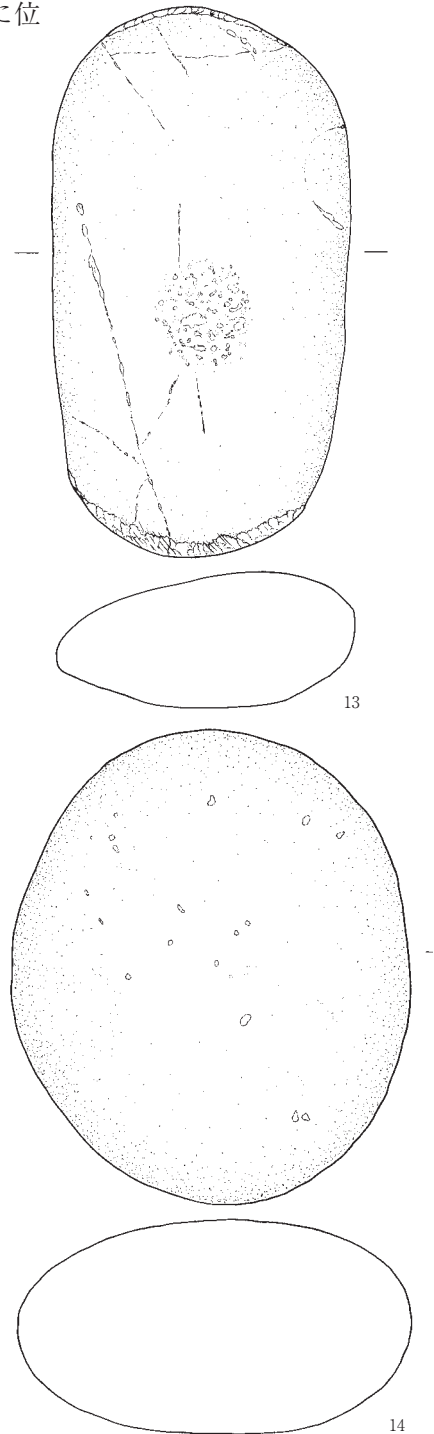
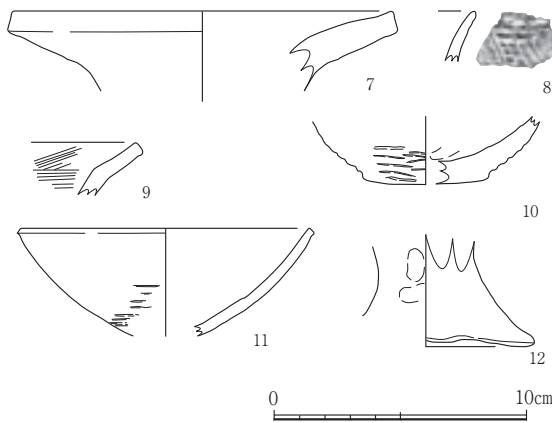
第12図 ST1 遺物出土状況図・セクション図

は逆台形を呈し、埋土は二層に分層できる。I層は褐灰色(10YR4/1)粘土で直径3cm大以下の川原石を少量含む。比較的均質な層である。II層は灰色(5Y5/1)粘土であり粘性が非常に強い。色調は灰色が強い部分があれば、褐色が強い部分もある。I層よりもII層の方が堆積が厚い。セクション2はO23グリッドに位置する。断面形はレンズ状を呈する。埋土はセクション1と同様であるが、I層の方が堆積が厚い点が相違する。セクション3はN23グリッドに位

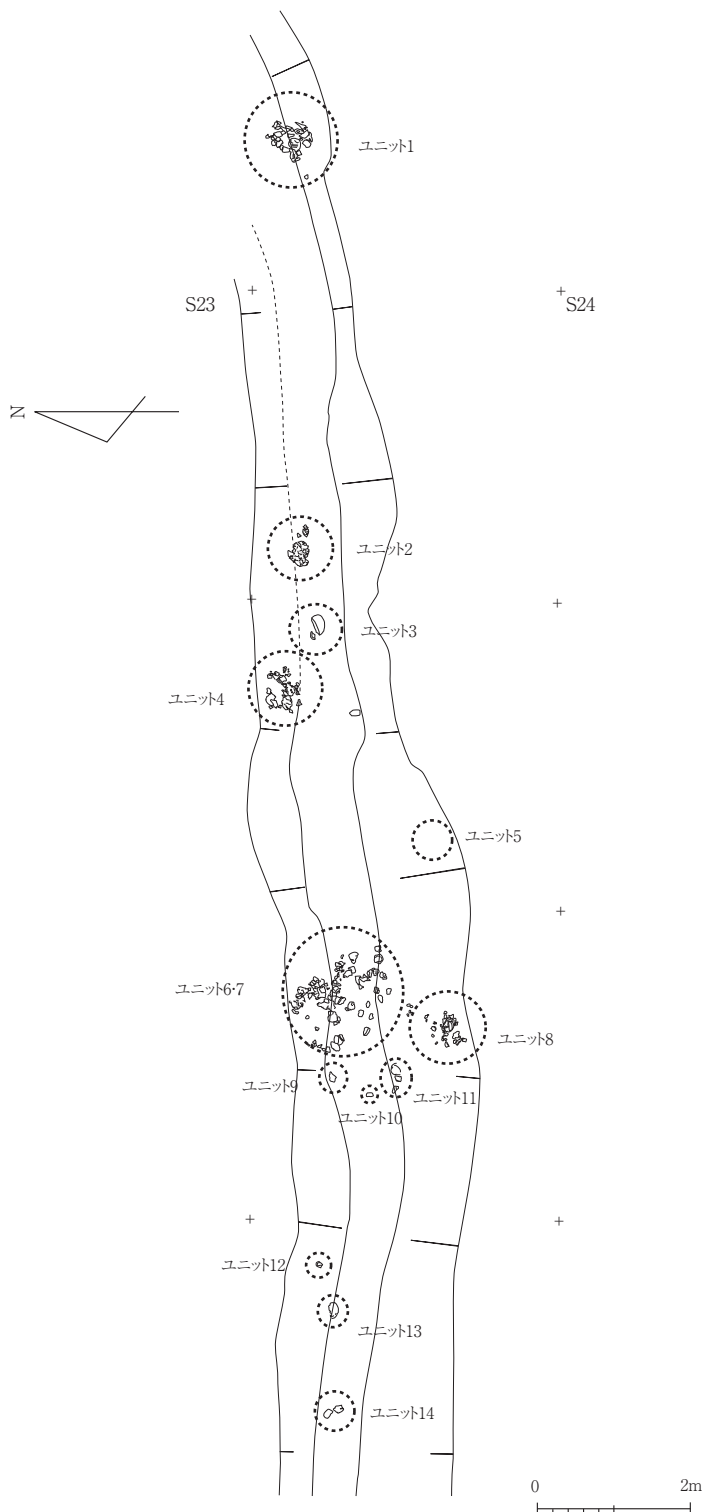


①灰色(N4/0)粘質土
(炭化物を含む。)

第13図 ST1-P1セクション図



第14図 ST1出土遺物実測図

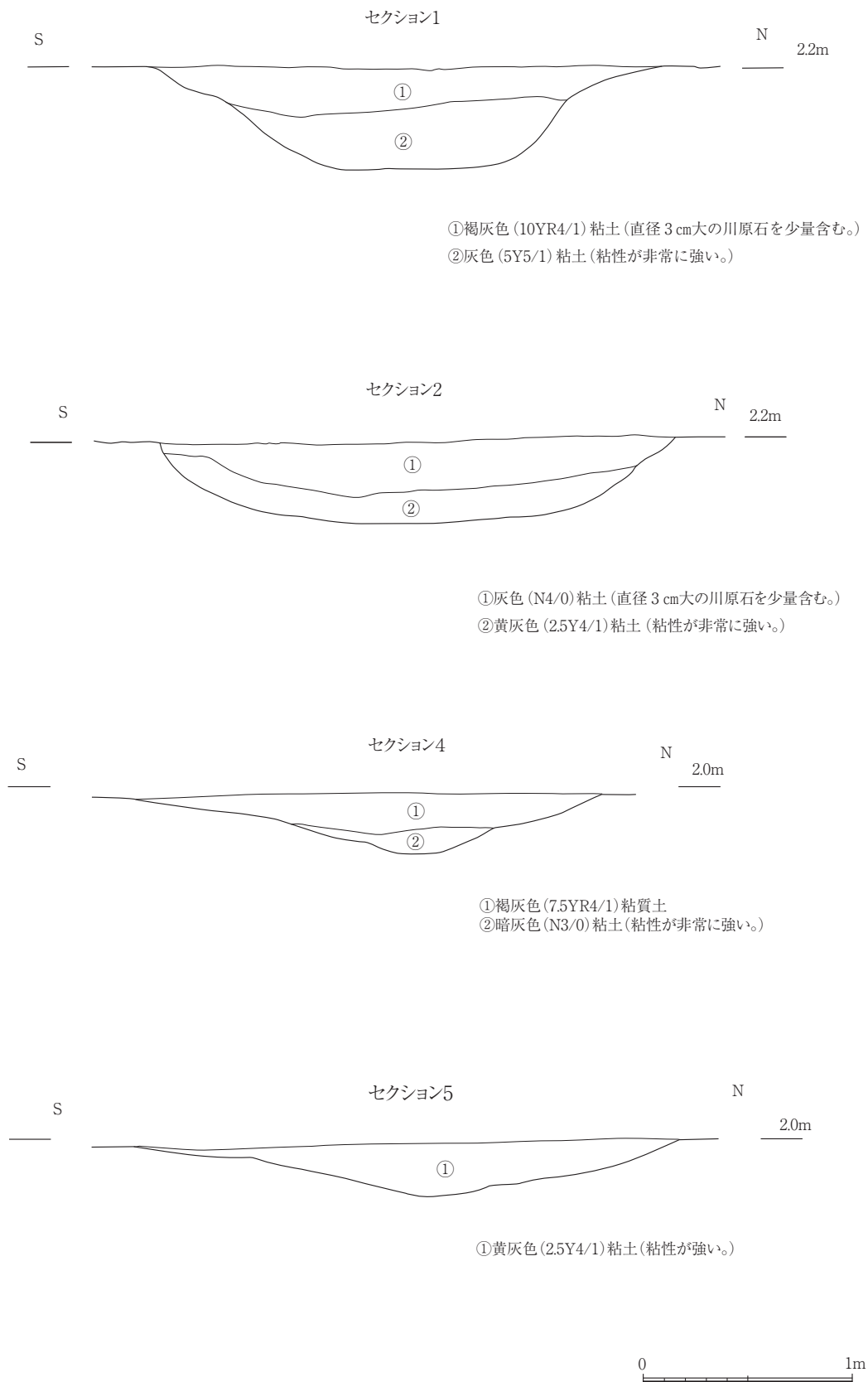


第15図 SD1遺物出土状況図

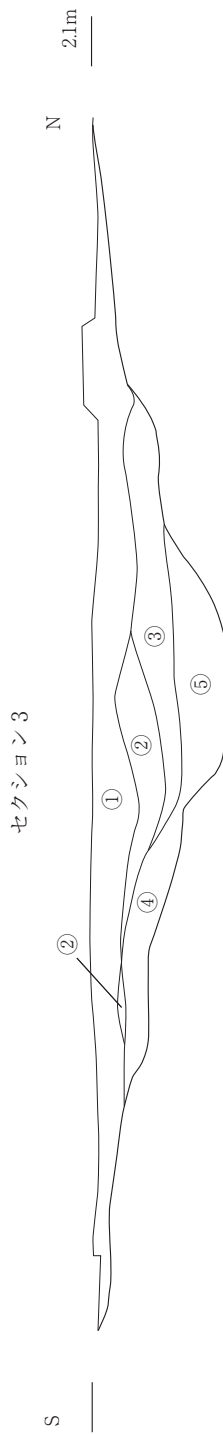
置する。断面観察から複数時期の溝が重複していた可能性もある。⑤層は立ち上がりも直線的であり、断面形は逆台形を呈している。①～④層の断面形はレンズ状を呈する。セクション4はI24グリッドに位置する。断面形はレンズ状を呈し、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)粘土の単一層で下層は粘性が強い。

出土遺物は各層から出土しており最下層からの出土は少なかった。多くは肩部の傾斜に沿う形で出土している。特に北肩で多くの遺物が認められた。弥生土器(壺・甕)・石器(伐採斧・加工斧・石包丁)が出土している。

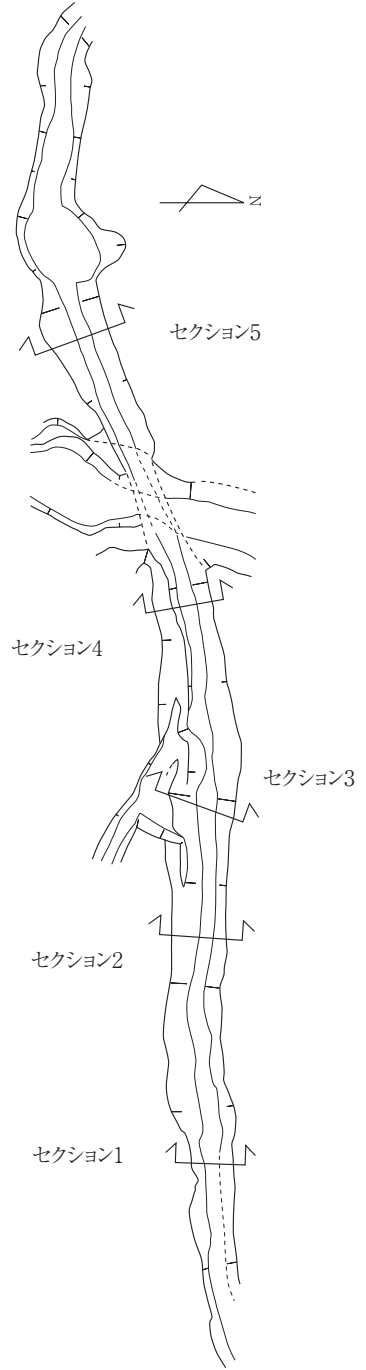
16～145は壺である。16は粘土帯貼付、口唇部両端に刻目を施す。口縁部内面に櫛描波状文を施す。17は幅の狭い粘土帯を貼付し、全面に刻目を施す。頸部に弱い微隆起突帯文を2条巡らせる。内外面はにぶい黄橙色、断面は暗灰色を呈する。いわゆる薄手式系の土器である。18は口縁部下に微隆起突帯文を2条巡らせる。胎土には砂粒を多く含む。薄手式系の土器である。19は器壁の厚さからやや大形の壺のものと推測される。口唇部は凹面状を呈し、上下端にハケ状原体により刻目を施す。また、口縁部内面にはハケ状原体による刻目を施す。20は粘



第16図 SD1セクション図1

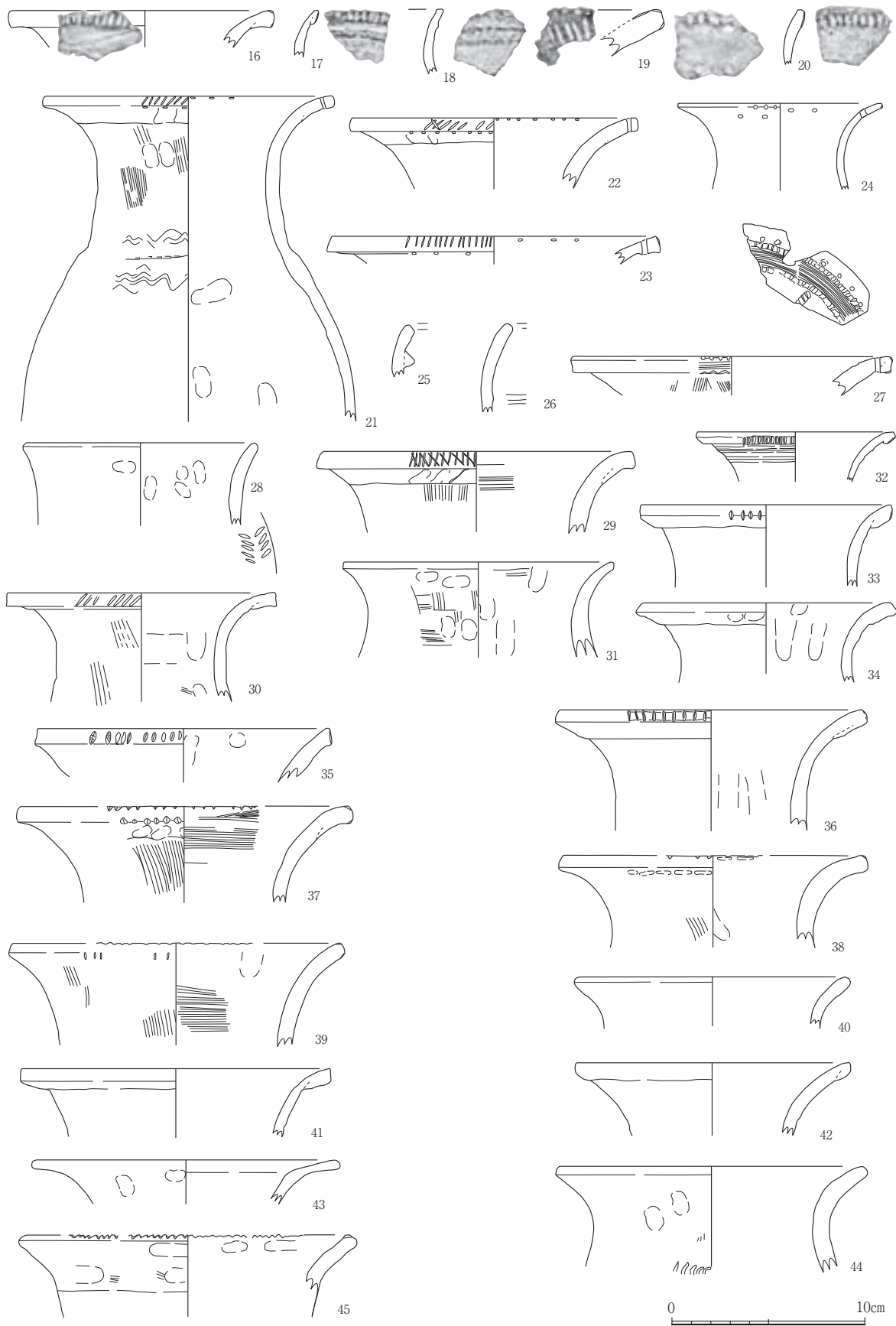


- ① 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 (II層)
- ② 暗灰色 (N3/0) 粘質土 (I-II層)
- ③ 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 (II層)
- ④ 灰色 (N5/0) 粘質土 (II層)
- ⑤ 灰色 (N4/0) 粘土 (粘性が非常に強い) (III層)

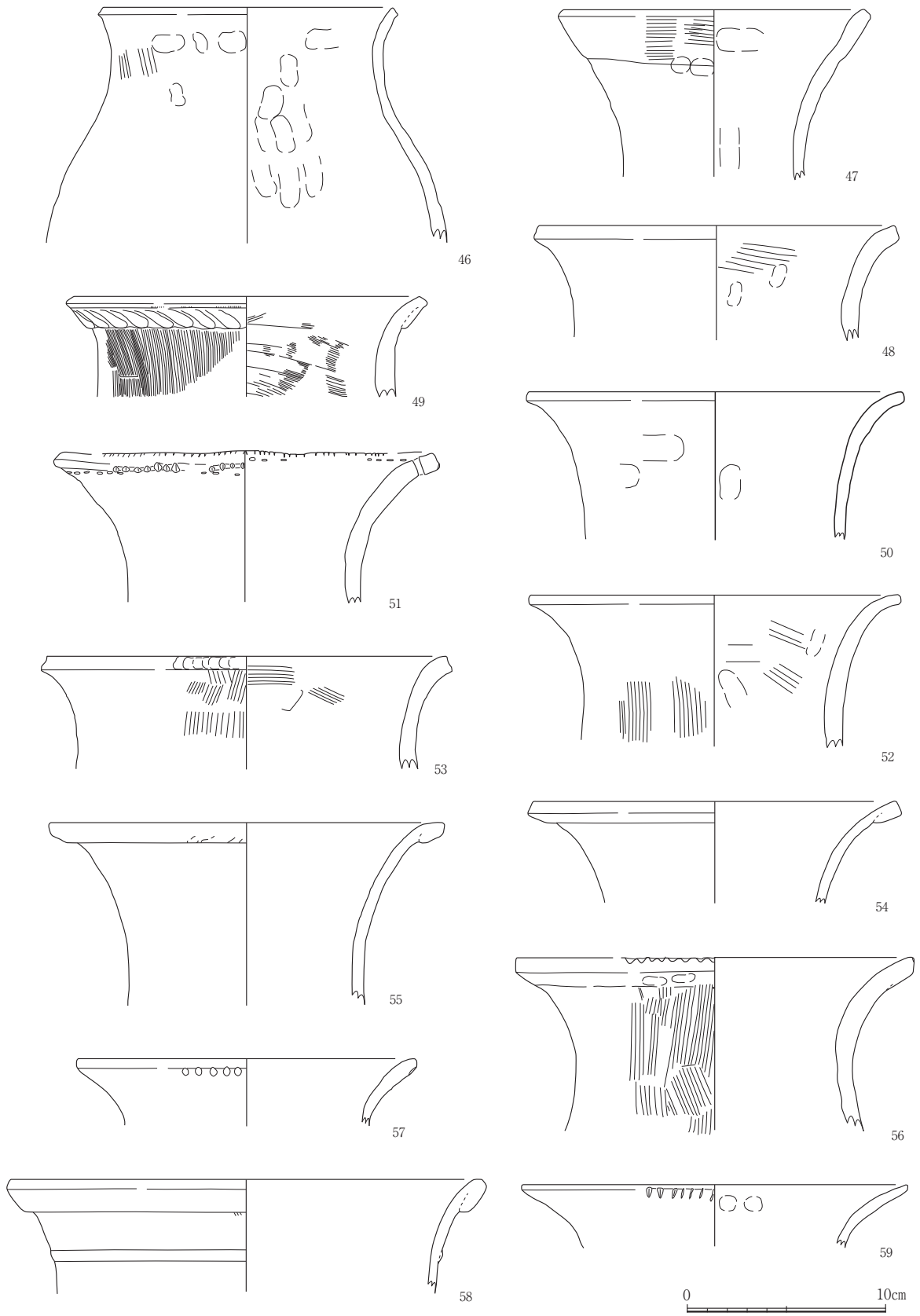


第17図 SD1セクション図2・セクション位置図

土帯を貼付し、全面に刻目を施す。胎土には非常に多くの砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。薄手式系の土器である。21は口縁部から中胴部にかけて残存している。中位に最大径の体部、やや短めの頸部、大きくひらく口縁部を持つ。やや摩耗しており調整痕、文様は不明瞭であるが外面にはハケ目がみられる。施文部位は口縁部と上胴部である。口縁部は粘土帯を貼付し、口唇部には斜位の刻目文を施す。また、数個1単位で穿孔するが、残存部位からは明確にはできない。上胴部には上から順に櫛描波状文、押し引き風の簾状文、櫛描波状文を施す。頸部に波状文風にナデ痕跡が見られるが文様ではない。22は粘土帯を貼付し、口唇部に斜位の刻目文を施し一定の間隔で逆方向の刻目を施す。また、口縁部に穿孔する。24は薄手式系であり、口縁部に穿孔を施す。25は最下層で出土した。口唇部は平坦面に仕上げられ、口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。26は頸部にほとんど屈曲部を持たずにややひらき気味に立ち上がり、口唇部は平坦を意識する。頸胴部の境目には僅かな隆起部分が認められる。甕の可能性はある。27は口縁部内面の加飾が特徴である。口縁部に粘土帯を貼付し、口唇部は凹面状を呈し、上下端に刻目を施す。また、凹面状の部分にはハケ目が巡る。口縁部内面には穿孔し、扁平な刻目状突帯を2条、同心円にレール状に貼り付け、内部に櫛描直線文を施す。さらに扁平な刻目状突帯を半円形に貼り付ける。外面はハケ調整であり、内面も下地のハケ目が見える部分がある。28は口縁部付近で僅かに外反させる。残存部位には文様は認められない。内外面、ナデ調整である。46と同類か。29は口縁部に粘土帯を貼付し、口唇部に刻目文を施す。30は21と同形態の壺である。口縁部に粘土帯を貼付し、口唇部に刻目文を施す。口縁部内面には羽状文を施す。31は頸部から口縁部へ厚さを減じる。頸部外面には横方向の調整痕と縦方向の調整痕が認められる。内面はナデ調整である。32は口縁部に粘土帯を貼付し、全面に刻目を施す。頸部には微隆起突帯を4条巡らせる。薄手式系土器である。33・34・36・37・41・42は口縁部に粘土帯を貼付する。33・36・37の口唇部に刻目を施す。35は口唇部全面にハケ状原体により刻目を施す。38・39の口唇部は凹面状を呈し、上下端に刻目を施す。44は頸部から口縁部にかけてなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。頸胴部の境目に刺突文が施される。45は粘土帯の接合痕跡を残す。口縁部は大きくひらき、端部を上方へつまみ上げる。口唇部上端に刻目を施す。内外面ともナデ調整であるが、外面には若干の凹凸が認められる。46は口縁部から上胴部にかけて残存している。口縁部はあまりひらかず全体の最大径は中胴部になると推定される。口唇部はヨコナデにより下方につまみ出される。外面はミガキ調整、内面はナデ調整であり、凹凸が認められる。47の口縁部はあまりひらかない。口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部は平坦に仕上げる。全体的にやや摩耗しているが、外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整である。胎土には直径5mm前後の小礫が目立つ。珍しい器形である。49は内外面ハケ調整後、粘土帯を口縁部外面に貼付する。上下の接合痕跡が明瞭に残存している。50の口縁部はあまりひらかない。器壁はやや薄い。混入の可能性はある。51は短い頸部を持ち口縁部は大きくひらく。口縁部は凹面状を呈し、上下端に刻目を施す。上端は線状、下端は大きめの刻目である。また、口縁部には6個一単位の円孔を配置する。頸部は無文である。52は直立した頸部から口縁部が大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。54～55は口縁部外面に粘土帯を貼付する。56のみ口唇部上端に刻目を施し、頸部外面はハケ調整である。57は口縁部が大きくひらき、



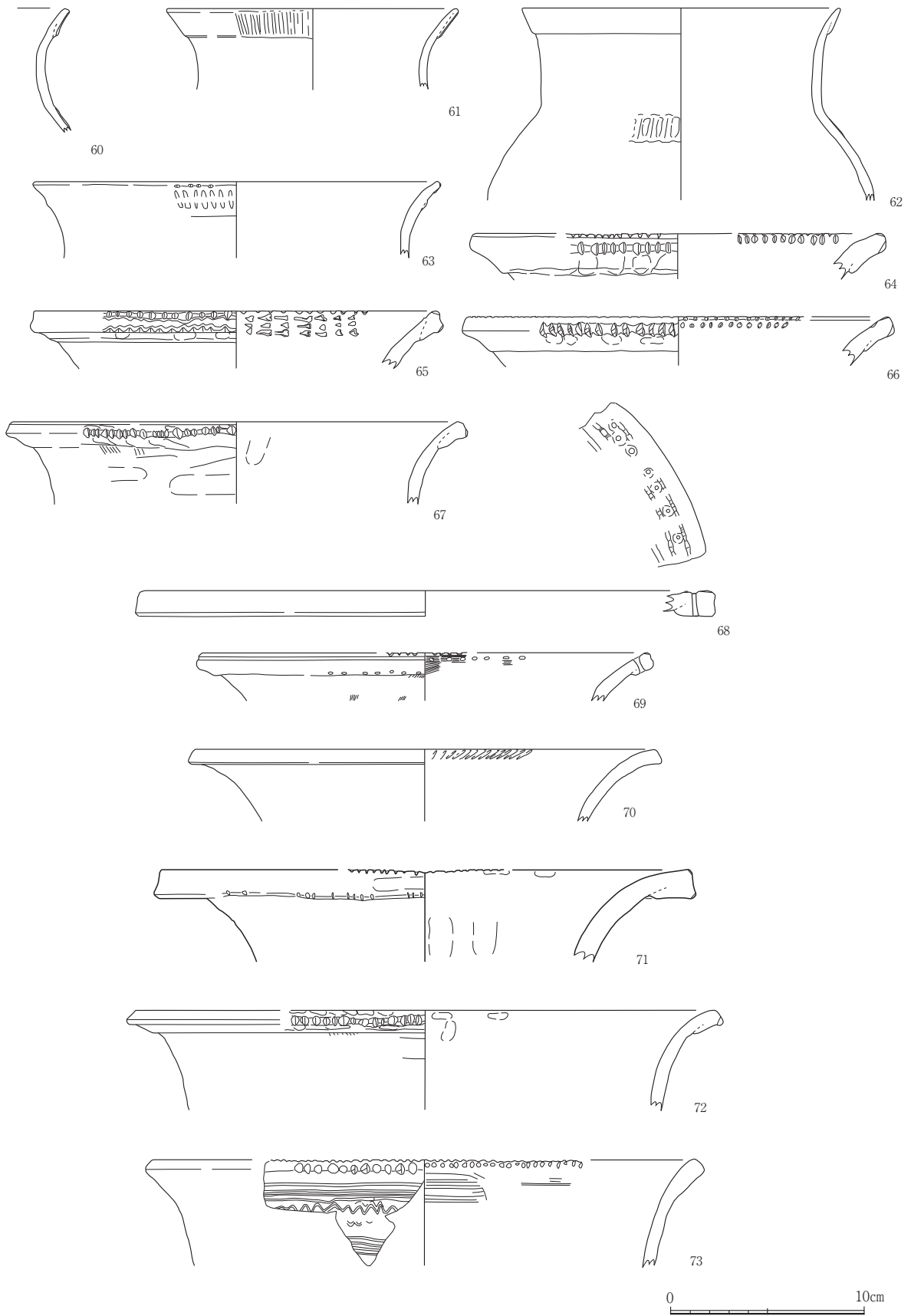
第18図 SD1出土遺物実測図1



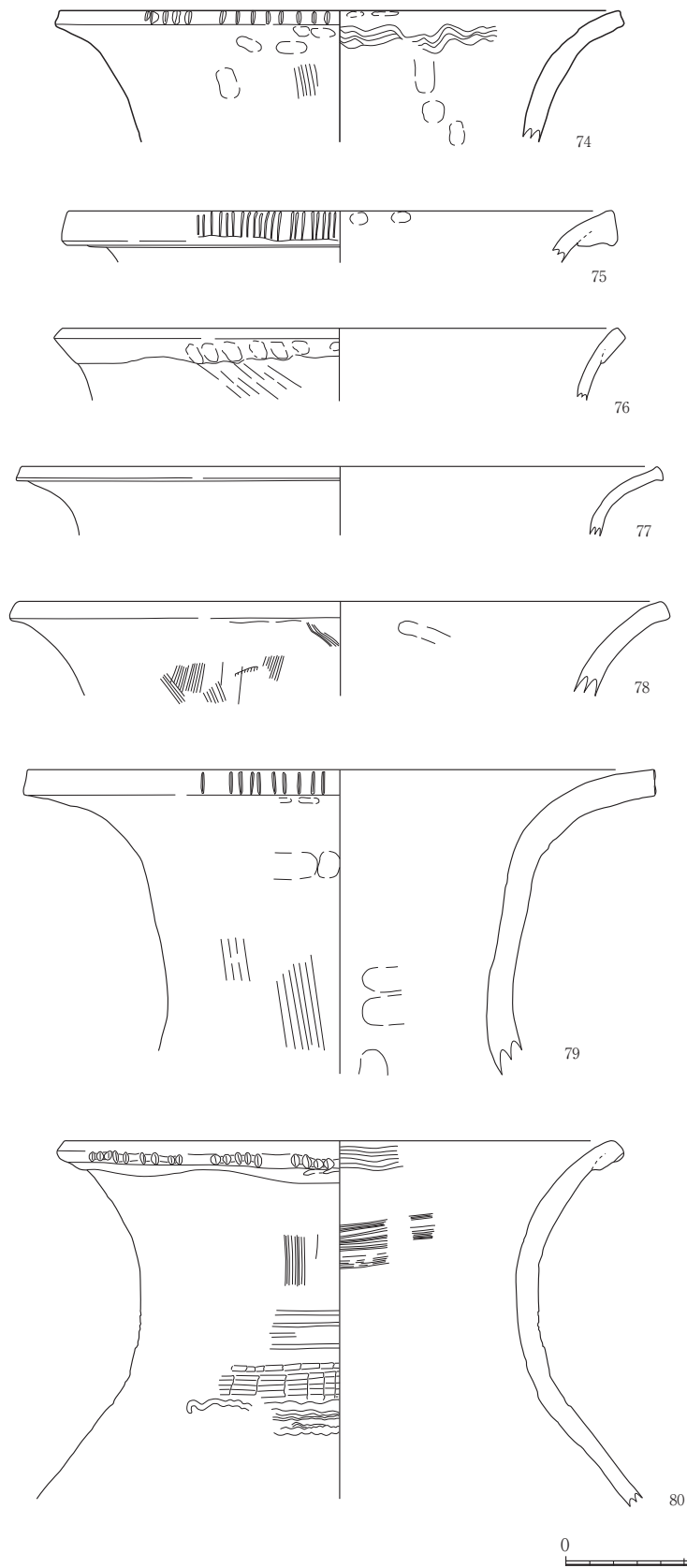
第19図 SD1出土遺物実測図2

口唇部は丸くおさめる。また、口縁部外面にやや縦長の刻目を施す。58は貼付口縁で粘土帯には立体感がある。頸部に断面カマボコ状の刻目突帯を貼り付ける。59の口縁部は大きくひらく。口縁部外面には縦長の刻目を施す。薄手式土器である。60は頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁部と頸胴部の境目に幅のややひろい扁平な刻目突帯を巡らせる。胎土に砂粒を非常に多く含み、色調は灰黄色からにぶい黄橙色を呈する。薄手式土器である。61も薄手式土器であり、胎土に非常に多くの砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。口縁部外面に幅広の扁平な刻目状突帯を巡らせる。62も薄手式土器であり、胎土に多量の砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。口縁部外面と頸胴部の境目に幅広の粘土帯を貼付する。本体は両方ともに刻目を施していたものと考えられるが、口縁部のものは摩耗のため刻目を確認できない。63は口縁部外面に縦長の刻目を施す。薄手式土器の範疇に含まれる。64・66は貼付口縁部であり、口唇部上下端に刻目を施し、さらに内面に刺突文を施す。65は貼付口縁であり、上下端を刻む。口唇部は明瞭に窪む。また、口縁部内面には押し引き風の簾状文を施す。67は最下層からの出土である。頸部から口縁部が緩やかにひらき、粘土帯を貼付する。口唇部は凹状を呈し、下端には不揃いの刻目を施す。頸部外面には横方向のナデの痕跡が残存している。68は貼付口縁であり、口唇部は凹状を呈する。摩耗しており刻目の有無は確認できない。内面には扁平な刻目突帯を3条、円孔を配置する。69は貼付口縁であり、口唇部は凹状を呈し、上端にはハケ状原体による刻目を確認できたが下端は摩耗のため刻目自体の有無は確認できない。内面にはハケ目が残存している。70の口縁部は大きくひらき、口縁部内面に刻目を連続的に施す。

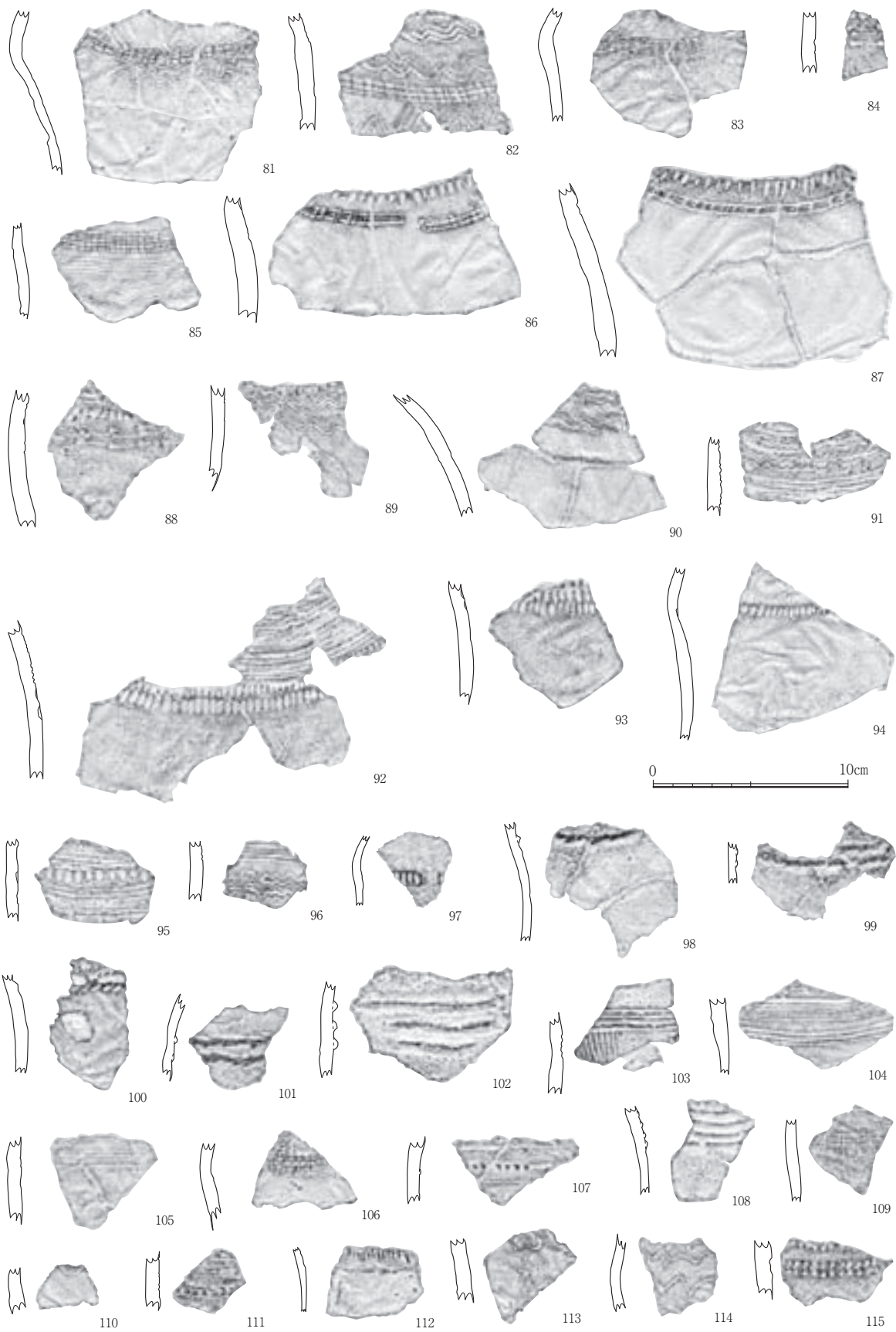
71は口縁部が大きくひらき、粘土帯を貼付する。口唇部は凹状を呈し、上下端には小振りな刻目を施す。72は貼付口縁であり、下端には不揃いの刻目を施す。外面には横方向のナデの痕跡が残存する。内面もナデ調整である。73は粘土帯貼付の接合痕跡は文様のため残存していないが、器壁は口縁端部付近で肥厚する。口唇部は僅かに凹む程度であり、上下端に刻目を施す。さらに内面には刺突文を巡らせる。外面には上から2本1単位の櫛描直線文を2単位、2本1単位の櫛描波状文を1単位、その下には判然としないが櫛描直線文が巡る。内面にはハケ目が認められる。74は口縁部が大きく外反し、内面に櫛描波状文を、口唇部には刻目を施す。75は貼付口縁であり、口唇部には刻目も密に施す。76は貼付口縁であり、粘土帯外面には指頭圧痕が残存している。口唇部は平坦に仕上げる。77は口縁部が大きくひろがり、口唇部は強いヨコナデにより僅かに上下に拡張する。胎土には砂粒を多く含み、断面の色調は黒色を呈する。薄手式土器である。78は口縁部外面に粘土接合痕跡を残すが貼付口縁ではない。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。81は上胴部に文様帯を持ち、上から押し引き風の簾状文、4条1単位の櫛描波状文を2単位施す。簾状文と波状文は同じ工具によるものと考えられる。内面には指頭圧痕による凹凸が目立つ。82は上胴部の破片であり残存部全面に櫛描文により飾られている。上から波状文、簾状文、波状文となるが、さらに上に文様の一部と思われる線が認められるが判然としない。簾状文は彫り込みが深く、施文具を復原するうえで重要である。83は頸部と胴部の境目から文様帯が始まっている。上から櫛描簾状文、櫛描波状文であり、それぞれが工具を細かく動かすことで施文する。84は体部片であり、外面に押し引き風の簾状文を施す。半裁竹管状の工具で施文する。85は上胴部の破片であ



第20図 SD1出土遺物実測図3



第21図 SD1出土遺物実測図4

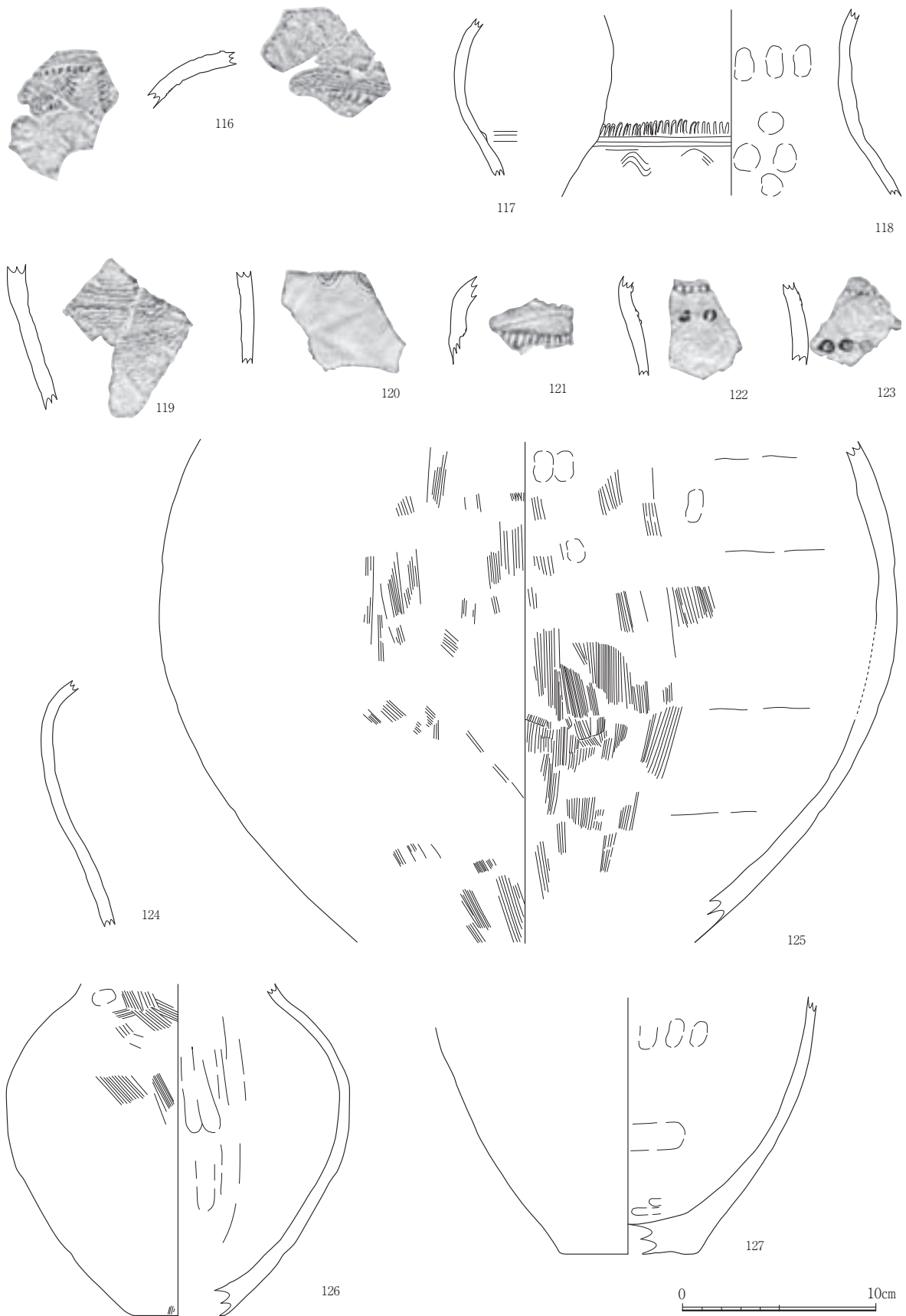


第22図 SD1出土遺物実測図5

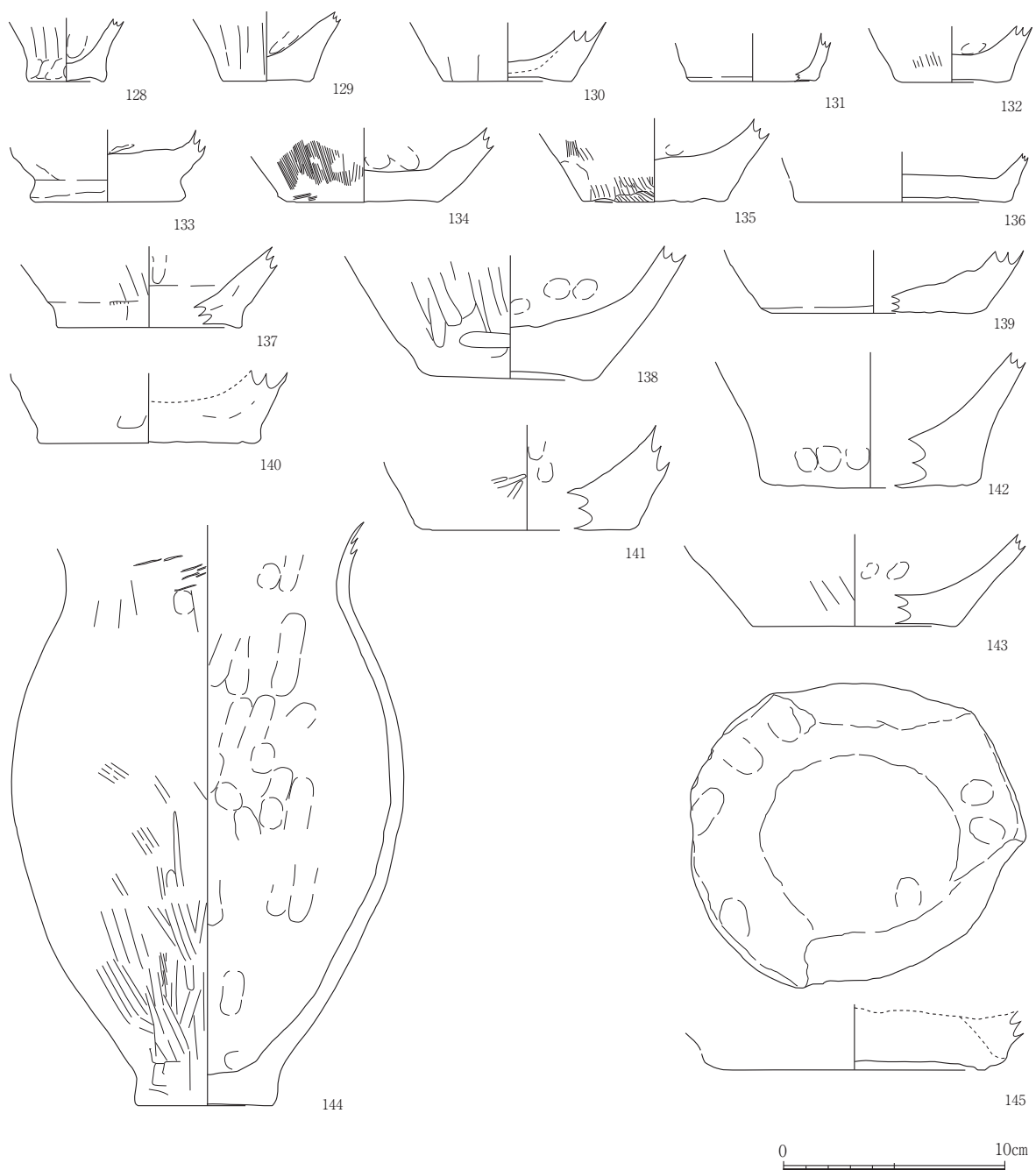
り、赤色塗彩されている。文様は上から押し引き風の櫛描簾状文、櫛描直線文、櫛描波状文を施す。すべて5条1単位で施文されており、同一工具によって施された可能性がある。外面にはハケ目が残存している。86・87は上胴部の破片である。ハケ状原体による刺突文、1ストロークの不揃いな押し引き風簾状文を施す。外面にはハケ目が残存する。88は頸部から上胴部にかけての破片であり、上から直線文、刺突文、押し引き風簾状文で飾られる。直線文は残りがよくなくヘラ状工具によるものかクシ状工具によるものか判然としない。2条の沈線文を巡らせた後に刺突文を施す。簾状文は右から左へ工具を動かし施文したもので、今回出土したものなかでは例外的である。胎土に雲母片を少量含む。89は上胴部の破片であり、上から押し引き風の簾状文、櫛描波状文を2単位施す。外面には横方向の調整痕が見られる。内面はナデによる調整であるが、凹凸が認められる。90は上胴部の破片であり、櫛描波状文を2単位施す。波状文よりも上に文様の一部が認められるが、特定できない。外面はハケ目状に調整痕が見られ、内面はナデ調整である。91は上胴部の破片である。外面には上から櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文を施す。直線文は太めの線で描かれる。内面はヨコ方向のハケ目調整である。92は上胴部の破片である。上から櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文、ハケ状原体による刺突文を施す。外面は横方向のハケ目調整、内面はナデ調整である。93は上胴部の破片であり、刺突文を3段施す。外面は工具により不定方向にナデられており、ミガキ状を呈している部分もある。94は頸部から上胴部にかけての破片であり、頸胴部の境目に刺突文を施す。

出土遺物から時期は弥生時代中期前半である。

95は体部片であり、上から櫛描直線文、刺突文、櫛描直線文を施す。96は体部片であり、上から櫛描直線文、櫛描波状文を施す。97は上胴部に幅広の粘土帯を貼付し、刻目を施す。胎土には多量の砂粒を含む。薄手式土器である。98～101は上胴部の破片であり、突帯を巡らせる。突帯は上下から粘土をつまみ寄せて成形する。100の外面には工具によるナデの痕跡が比較的明瞭に残存する。また、外面には煤が付着する。102は上胴部の破片であり、突帯を3条貼り付ける。98～101の突帯の成形手法が異なる。103は櫛描直線文を施し、直行する方向に櫛描文を施すが、半円形の一部と考えられる。104は体部片であり、外面に櫛描直線文を2条施す。櫛描文の上には押し引き風の簾状文が施されていたと考えられるが判然としない。105の外面にはタテハケ後、櫛描直線文を施す。106は頸胴部の境目にストロークの短い簾状文が施されていると思われるが摩耗しており判然としない。107は頸部の破片である。扁平な刻目状突帯、櫛描直線文を施す。108は体部片であり、突帯を4条貼り付ける。109は細い沈線2本1単位で3単位施し、同じ工具で縦方向に沈線文を施す。111は体部片であり、櫛描直線文を施し、半裁竹管文を施す。112は体部片である。細い縦方向の沈線、弱い微隆起突帯を1条巡らせる。薄手式土器である。113は体部片であり、ヘラ状工具により下向きの半円形を連続的に施す。114は体部片であり、2～3本1単位の工具で櫛描文を描くが乱雑である。下地のハケ目が残存している。115は体部片であり、刺突文、簾状文を施す。簾状文はストロークが非常に短く、刺突文状を呈する。116は口縁部の破片であり、内外面ともハケ調整である。口縁部内面には扁平な刻目状突帯、櫛描直線文で飾る。外面は口縁部が大きく外反する付近に櫛描直線文を1条巡らせる。117は頸部から上胴部にかけての破片であり、肩

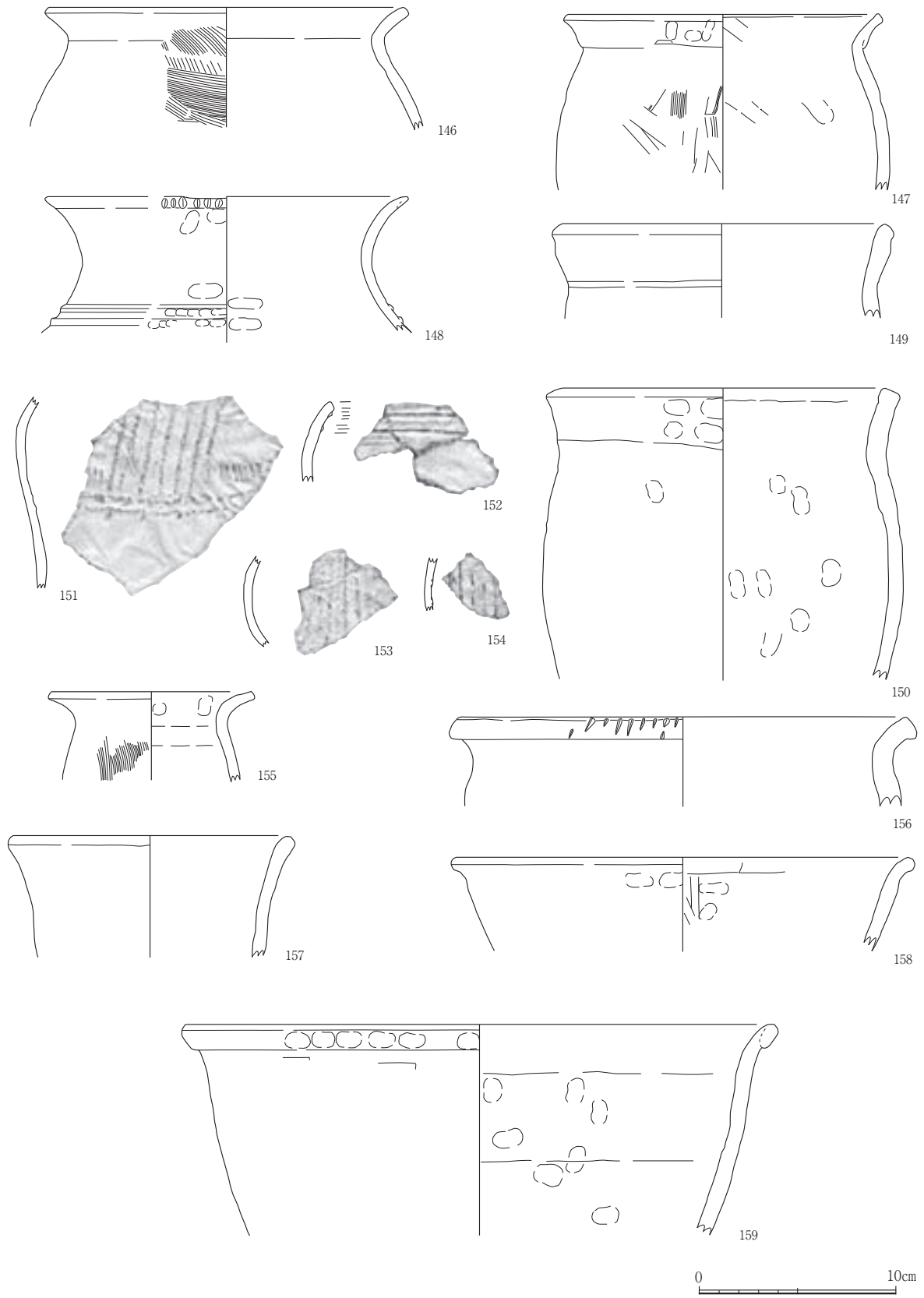


第23図 SD1出土遺物実測図6



第24図 SD1出土遺物実測図7

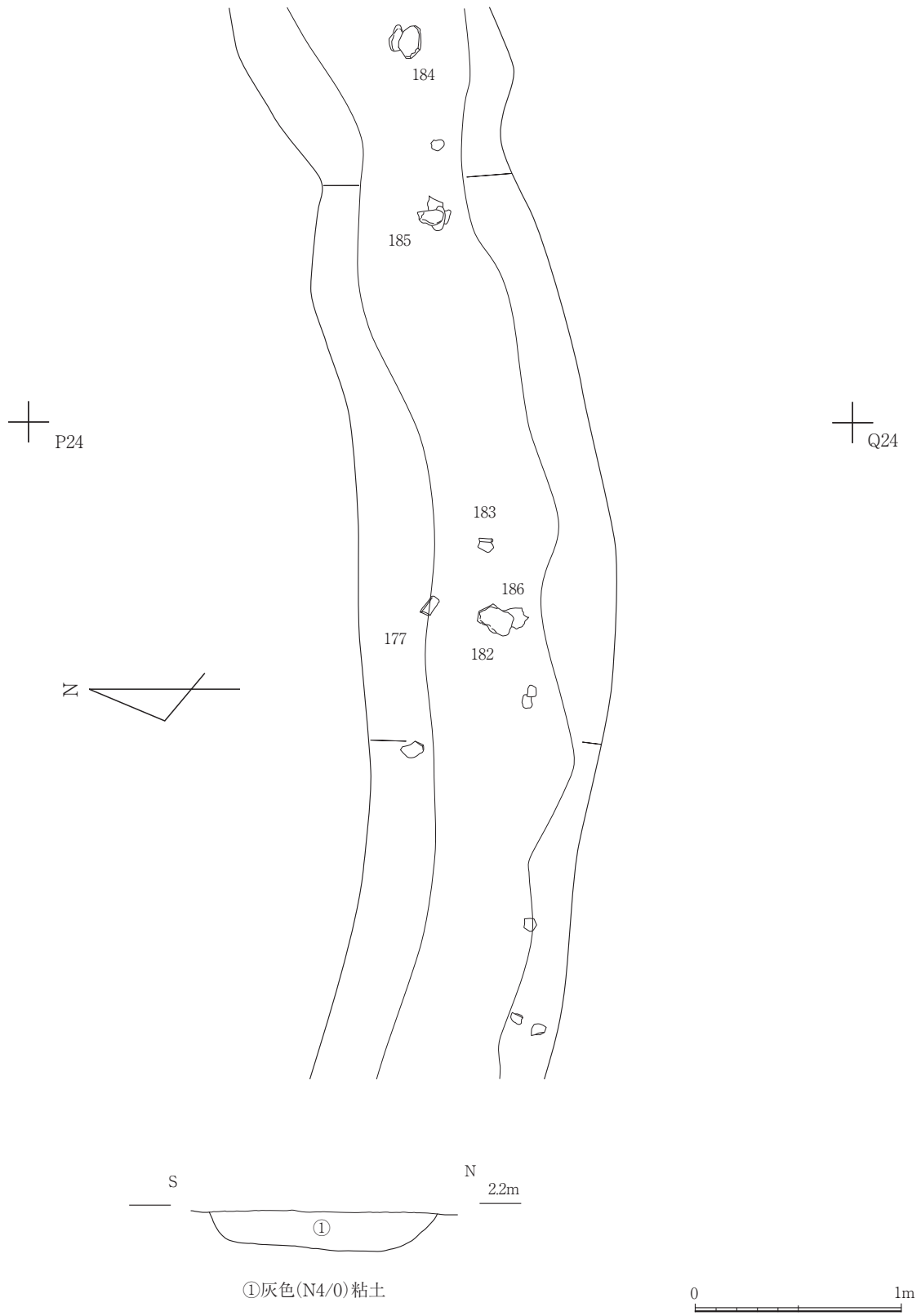
部から緩やかに外反する。直立部を持たない。頸胴部の境目に突帯を1条貼り付ける。118は頸部から上胴部にかけての破片であり、やや長目の頸部を持つ。頸胴部の境目に刺突文、その下に櫛描直線文、櫛描波状文と続く。土器はやや歪む。119は頸部から上胴部にかけての破片である。外面には押し引き風の櫛描簾状文、櫛描波状文を施す。簾状文は1ストロークは長短様々である。波状文は波長の高さ・振幅が小さいもので3条程巡らせる。120は体部片である。櫛描きの波状文あるいは重弧文が施される。外面にはハケ目が見られる。121は頸胴部の境目付近の破片であり、ハケ



第25図 SD1出土遺物実測図8

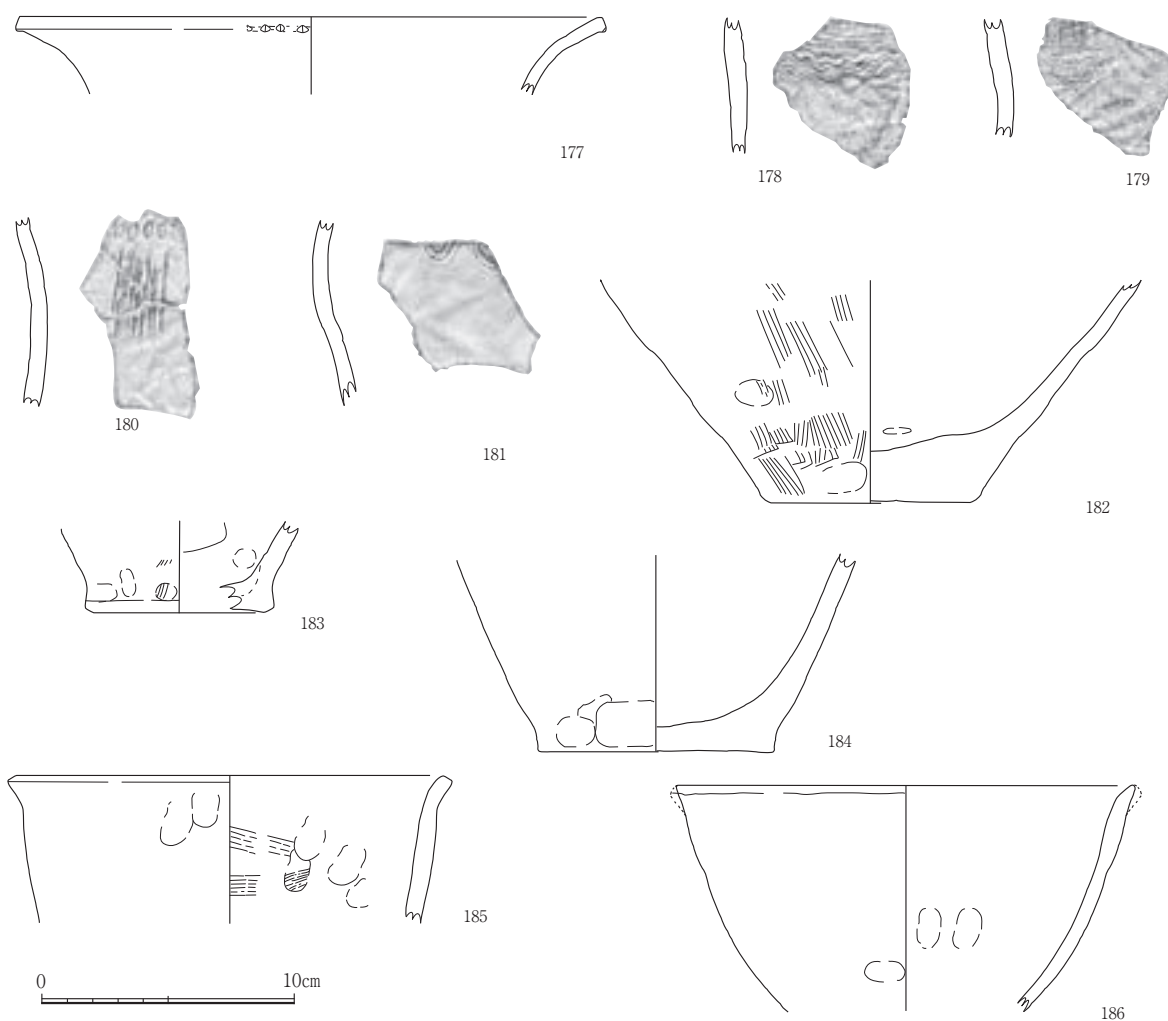


第26图 SD1出土遺物実測図9

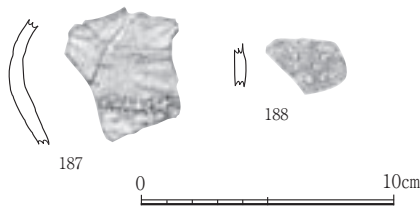


第27図 SD2遺物出土状況図・セクション図

状原体による刻目を施す。内外面ともナデ調整である。122・123は上胴部の破片であり、扁平な刻目状突帯、ドーナツ状浮文を貼り付ける。124は上胴部から口縁部にかけての破片である。口縁端部は欠損しているが、それほど伸びないと考えられる。上胴部からあまり絞らず、やや長目の頸部に続く。125は大形壺の胴部である。外面はハケ調整後ミガキ調整を施し、内面はハケ調整を施す。126～145は底部である。壺以外の器種のものも含まれていると考えられるが判別が難しい。直径が5 cm前後、7 cm前後、13 cm前後の3種類に分類できる。形態的には上げ底状のもの（128・130・132・137～139・141・143）、端部が突出するもの（133・137・144）、130・137は底部厚は側壁よりも薄い。外底面は外周に指頭圧痕による凹凸が認められるものが目立つ。131・136は胎土に砂粒を非常に多く含む。薄手式土器である。136は直径約10 cmであり、僅かに上げ底風である。144は口縁部以外の形態がわかる数少ない資料である。頸部はあまり締まらず、体部最大径を中位に持ち、底部は端部が若干突出する。器壁は総じて薄い。内面には粘土紐接合のための指頭圧痕が明瞭に残存し、外面はミガキ調整を施す。146～150は甕である。146・147は口縁部が「く」の字状を呈する。146の外面はハケ調整、147は工具によるナデ調整である。147は貼付口縁である。



第28図 SD2出土遺物実測図



第29図 SD1～2実測図

また、両者とも外面に煤が付着する。148は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。頸胴部の境目に2条の突帯を巡らせる。突帯は上下の粘土をつまみ寄せて成形するため、上下に爪の圧痕が残存する。貼付口縁であり、刻目を施す。胎土に砂粒を多く含み、断面は黒色を呈する。150は口縁部から上胴部にかけて

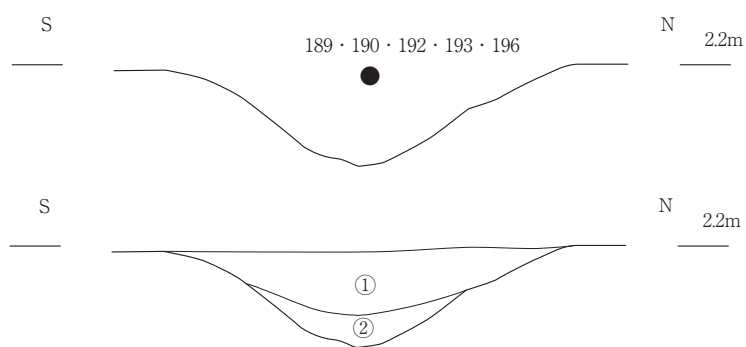
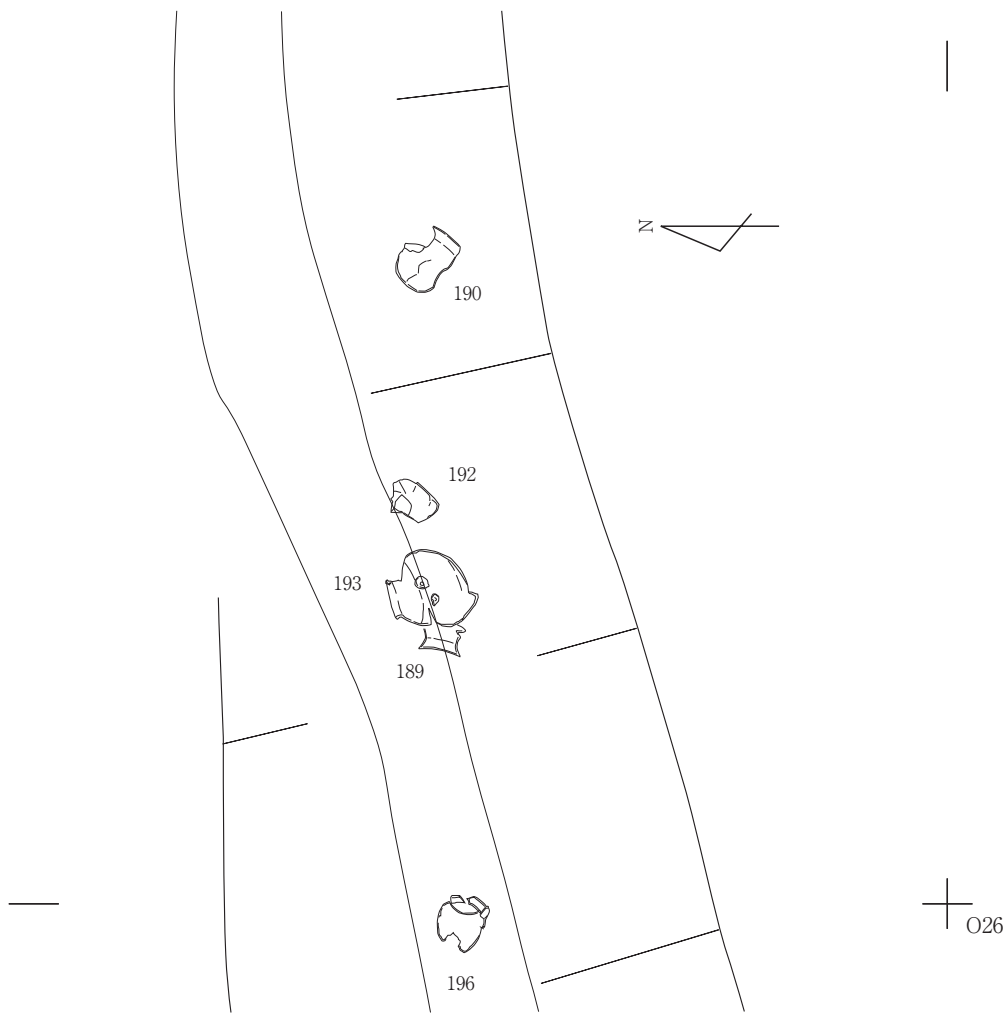
ほとんど屈曲しない。口縁部には僅かな段部を有し貼付口縁状を呈する。器壁はやや厚目である。また、内外面ともやや摩耗しているがナデ調整と考えられる。149と同一個体の可能性がある。151は頸部から上胴部にかけての破片であり、頸部に文様帯を持つ。縦方向の7条の微隆起突帯とそれぞれの間に細い微隆起突帯を施す。幅5cmほどの小口状工具で一括して描く。これらの突帯の左右に扁平な刻目状突帯を施す。本来は縦方向の突帯と扁平な刻目状突帯を交互に配置していたものと考えられる。頸胴部の境目に2条の微隆起突帯と楕円形浮文を施す。Ⅲ期にみられる甕の祖形にあたる。152は口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を2条貼り付ける。153・154は頸部の破片であり、縦方向の弱い微隆起突帯を施す。154は胎土に砂粒を多く含む。155～159は鉢とした。155は口縁部が「く」の字状を呈し、口唇部は平坦面を成す。外面は口縁部が横方向、肩部が縦方向のハケ目調整である。甕の可能性がある。156は口縁部が「く」の字状を呈し、口唇部は上下に刻目を施す。157は口縁端部は玉縁状を呈する。壺の可能性がある。158は口縁部を強くヨコナデすることで、屈曲させる。159は上胴部から僅かに外上方にのび、口縁端部でひろがり外面に粘土帯を貼付する。160～164は混入である。160～162は庄内式土器の甕であり搬入品である。160は他の2点と胎土が異なる。161は頸部直下からケズリ調整を施す。165・166は支脚である。165は中空であり、被熱変色しているが破損してから火を受けたものと考えられる。166は中実であり、底部は上げ底である。

(3) SD2

幅約1.2m、深さは検出面から約0.2mであり、約25mを検出した。緩く蛇行しながらSD1と接続する。底のレベルはSD1よりも高い。東半部での遺物は皆無であったが、西半部では少量の遺物が出土した。出土遺物は弥生土器（壺・甕）が出土している。

出土遺物から時期は弥生時代中期前半である。

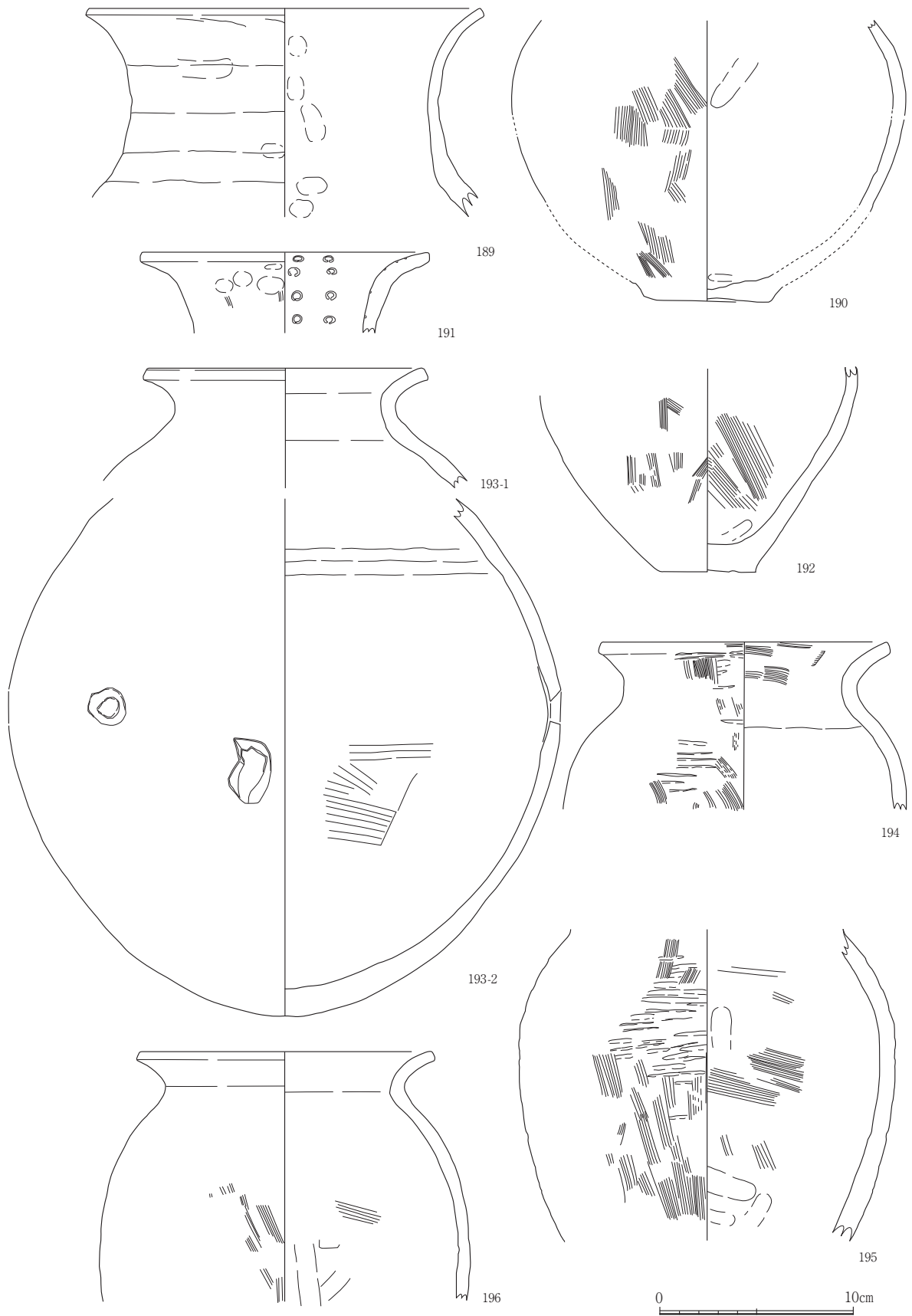
177は口縁部が大きくひろがり、口唇部は平坦面を成し下端に刻目を施す。胎土に砂粒を多く含む。178～180は体部片であり、櫛描文が施される。178は上から櫛描直線文、櫛描波状文を施す。179は上から押し引き風の簾状文、櫛描波状文を2段施す。波状文の波長は高さ、振幅ともに小さい。180はハケ状原体による刻目を巡らせ、その下に縦方向の双線を5単位施す。181は押し引き風の簾状文を2段施すが、両方とも始点と終点が上下にずれる。182～184は底部である。182・184は平底であり、183は端部が突出する。185・186は鉢である。僅かにひろがりながらのび、口縁部を外反させる。187・188はSD1との合流地点からの出土である。187は上胴部に横方向の沈線文を施し、さらに縦方向の短沈線文を巡らせる。188は体部片である。外面には格子目状の叩き目が残存している。



- ①オリーブ色 (5Y5/4) 粘質土 (直径2cm大以下の川原石を極少量含む。)
- ②灰色 (N4/0) 粘質土 (粘性が強い。)



第30図 SD3S遺物出土状況図・エレベーション図・セクション図



第31図 SD3S出土遺物実測図

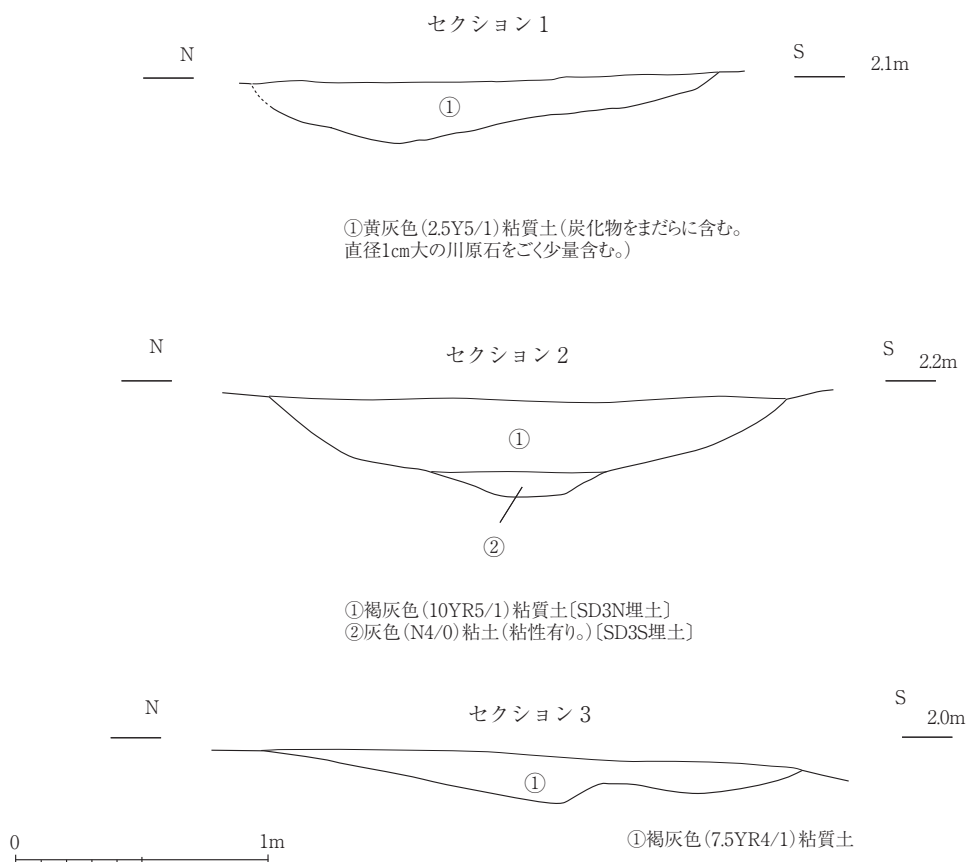
(4) SD3

調査区中央部で検出した。検出段階では合流か分流しているものと考えていたが、掘削を進めるなかで2条の溝が重複していることが判明し、北側の溝をSD3Nとし南側の溝をSD3Sとした。セクションベルトの観察、完掘後の状況等からSD3Sを廃絶後、SD3Nを掘削したと考えられる。

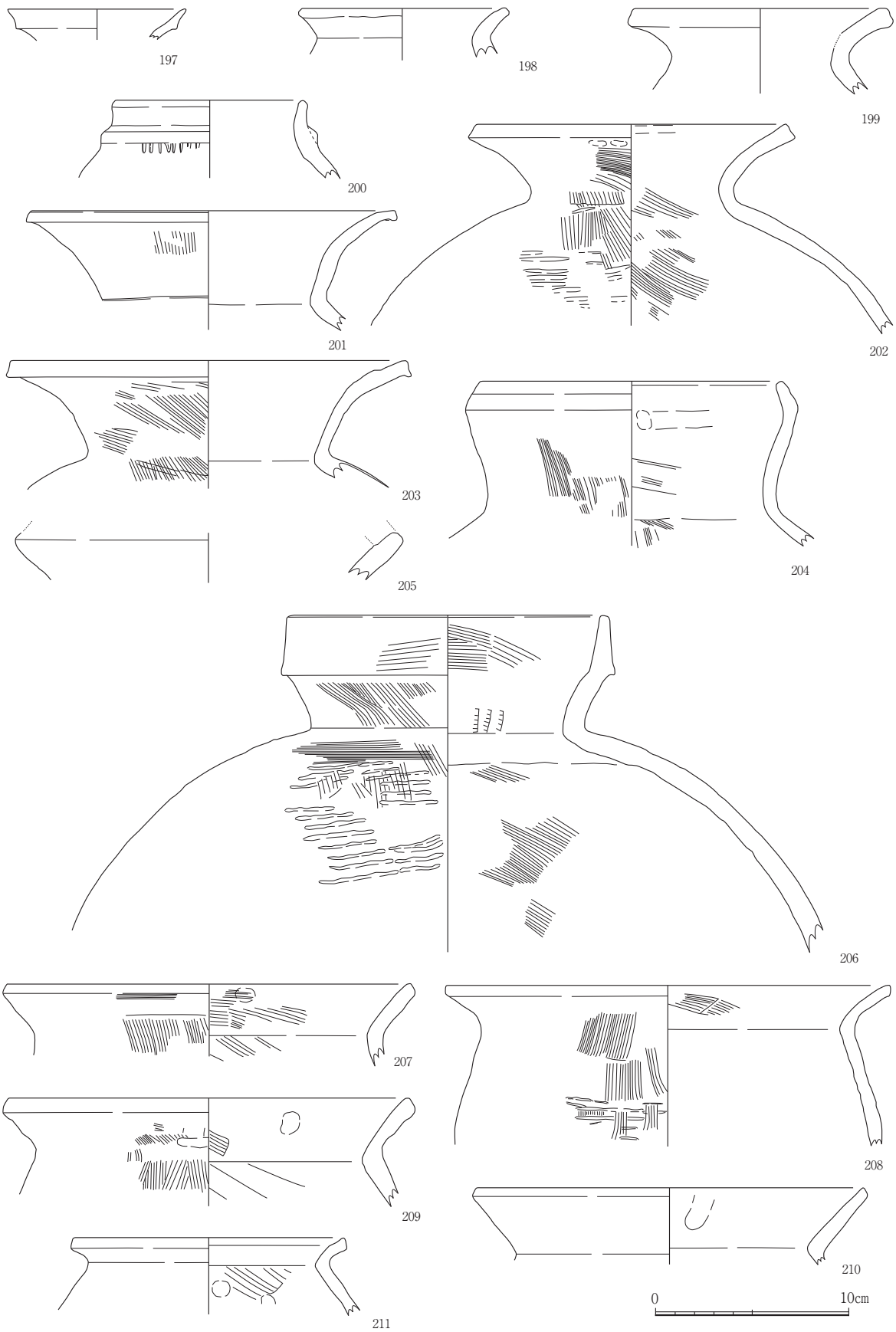
SD3Nは幅約2.2m、深さ約0.3mであり、約32mを検出した。セクション1はQ25グリッドに位置する。断面形はレンズ状を呈する。埋土は二層に分層できるが、②層はSD3Sの埋土である。SD3Nの埋土は①褐灰色(10YR5/1)～黄灰色(2.5Y5/1)粘土の単一層である。セクション2はL24グリッドに位置する。断面形は概ねレンズ状を呈するが南側にテラス部を有する。埋土は褐灰色(7.5YR4/1)粘質土の単一層である。SD3Nから遺物は大量に出土した。

時期は出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代初頭である。

SD3Sは幅0.5～1.8m、深さ約0.38mであり、約17mを検出した。セクション1はN25グリッドに位置する。断面形は「V」字形を呈する。埋土は二層に分層でき、①層はオリーブ色(5Y5/4)粘質土で直径2cm大以下の川原石をごく少量含む。②層は粘性の強い灰色(N4/0)粘質土である。SD3Sは廃絶後、甕や体部に穿孔が施された壺が数個体置かれていた状況を確認した。検出した標高はすべて2.1m前後であり、SD3を埋めた後に何らかの祭祀行為に供されたものと推定される。



第32図 SD3セクション図



第33図 SD3出土遺物実測図1



第34图 SD3出土遺物実測図2

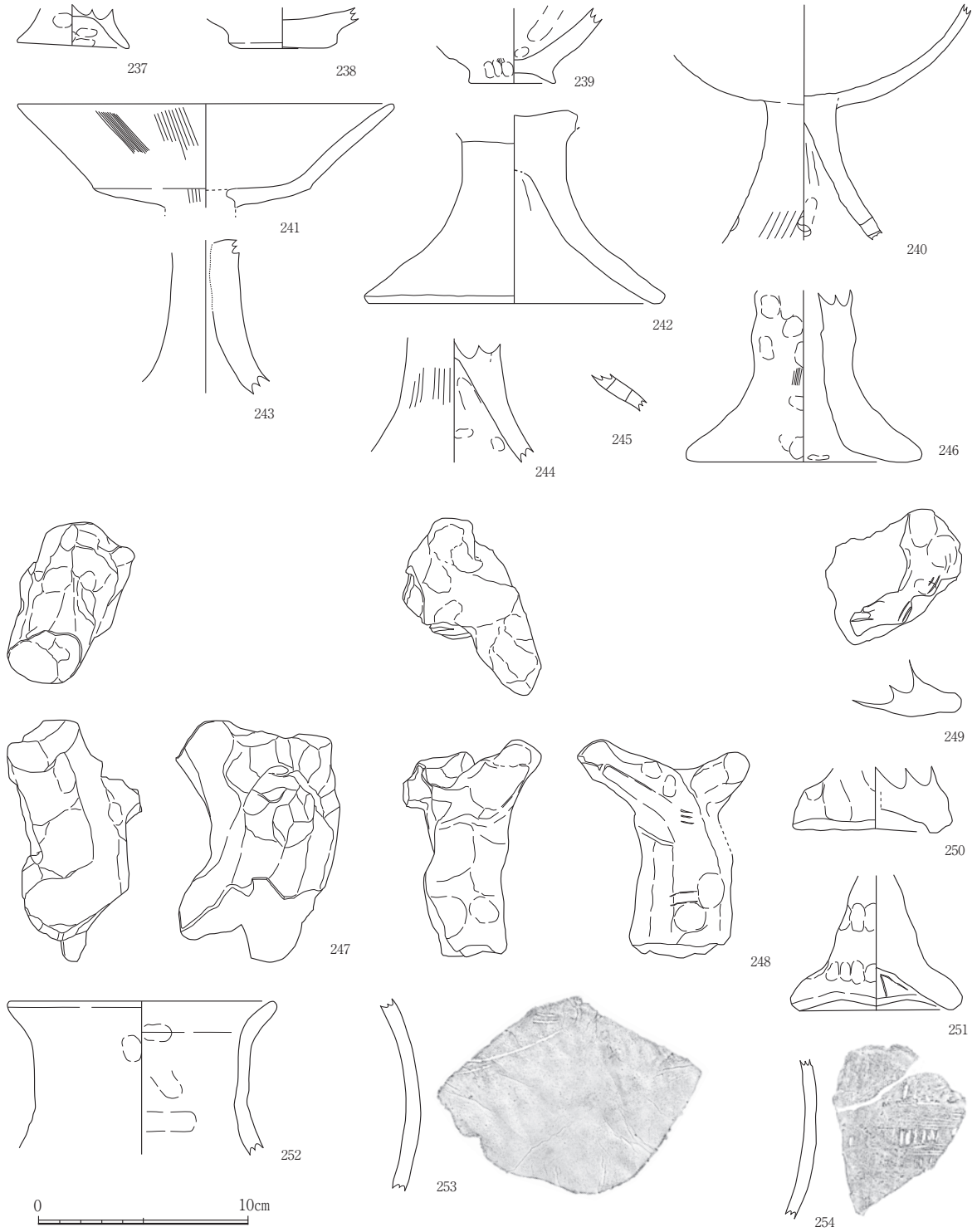
SD3S からはほとんど遺物が出土していないことから一気に埋めたものと推定される。

時期は出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代初頭である。

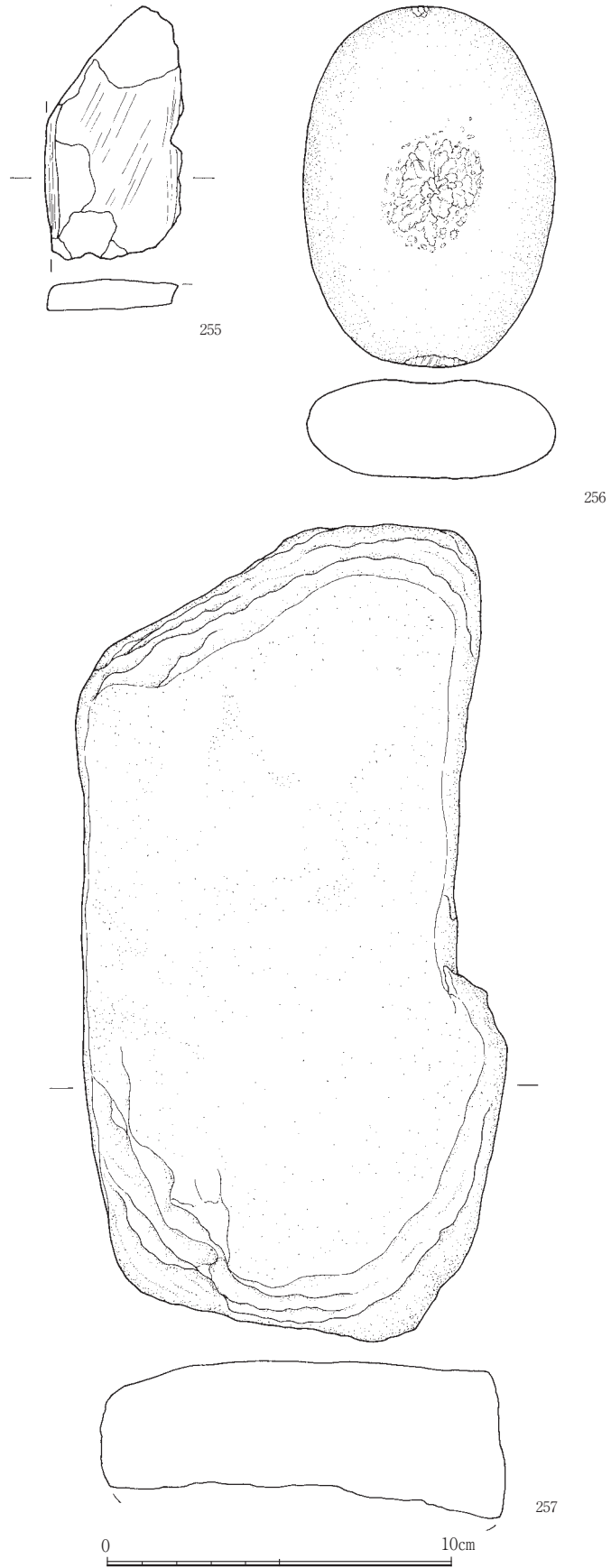
189～193は壺である。189はやや長目の頸部から口縁部が外反し、口唇部は平坦面を成す。内外面はナデ調整であり、外面はかすかに叩き目が認められる程度まで丁寧にナデられている。190は偏球形の体部であり、外面はハケ調整である。191は口縁端部付近で大きくひらき、内面にランドル管状のスタンプ文を縦方向に2列配置する。本来は対面する位置に2カ所施されていたものと残存部分から推測される。193の口縁部は短く外反し、口唇部は平坦面を成し僅かに拡張する。体部はほぼ中位に最大径を持つ球形を呈する。外面はナデ調整かミガキ調整と考えられ内面はナデ調整か粗いハケ調整である。また体部に2カ所穿孔が認められる。194～196は甕である。194の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は平坦面を意識する。外面は叩き後、ハケ調整を施すが、上胴部は水平方向の叩き目が残存する。肩部内面には粘土接合痕跡が残存している。196の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は平坦面を成す。体部外面は叩き後、ハケ調整を丁寧に施しており叩き目はほとんど見られない。内面はハケ調整を強く施したものとみられ、砂粒がごく僅かに移動する。

197～257はSD3から出土したものである。197～206は壺である。197は小形の二重口縁壺である。残存部分も少なく、摩耗している。198は口縁部を水平近く外反させる。199の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は僅かに凹状を呈する。200は頸部に突帯を貼付し、下に刺突文を巡らせる。形態、胎土ともやや違和感のある土器である。201は口縁部を大きく外反させ、口唇部は平坦面を成す。頸部にハケ目が認められる。202は丸みを帯びた肩部から口縁部がやや直線的に外反する。口唇部は強いヨコナデにより僅かに凹状を成し、下方に拡張気味である。体部外面は叩き後ハケ調整であり、内面はハケ調整である。203は口縁部を水平まで外反させ、口唇部はヨコナデに平坦面を成し下方は拡張気味となる。体部外面は叩き後ハケ調整を施す。頸部はハケ調整である。204～206は複合口縁壺である。204の頸部はあまりひらかず直立気味であり、二次口縁部は短く内傾する。頸部外面はハケ調整であり、全体に粗雑な作りである。205は二次口縁部が接合面から剥離したものであり、一次口縁の上面に貼り付けていることがわかる。206は丸みを帯びた肩部から一次口縁部が短く直線的に外反し、内傾した二次口縁部を有する。体部外面は一部にハケ調整が見られるが全面的に叩き目が残存している。内面はハケ調整・ナデ調整であり、肩部には粘土接合痕跡が残存している。207～229・231は甕である。207の口縁部は鈍角の「く」の字状を呈する。体部内面は頸部直下からケズリ調整、外面はハケ調整を施す。口縁部は内面がハケ調整、外面がナデ調整であり、口唇部は平坦面を意識する。208の口縁部は鈍角の「く」の字状を呈する。体部外面は肩部と口縁部の境目を中心にハケ調整を施すが、肩部は叩き目が残存する。口唇部は平坦面を意識しヨコナデ調整を施す。207と同一個体の可能性がある。209の口縁部は鈍角の「く」の字状を呈する。内面は頸部直下までケズリ調整を施す。器壁は厚い。211の口縁部は短く外反させ、口唇部はヨコナデにより平坦面を成す。外面は丁寧にナデ調整を施している。肩部内面には指頭圧痕が残存している。搬入品の可能性がある。212の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は細く丸くおさめる。体部はあまり張らずなで肩である。内面はやや細かいハケ調整である。体部外面

は叩き目が全面的に残存しているが、口縁部には認められない。体部と口縁部の境目を中心にハケ調整を施す。213の口縁部は短く外反させる。外面は全面的に叩き目が残存しており、口縁部は「叩き出し」手法による成形である。体部内面は頸部直下までハケ調整を施し、稜は鋭い。214

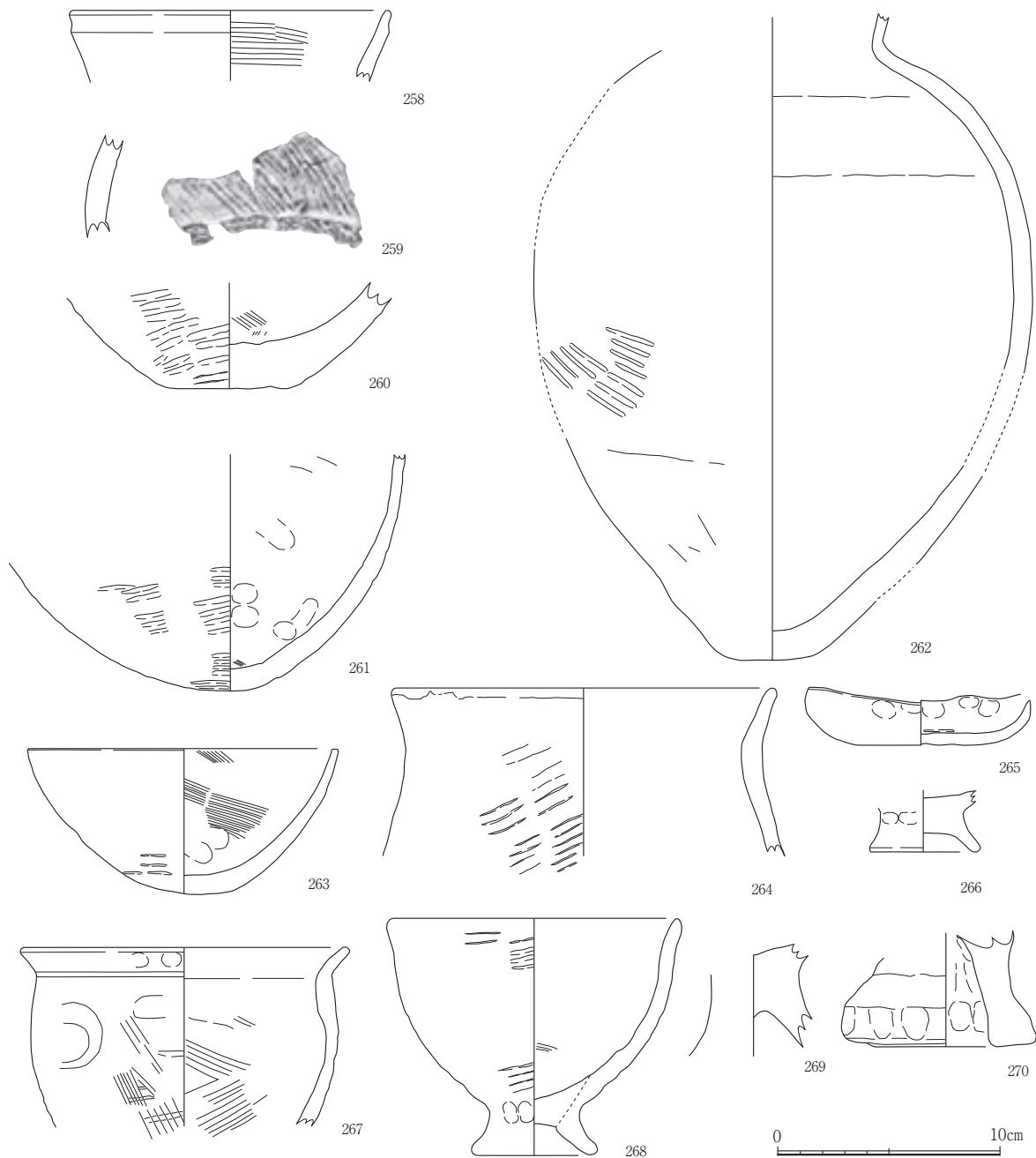


第35図 SD3出土遺物実測図3



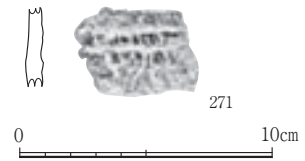
第36図 SD3出土遺物実測図4

の口縁部は丸みを持って外反し、口唇部は平坦面を成す。215 は口唇部をヨコナデ調整により平坦面に仕上げ、下方に拡張する。内外面ともナデ調整である。搬入品の可能性がある。216 は小形に属する。頸部はあまり締まらず口縁部は短く外反する。体部外面には叩き目が残存し、口縁部から頸部にかけて粗いハケ調整を施す。内面は粗いハケ調整であり、頸部に粘土接合痕跡が認められる。217 はあまり張らない体部から口縁部が短く外反する。外面には全面に叩き目が残存している。叩き目の各単位は重複することなく施されている。218 は口縁端部をヨコナデ調整によりつまみ上げる。庄内式土器の甕を模倣しているのか。胎土は在地のものである。219 は頸部から鋭く屈



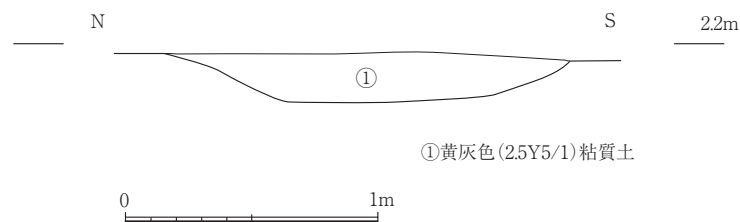
第37図 SD3N出土遺物実測図

曲し口縁部はひろがる。外面は粗いハケ調整であり、下地の叩き目がうっすらと見える。220～224は庄内式土器の甕である。220・221の口縁部は鋭く屈曲し口縁端部を僅かにつまみ上げる。頸部直下までケズリ調整を施す。220は模倣品と考えられるが、在地の胎土ではなく他地域からの搬入品である。残存部はごく僅かではあるが頸部直下までケズリ調整は認められない。223の口縁部は「く」の字状

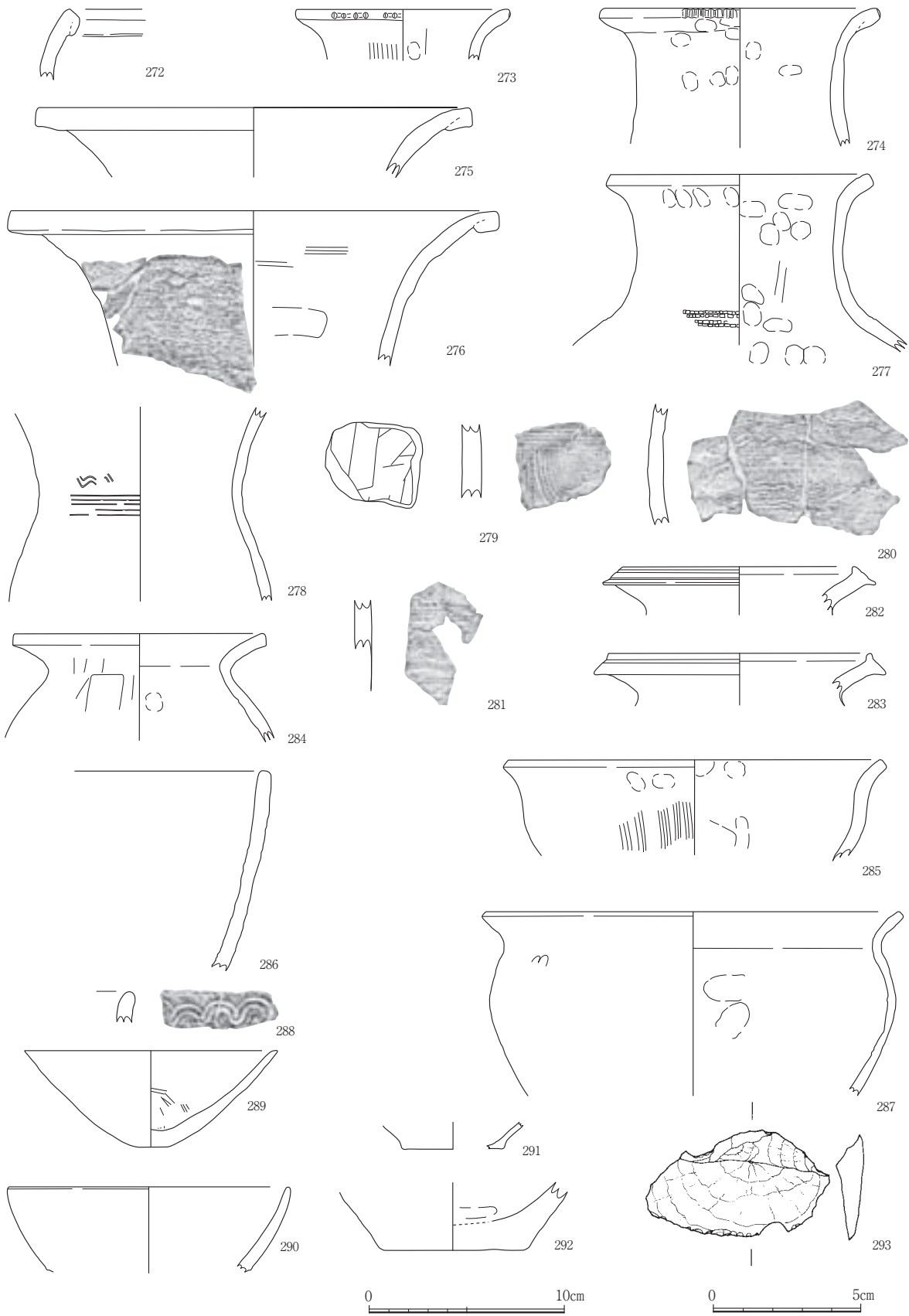


第38図 SD2～3実測図

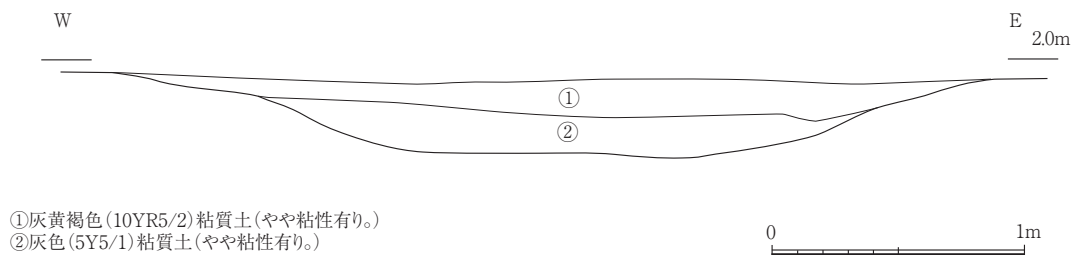
を呈し、口唇部を丸くおさめ端部のつまみ上げは認められない。内面は頸部直下までケズリ調整が施される。224は丸みを帯びた体部に「く」の字状に外反した口縁部が付き、口縁端部は僅かにつまみ上げる。体部外面には細めの右上がりの叩き目が残存し、上胴部にはハケ目が認められる。内面は頸部直下までケズリ調整を施す。225～229・231は底部である。225は平滑な底部を持ち、外上方へ立ち上がる。底面を含めた外面はミガキ状の調整を施す。弥生中期の混入の可能性がある。226・229・231は外底面に叩き目が認められる。また、外面には叩き目が明瞭に残る。227は丸底である。叩き成形後、丁寧なナデ調整あるいはミガキ調整を施し、外底面についても同様である。また、器壁は総じて厚い。228は丸底から外上方へ立ち上がる。外面は叩き成形後、ハケ調整を施す。230・232～236は鉢である。230は丸底からあまりひらかず上方に立ち上がり、若干窄まり頸部になり口縁部は直立し端部付近で外反させる。外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整である。器壁が厚く法量に比べ重い。232は突出した底部から口縁部が大きくひろがり、端部は尖り気味におさめる。外面はナデ調整、内面はハケ調整である。233の口縁部は内湾気味であり端部を屈曲させる。搬入品である。234は平らな底部から直立気味に立ち上がる。内面に粘土接合痕跡が認められる。外面には叩き目、亀裂痕跡が認められる。235は平底から外上方へ直線的に立ち上がり口縁部を内傾させる。内外面ともナデ調整である。236の体部は丸みを帯びながらひろがり、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整である。237は脚部であり、「ハ」の字状にひろく。内外面ともナデ調整である。238は突出した平底の底部である。239は粘土をつまみ出すことで脚部を成形する。240～245は高杯である。240は分割成形である。杯部は椀状を呈し、脚部には円孔を4カ所穿つ。241は杯部であり、平らな底面から口縁部が大きくひろく。分割成形である。242～244は分割成形の脚部である。245は脚部であり、円孔を穿つ。外面はミガキ調整である。胎土は精良であり搬入品の可能性がある。246～251は支脚である。246の脚部は中空で筒状を呈し端部は大きくひろがる。主に指頭により形を整える。247は指が2本前方にのび、背面につまみを有する。背部上方



第39図 SD4セクション図



第40図 SD4出土遺物実測図



第41図 SD5セクション図

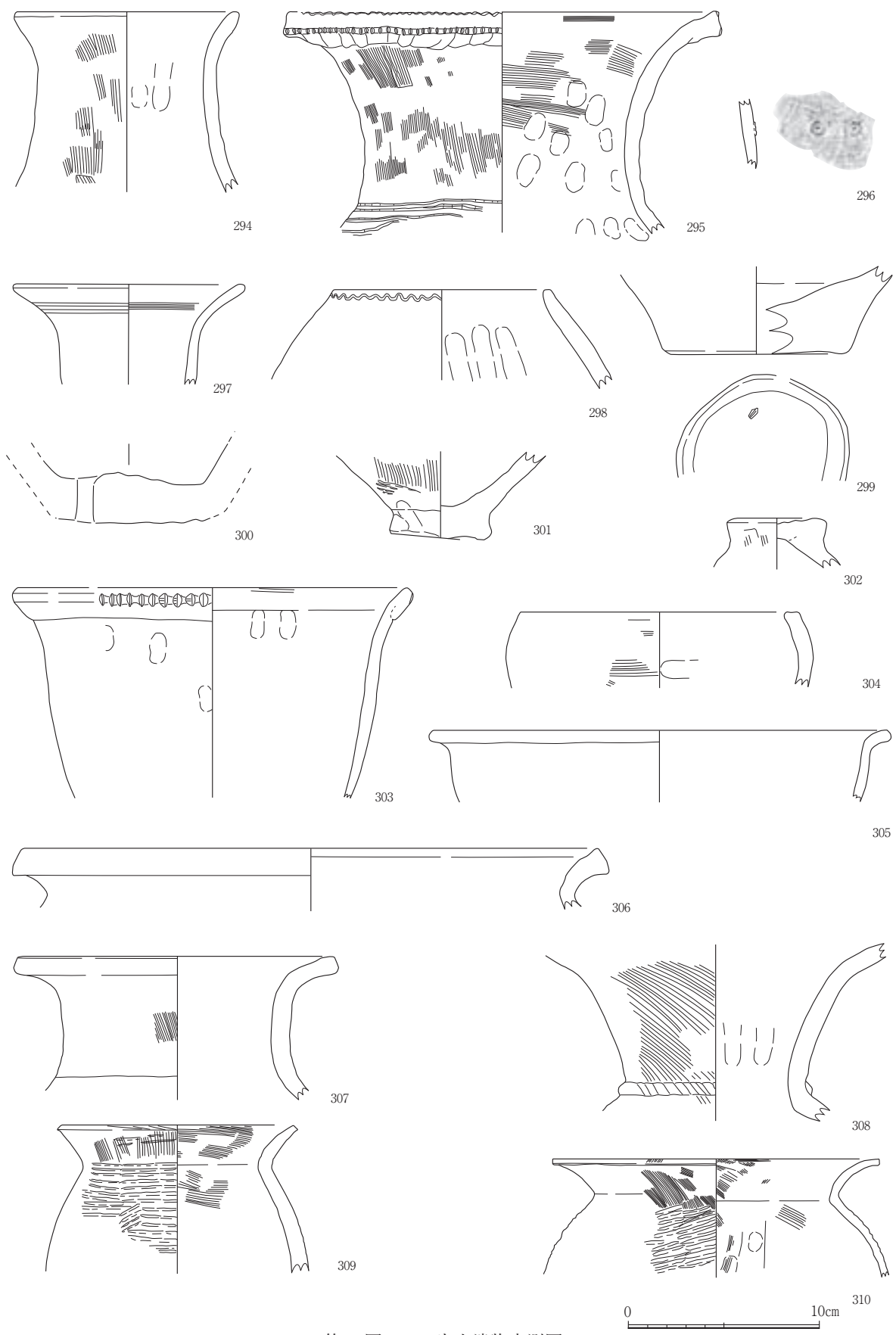
には煤が付着する。相対的に大形に属する。248は指が2本前方へのび、背面には大きめのつまみが付く。脚部は残存部分の中実である。脚部には叩き目が見られるがナデ調整により消されている。249～251は脚端部である。指頭で脚部を作り出すが形態はそれぞれである。252は壺であり、短めの直立する頸部から口縁部が外反する。253は壺の体部であり、双線により施文する。254は壺の体部であり、櫛描直線文間に縦位沈線文を施す。内面はハケ調整である。

258～270はSD3Nから出土した。258は壺の口縁部であり、端部をヨコナデにより短く外反させる。内面はハケ調整である。259は壺の頸部であり、突帯を貼付する。突帯を含めた外面に粗いハケ目調整を施す。260は壺の底部であり、底端部際まで叩き目が残る。外底面はナデ調整であり、底端部をナデることで丸底化する。261は底部であり、叩き調整により丸底にする。262は壺である。体部は中位に最大径を持ちフットボール形であり、底部は端部がやや丸い平底である。全体的に摩耗しており詳細に観察できないが、外面は叩き調整後、下胴部にはハケ調整を施す。また、叩き目の方向は部位により異なる。内面肩部には粘土帯の接合痕跡が明瞭に残存している。263は鉢である。体部は半球形を呈し、丸底である。外面下半部には叩き目が残存しているが、全体的にナデ調整を施し叩き目を消している。内面はハケ調整である。264は甕であり、口縁部の外反度合いは弱い。外面には叩き目が残存する。265は皿状の鉢であり、内外面に指頭圧痕が残存する。266は脚部をつまみ出して成形する。267は鉢である。丸みを持った体部から口縁部を外反させる。外面は粗い叩き調整後、粗いハケ調整を施す。体部内面にも粗いハケ調整を施す。268は脚付き鉢である。丸みを持った体部から口縁部が僅かに外反する。外面には叩き目が残存している。269は高杯の脚部である。270は支脚である。裾部は中空であるが、残存部から上は中実の可能性があり、安定感のある作りである。271はSD2～3の合流部分で出土した。外面に二条の沈線を巡らせ、間に刻目を施す。胎土に砂粒を非常に多く含む。薄手式土器である。

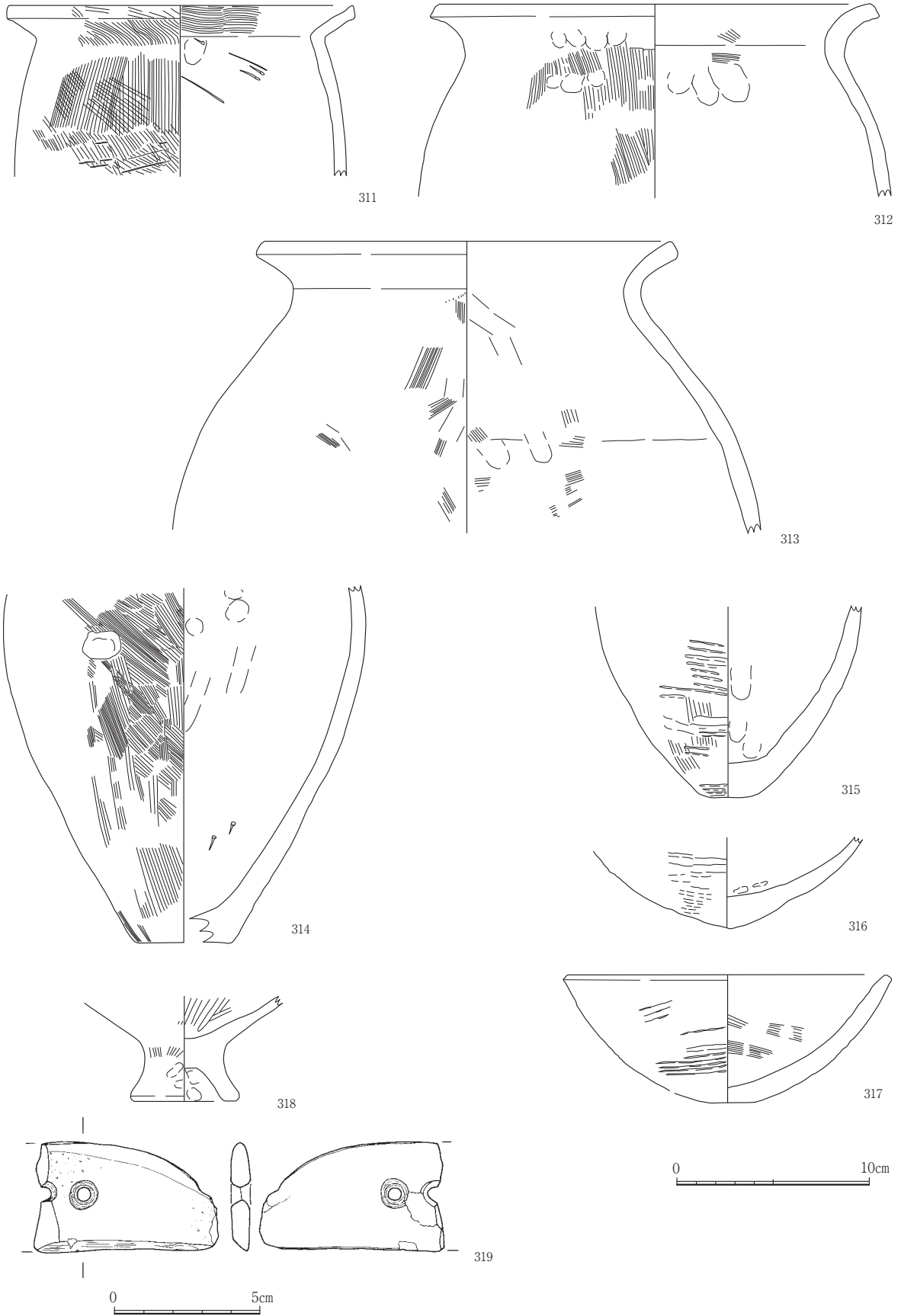
(5)SD4

調査区北部で検出した溝跡である。幅約1.5m、深さ0.2mであり、約17mを検出した。断続的にしか検出できなかったことから、削平を受けていると推定される。中央部が一段深く掘削されていたが、もともとの形態なのか再掘削のために生じたものかは不明である。SK1、他の土坑とも重複しているが、新旧については判然としなかった。

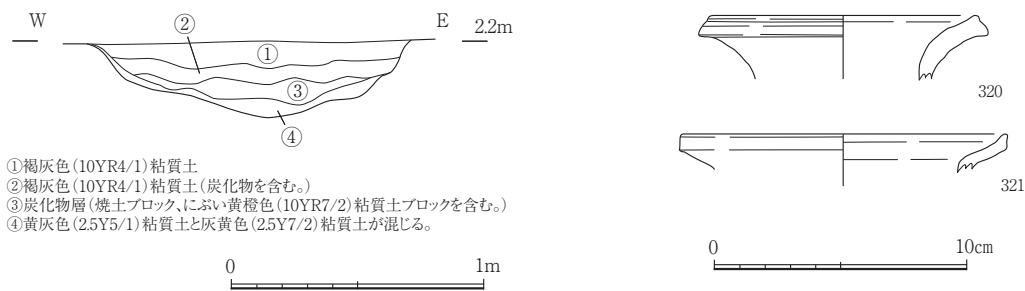
272～281は壺である。272・275は貼付口縁である。273は口縁部片であり、口唇部に刻目を施す。外面に粘土粒が付着しているが、浮文なのか偶然付着したものか判然としない。274は直立した頸部から口縁部が短く外反する。貼付口縁であり、口唇部に刻目を施す。276は頸部から口縁部



第42図 SD5出土遺物実測図1



第43図 SD5出土遺物実測図2



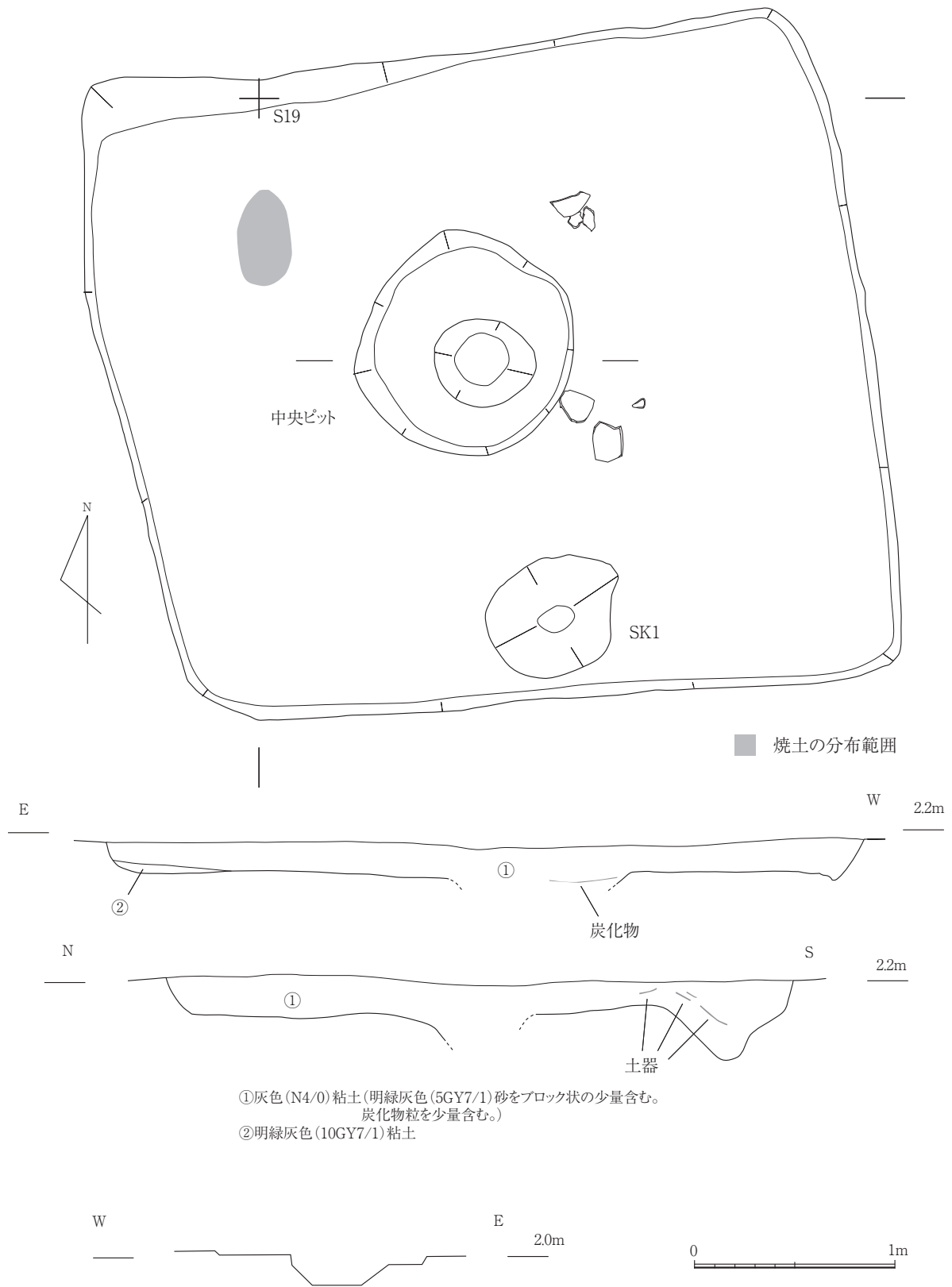
第44図 SK1 セクション図・出土遺物実測図

にかけての破片であり、貼付口縁である。頸部に文様帯を持ち、櫛描波状文と櫛描直線文で飾る。277 は上胴部から口縁部にかけての破片であり貼付口縁である。肩部には押し引き風のストロークの非常に短い簾状文を二条施す。278 は上胴部から頸部にかけての破片である。摩耗のため不明瞭ではあるが、櫛描波状文、櫛描直線文を施す。279 は櫛描直線文の下に重弧文、縦位の櫛描文を施す。280 は頸部の破片であり、外面に櫛描直線文、櫛描波状文を施す。281 は頸部に櫛描直線文、山形文に近い櫛描波状文を施す。282～284 は甕である。282・283 は口唇部を上下に拡張し、二条の凹線文を施す。284 は口縁部が「く」の字状を呈し、口唇部は平坦面を成す。体部内面はナデ調整であり、僅かに砂粒の移動が認められる。285～287 は鉢であり、285・287 は口縁部を外反させ、286 は直立させる。288 は複合口縁壺の二次口縁部であり、外面には櫛描波状文を施す。289・290 は鉢である。289 は丸底であり、口縁部は外上方にのび端部は丸くおさめる。外面はナデ調整、内面はハケ調整である。290 の口縁部は丸みを持ち、端部は丸くおさめる。外面には煤が付着する。291 は薄手式土器の底部であり、端部は短く直立した後、大きくひろがる。

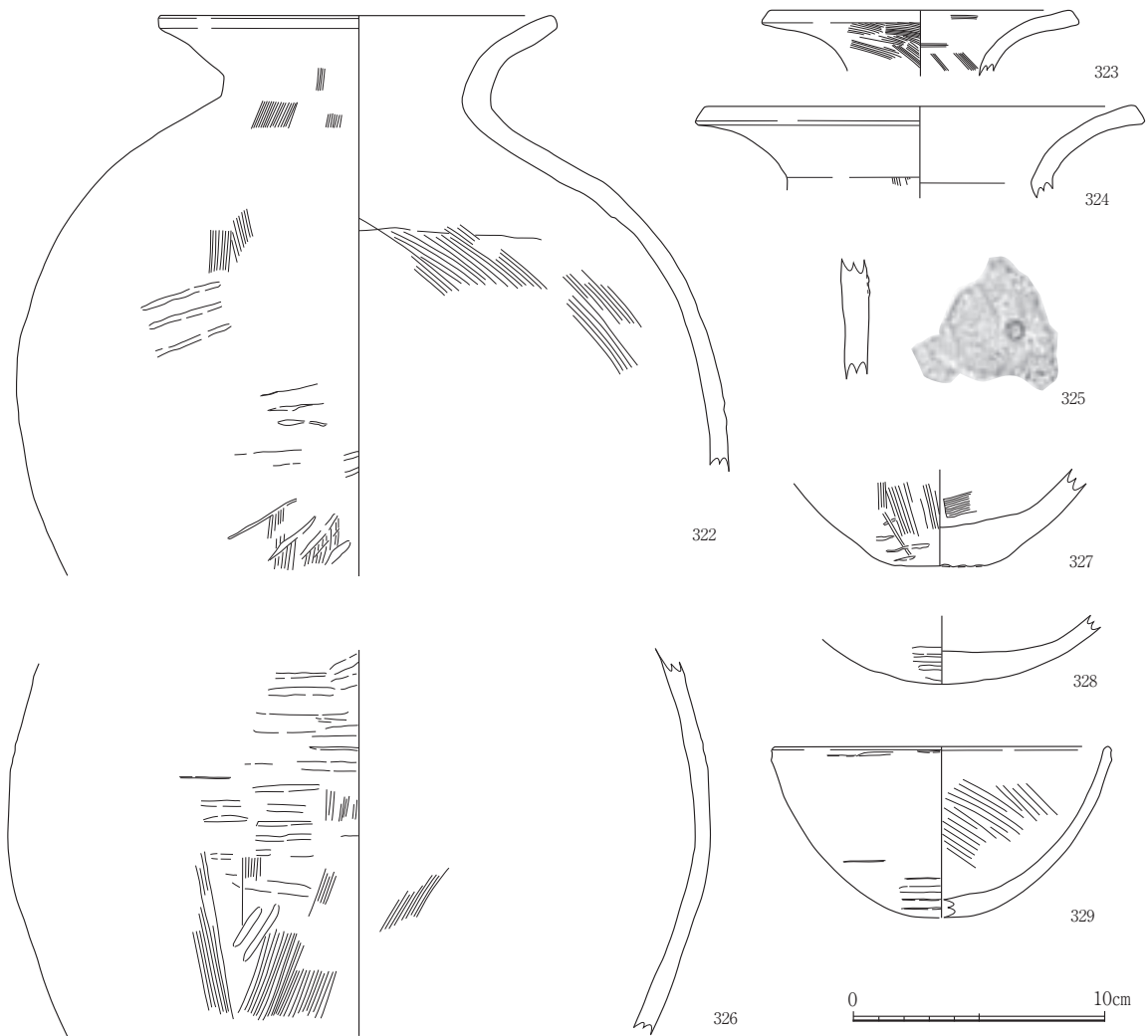
(6)SD5

調査区中央部で検出した溝跡である。幅約 3 m、深さ 0.3 m であり、約 18 m を検出した。多くの溝跡が東西方向に流れるのに対して SD5 は南北方向に流れる。断面形はレンズ状を呈する。埋土は二層に分層でき、①層は灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土で、②層は灰色 (5Y5/1) 粘土でありともに粘性が有る。また、南半部分の埋土は北半部とは異なり、地山の礫層と同種の礫が混じった混じり粘土であった。埋土から多量の土器が出土している。

出土遺物は 294～319 である。294～300 は壺である。294 の頸部は若干内傾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。295 は上胴部から口縁部にかけての破片である。貼付口縁であり、外面には指頭圧痕が明瞭である。口唇部はナデ調整により凹面状を呈し上下端に刻目を施す。上胴部には双線による押し引き風の簾状文を 3 単位以上施す。内外面ともハケ調整である。296 は櫛描波状文、櫛描直線文、ドーナツ状浮文で飾る。297 は直立する頸部から口縁部が大きくひろがる。内外面ともハケ調整である。脚部の可能性がある。298 は上胴部に櫛描波状文を施す。299 の底部外面には初めの圧痕が認められる。300 は内面の一部以外を除いて器表面は残っていない。底部の穿孔、土器の残存状況から故意に破碎した可能性がある。301 は脚部である。粘土を指頭によりつまみ出すことで脚部を成形する。外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。302 は蓋であり、つまみ部の上面中央部は僅かに凹む。調整は粗く、粗雑な作り



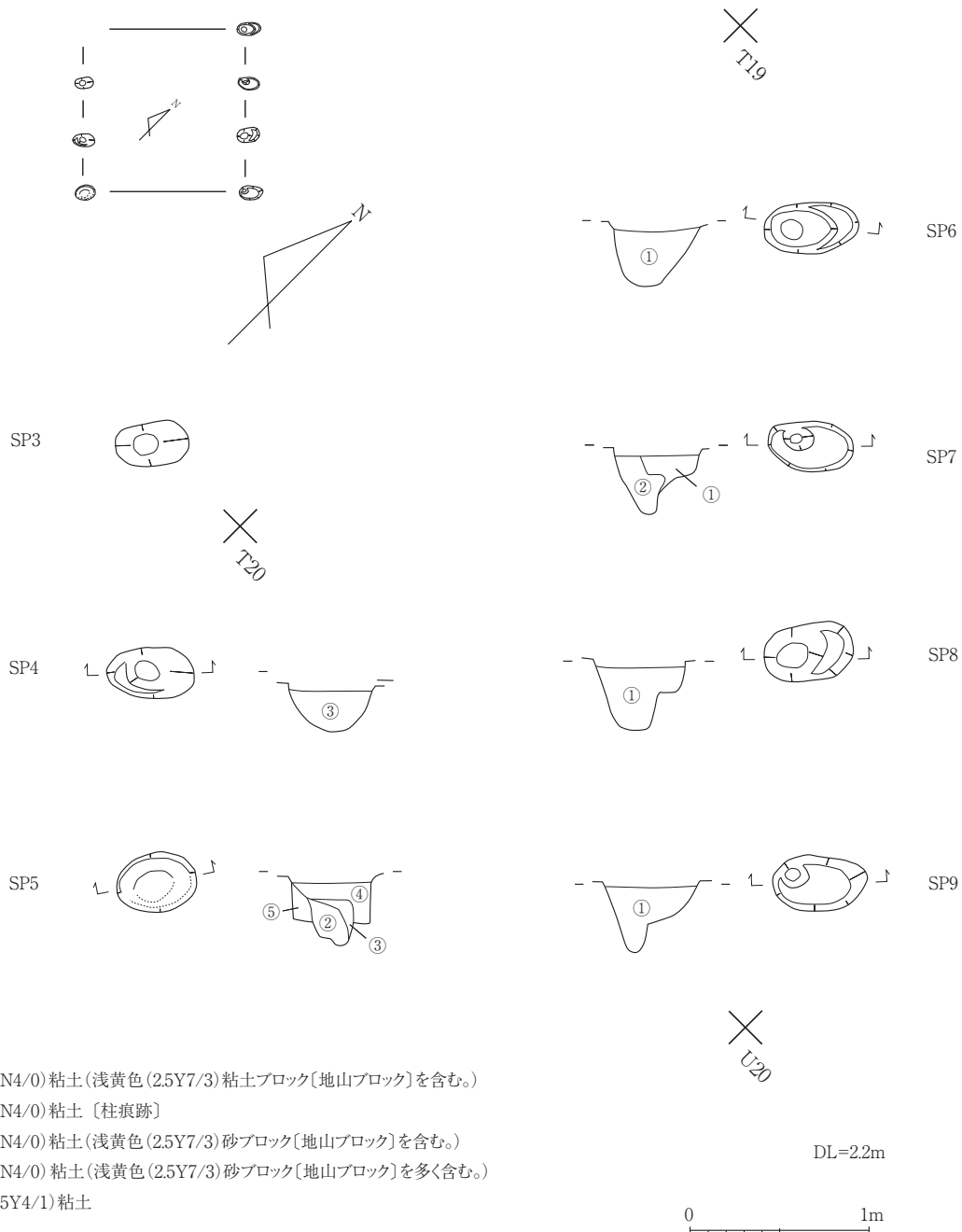
第45図 ST2遺物出土状況図・セクション図・中央ピットエレベーション図



第46図 ST2出土遺物実測図

である。303は胴部から口縁部にかけての破片である。体部は直線的にのび口縁部は外反する。貼付口縁であり上端にはハケ状原体による大きめの刻目を施す。外面に煤が付着する。304は無頸壺である。口縁部を内湾させ端部はやや凹面状を呈する。外面にはハケ目が認められる。305は鉢であり、口縁部を外反させる。306は甕である。口唇部を上下に肥厚させる。摩耗のため判然としないが、凹線文が施されていた可能性が高い。307は口縁部から頸部にかけての破片である。短い頸部から口縁部が大きくひらき、口唇部は平坦面を成す。308は口縁部から頸部にかけての破片であり、口縁端部は欠損する。頸部に突帯を貼付し突帯を含めた外面に粗いハケ目調整を施す。309～313は甕である。309は外面には水平方向の叩き目が残存する。口縁部は叩き出しにより成形し、叩き後ハケ調整を施す。また、口唇部はハケ状原体により平坦面を成す。内面はハケ調整であり、一部に砂粒の移動痕跡が認められる。310は口縁部を「く」の字に外反させ、内面には明確に稜線が巡る。口唇部はヨコナデにより平坦面を成す。体部外面には叩き目が明瞭に残存し、口縁部内外面及び体部外面はハケ調整・ナデ調整である。全体的に器壁は薄い。311は口縁部から上胴部に

かけての破片である。外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。上胴部では斜め方向のハケ調整後に縦方向のハケ調整を施す。口縁部内外面ともハケ調整を施し、口唇部はハケ状原体でナデること
 で平坦面とする。体部内面はケズリ調整を施す。312は口縁部から上胴部にかけての破片である。口唇部はヨコナデにより平坦面を成す。器壁はやや厚く、しっかりとした作りである。313は口縁部から胴部にかけての破片である。なで肩の上胴部から口縁部は外反し、口唇部は平坦面を成す。
 調整はナデ調整・ハケ調整を主体とし、内面には粘土帯の接合痕跡が認められる。314は胴部から



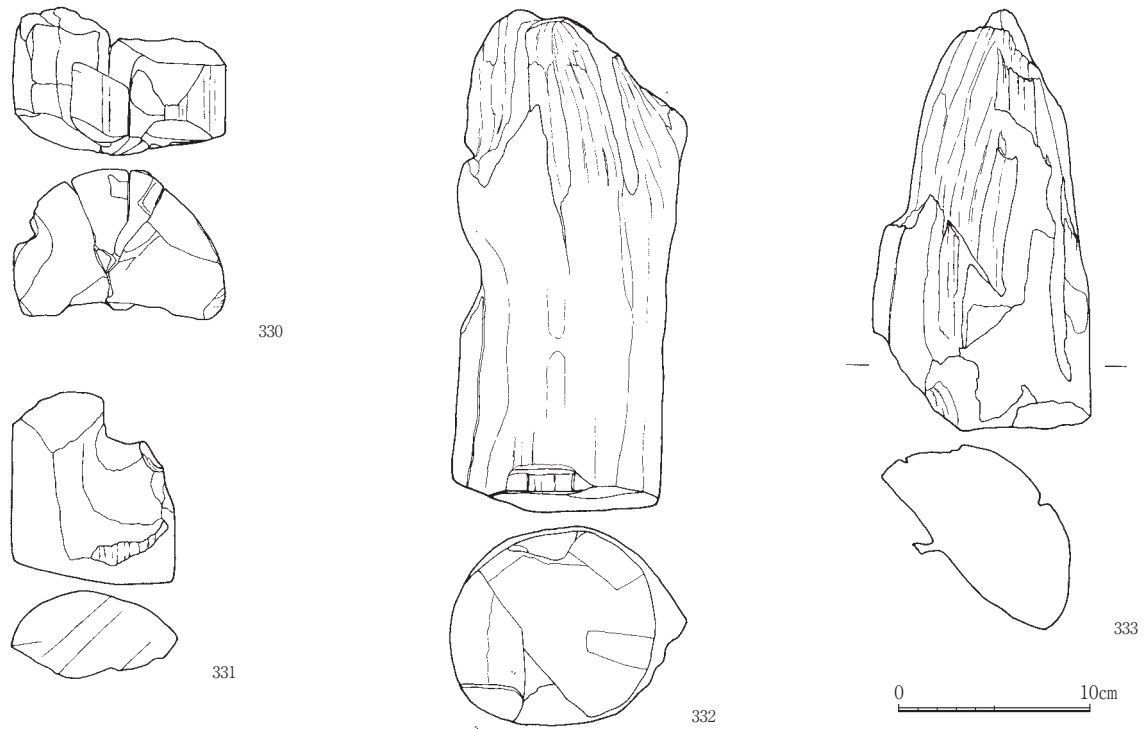
第47図 SB1平面図・セクション図

底部にかけての破片である。外面はハケ調整、内面はケズリ調整後ナデ調整である。底部外面にもハケ目が認められる。外面には煤が付着する。315は底部の破片である。外面は叩き調整後ハケ調整であり、内面はナデ調整である。底部は底端部が丸みを持った平底であり、外面は叩き調整後、ナデ・ハケ調整である。316・317は丸底の底部である。底部付近まで叩き調整を施し、主としてナデ調整により丸底化する。318は脚付き鉢である。脚部は中空であり、裾部は僅かにひろがり端部を丸くおさめる。杯部は外上方へひろがり、内面にはミガキ調整を施す。

(7)SK1

調査区北部で検出した土坑である。SD4と重複するが新旧については判然としなかった。平面形は不整形であり、断面形はレンズ状の底部から屈曲しながら立ち上がる。埋土は4層に分層できる。①層は褐灰色(10YR4/1)粘土、②層は褐灰色(10YR4/1)粘土で炭化物を含む。③層は炭化物層であり、焼土ブロック、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロックを含む。④層は黄灰色(2.5Y5/1)粘土と灰黄色(2.5Y7/2)粘土が混ざる。

320は壺の口縁部であり、口唇部を拡張し凹線文を2～3条施す。高松平野からの搬入品と考えられる。321は甕の口縁部であり、端部をつまみ上げる。

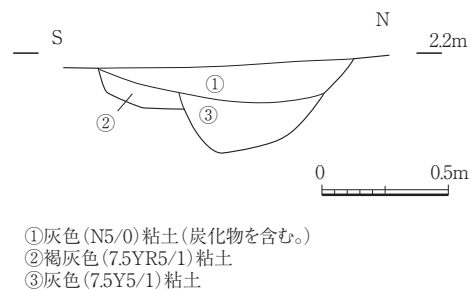


第48図 SB1柱実測図

第3節 II区の遺構と遺物

(1) ST2

調査区南西部で検出した竪穴住居跡である。検出標高は約 2.2 m である。長軸約 3.7 m、短軸約 3.3 m の隅丸長方形を呈し、深さは検出面から床面まで約 0.2 m 残存していた。埋土は基本的に炭化物を少量含んだ灰色 (N4/0) 粘土である。



第49図 SK3セクション図

この住居跡の付属施設は中央ピットと土坑 (SK1) であり、支柱穴については床面を精査したが検出できなかった。中央ピットは住居跡のほぼ中央に位置する。直径 1.1 m の円形を呈し、西部にテラスを持つ構造である。埋土は住居跡の埋土と同一であり、埋土上面に炭化物層がうっすらとレンズ状に存在する。土坑は南壁に接し検出した。直径 0.6 m の不整円形を呈し、埋土は住居跡の埋土と同一である。この土坑から壺が横転した状態で出土した。完形には復原できなかったが、比較的多くの部位が残存していた。住居跡が埋まる途中で遺棄されたものと推定される。また、床面の北西部において焼土跡を 1ヶ所検出した。長軸約 0.5m、短軸約 0.2m の楕円形である。

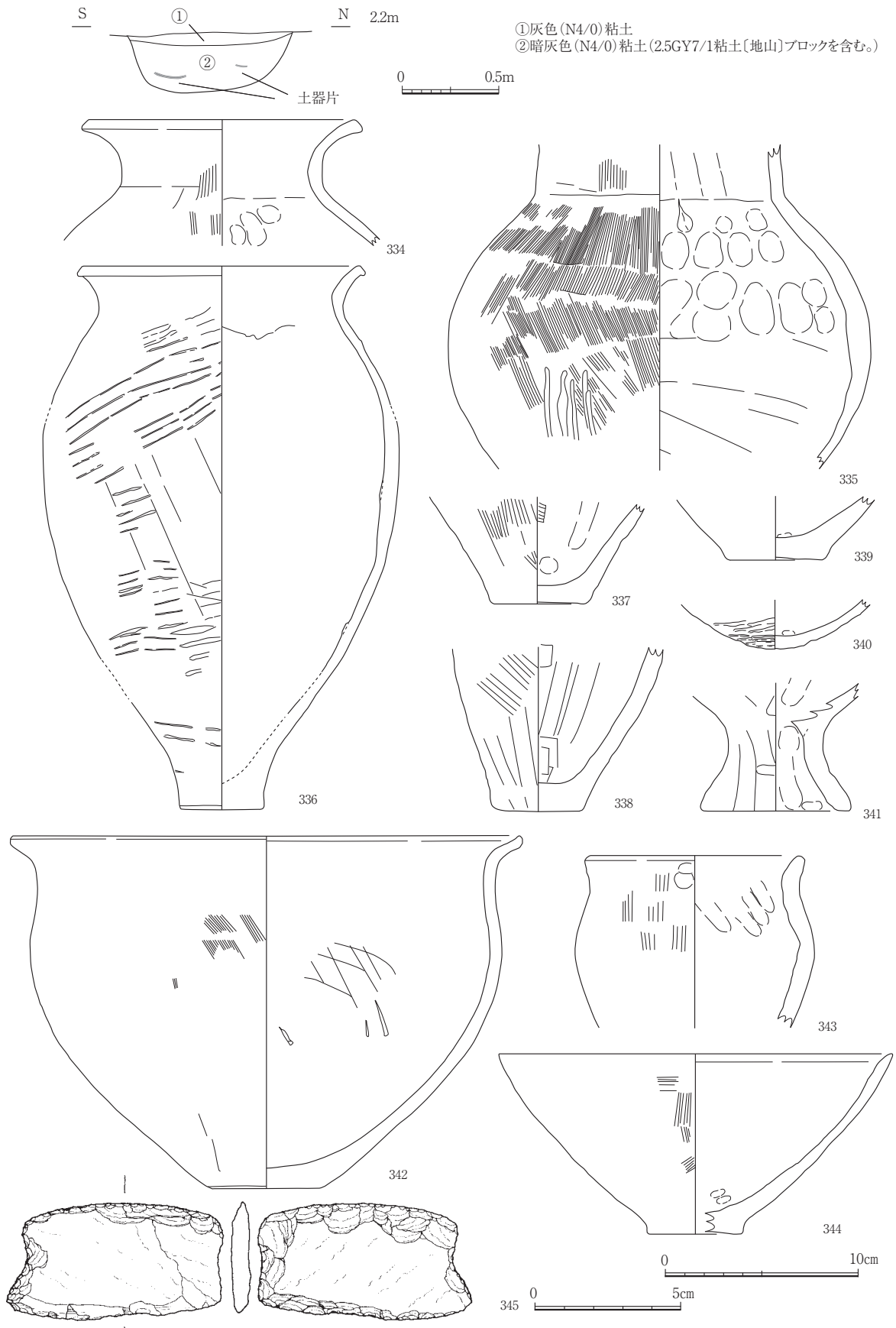
出土遺物は床面直上に遺棄されたものではなく、床面からやや浮いた状態で出土し、西半部に偏在する。

322 は壺であり体部から口縁部にかけての破片である。口縁部は短く外反させる。体部外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。叩き目は基本的には右上がりの方向であり、明瞭に残存している部分もある。肩部から口縁部にかけてハケ調整を施す。内面はやや粗い斜め方向のハケ調整である。肩部には粘土帯接合痕跡が認められる。323 は口縁部である。内外面ともハケ調整であり、口唇部は面取りされる。324 は口縁部であり、外反させる。322 と形態・法量とも類似している。325 は体部片であり、外面にドーナツ状浮文を貼付する。326 は中胴部から下胴部にかけての破片である。外面は太めの叩き調整後、下胴部にハケ調整を施す。叩き目の方向は水平方向からやや右上がりを基本とするが、下半部は急角度の右上がり方向のものも認められる。内面はナデ調整であり部分的にハケ目が認められる。327・328 は丸底の底部である。327 の外面は叩き調整後ハケ調整である。外底面にも叩き目が明瞭に残る。叩き調整により丸底化している。内面は不定方向のハケ調整である。328 の外面は叩き調整であり、底面はナデることにより丸底化している。内面はナデ調整である。これらの他にも底部が出土しているが、基本的には丸底である。329 はボール状を呈した鉢である。外面は叩き調整後ナデ調整であり、上半部は丁寧に叩き目をナデ消している。内面はハケ調整である。内外面とも口縁部付近を境に色調が異なっており、重ね焼きの痕跡か。

時期は出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭である。

(2) SB1

調査区中央部南よりで検出した掘立柱建物跡である。SP3～9で梁間1間 (3.6 m)、桁行3間 (3.7 m) の掘立柱建物跡に復原した。SP5がSK5を切っている可能性が高い。南西隅の柱穴は攪乱のため検出できなかった。各柱穴は平面形、規模、構造が類似している。平面形は梁間方向に長楕円



第50図 SK4セクション図・出土遺物実測図

形を呈し、長軸約0.5 m、短軸約0.3 mであり、深さは検出面から約0.4 mである。柱穴は桁行外側にテラスを有する。SP4・5・9には木柱が残存しており、樹種同定の結果、シイ属であることが判明している。

(3) SK2

調査区南西部で検出した不整形を呈する土坑である。長軸約0.8 m、短軸約0.7 m、検出面からの深さは約0.1 mを測る。

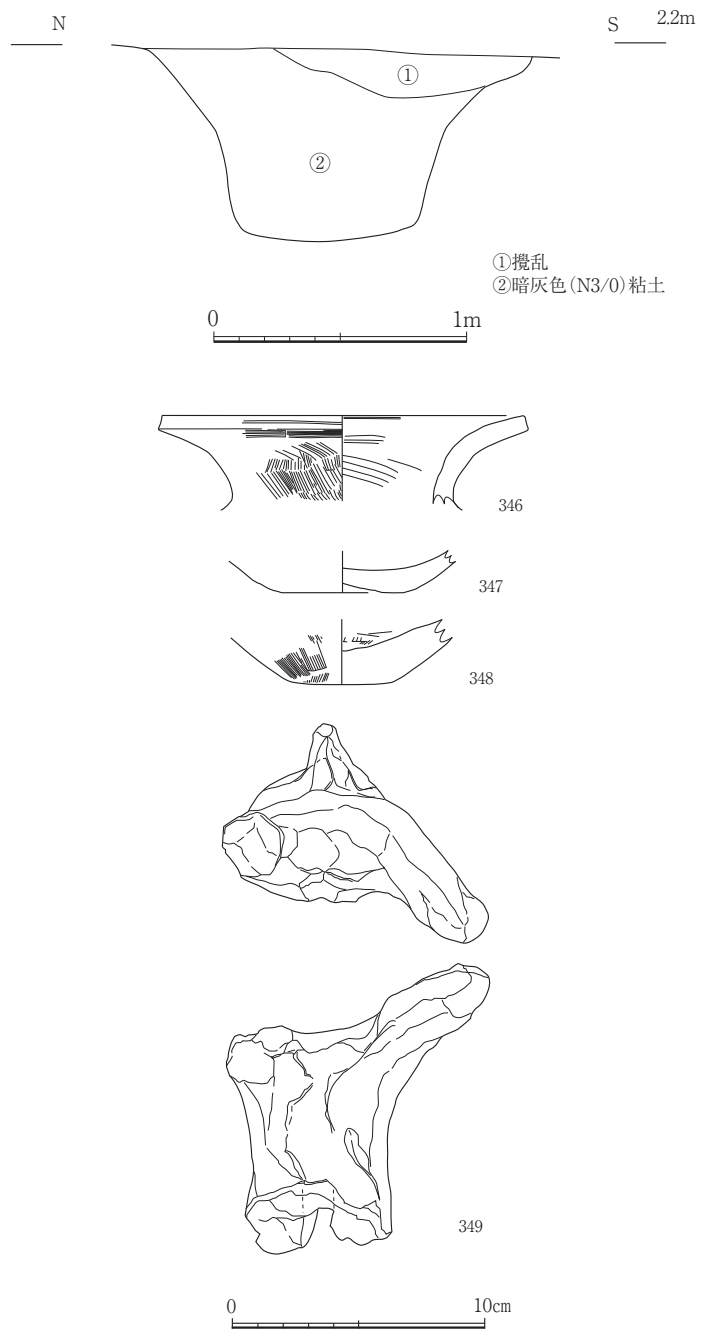
(4) SK3

調査区南西部で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約2 m、短軸約1 m、検出面からの深さは約0.3 mを測る。

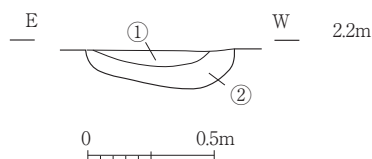
(5) SK4

調査区中央部南端で検出した不整形を呈する土坑である。SD6と切り合い関係を有するが先後関係は不明である。長軸約1.4 m、短軸約0.9 m、検出面からの深さは約0.3 mを測る。出土遺物は高松平野からの搬入土器等、比較的多くの遺物が出土した。

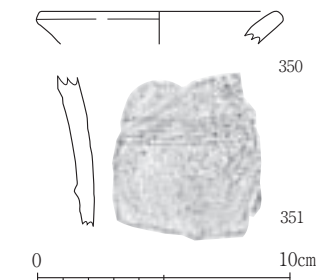
334は肩部から口縁部にかけての破片である。口縁部は短い頸部から外反する。口唇部は平坦面を成し、ごく僅かに下方に拡張する。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。335は体部から頸部にかけての破片である。最大径は中胴部に位置し、頸部はやや内傾気味に立ち上がる。外面はハケ調整後、下胴部ミガキ調整を施す。内面の下胴部はケズリ調整であり、上半部には指頭圧痕が認められる。また、肩部には絞り目が見られる。高松平野からの搬入品である。336は甕であり、全体の形態が判明する資料である。底部は平底であり、やや長めの直立部を持つ。体部は長胴であり、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は比較的丁寧に面取りされている。体部外面は叩き後ナデ調整である。叩



第51図 SK5セクション図・出土遺物実測図



① 褐灰色 (10YR5/1) 粘土
② 褐灰色 (10YR5/1) 粘土 (炭化物を層状に含む。)



第52図 SK6セクション図・遺物実測図

き目の方向は下半部では水平であり、上半部は右上がりである。ナデ調整は叩き目の方向が変化する中胴部付近に施される。内面、口縁部はナデ調整である。337～340は底部である。337～339は平底であり、外面はナデ調整あるいはハケ調整が施されており、叩き目が認められない。340は丸底であり、外面は叩き調整である。底面はナデにより丸底化する。混入の可能性がある。341の脚部は短く、裾部に向かい僅かにひろがる。脚部は直線的に外上方へのびる。また、脚部から杯部の底に粘土を押しつけた痕跡が認められる。342は大形鉢である。平底から体部が外上方へのび、中位に最大径となり、緩やかに窄まり、口縁部は短く外反する。外面はハケ調整後、ナデ調整を施し、内面下半はナデ調整であり、上半はケズリ調整である。343は鉢である。上胴部屈曲部を持ち、口縁部はあまりひらかない。口唇部は尖らせ気味におさめる。外面下半部はナデ調整であり、上半部は粗いハケ調整である。内面はナデ調整である。法量に対して器厚は厚い。344は鉢である。突出した底部から体部は直線的に大きくのびる。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。345は片刃の打製石包丁である。両端に抉りを有し、両面とも主要剥離面を残す。

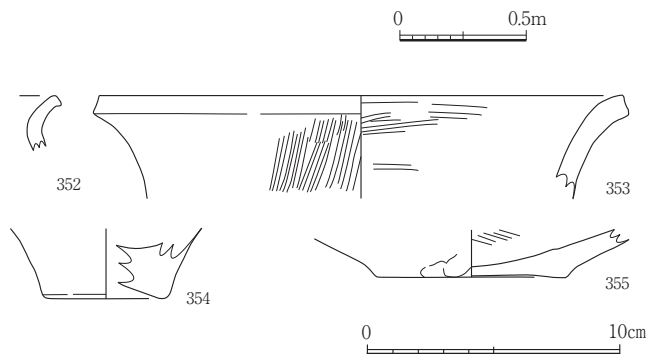
(6) SK5

調査区中央部南端で検出した土坑である。直径約1.7mの円形を呈する。深さは検出面から約0.8mであり、断面形は逆台形を呈する。遺構の形状に加え湧水が激しかった状況を考え合わせ井戸跡である可能性が高い。掘立柱建物を構成するSP5に切られている可能性が高い。

346は壺の口縁部である。口唇部は平坦面を成す。内外面ともハケ調整である。347・348は底部



① 灰色 (N5/0) 粘土 (炭化物を含む。)



第53図 SD6セクション図・出土遺物実測図

である。347はほぼ丸底であり、内外面ともナデ調整である。348の底端部は丸味を帯びるが、底面は平らである。外面は底面も含めてハケ調整であり、内面もハケ調整である。349は支脚である。脚部から突起にかけての破片である。中空の脚部から突起が長くのびる。背部にはつまみが作り出される。全体的に煤が付着している。

(7) SK6

調査区西端部で検出した不整形を呈する土坑である。長軸約0.6m、短

軸約 0.5 m、深さ 0.17 m を測る。

350 は壺の口縁部である。内外面ともナデ調整であり、口唇部は丸くおさめる。351 は壺の体部であり、櫛描波状文、櫛描直線文を巡らせる。

(8) SD6

調査区南西部で検出した幅約 1.7 m の溝跡である。検出面からの深さは 0.06 ～ 0.14 m であり、東側へいくにしたがい浅くなる。断面形は非常に薄いレンズ状を呈する。約 22 m 検出しているが両端とも調査区外へと伸びる。

352 は口縁部である。口唇部は面取りされ、僅かに下方に拡張する。内外面ともナデ調整である。353 は壺の口縁部であり、口唇部は凹面状を呈する。内外面ともハケ調整である。354・355 は底部である。354 はやや上げ底であり、内外面ともナデ調整である。355 はやや上げ底であり、体部は大きく直線的にひろがる。

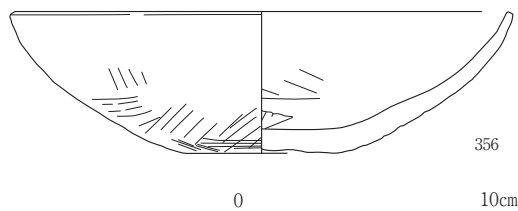
(9) SD7

調査区南西隅部で検出した溝跡あるいは土坑の一部である。遺構のほとんどは調査区外であり、幅は 2.1 m までは検出した。深さは検出面から約 0.2 m である。

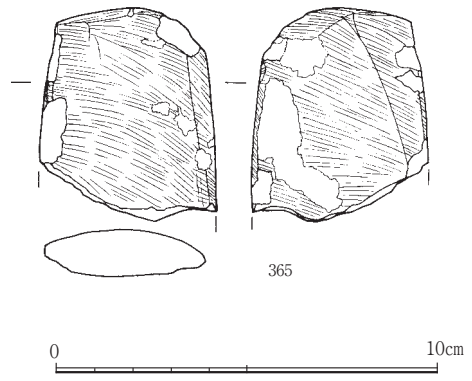
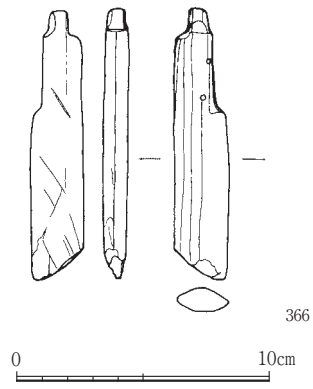
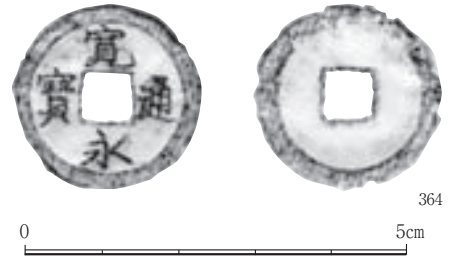
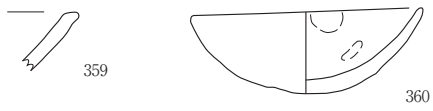
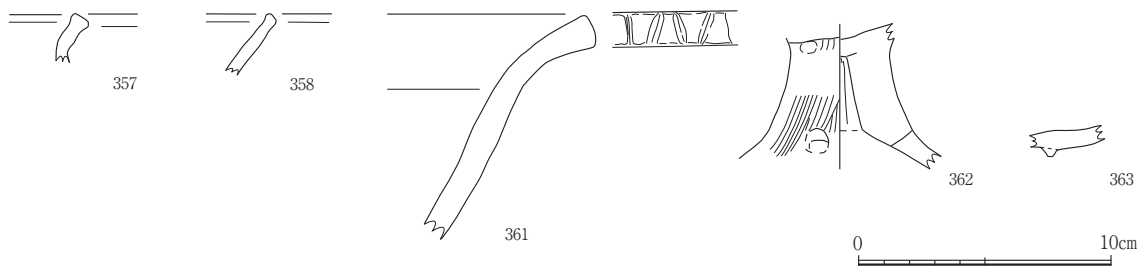
356 は鉢である。丸底から体部は丸味を持ち立ち上がる。口径に比べ器高が低い。外面は叩き後、粗いハケ調整であり、内面はナデ調整である。外底面はナデることで丸底化している。

(10) 包含層出土遺物

357 は口縁部であり、端部をつまみ上げる。内外面ともナデ調整である。358 は庄内式土器の甕である。内外面ともナデ調整であり、口唇部をつまみ上げる。359 は布留式土器の甕である。口縁部は内湾気味であり、端部は丸味を帯びた平坦面を成す。内外面ともナデ調整である。360 は小形鉢である。内外面ともナデ調整である。361 は鉢である。体部から口縁部が大きくひろく。口唇部は平坦面を成し、刻目文を施す。362 は高杯である。脚部は短く裾部は大きくひろがる。中空ではあるが器壁は厚い。また、脚部と裾部の境目付近に円孔を 3 カ所穿つ。外面はミガキ調整である。363 は土師質土器の椀である。底面には輪高台が巡る。364 は寛永通宝である。「マ」頭通である。365 は蛇紋岩製の石斧である。基部は丸みを帯び、刃部に向かい幅が増す。断面は扁平であり、一部に自然面を残すが、全体的に研磨が施されている。



第54図 SD7出土遺物実測図



第55図 包含層出土遺物実測図

第IV章 まとめ

第1節 検出遺構について

第III章で述べたように今回の調査では、弥生時代中期前半、中期末～後期初頭、後期後半、後期末～古墳時代初頭の4時期の遺構を検出した。幅が狭く標高も低い自然堤防上に面した立地は水の影響を強く受けていたものと推定される。そのため各時期とも遺構の密度は疎らであり、集落域の縁辺部に該当する。

(1) 弥生中期前半の遺構

弥生時代中期前半では溝跡2条(SD1・SD2)と土坑1基(SK6)を検出した。集落の縁辺部にあたると推測される。SD1とSD2の両溝跡は並走し調査区内で交わるが、分岐なのか合流なのかは判然としない。SD1はSD2よりも規模は大きく、SD1の底面のレベルはSD2よりも低い。さらにSD1は微高地の先端付近を走り、両端とも調査区外にのびることから北東方向でさらに大きな溝あるいは流路跡に接続し、西方向の微低地あるいは国分川の旧流路等に合流していたものと推測する。また、溝跡の性格を理解するためにSD1の埋土について土壌分析を行った(付編1参照)。当初水田耕作にとまう用排水路としての役割を想定していたが分析の結果、稲のプラントオパールは検出されたものの量は少なく水田耕作に関連づけるにはやや短絡的すぎるきらいがあると考ええる。

このように規模の異なる溝跡の並走する例は田村遺跡群でもみることができる(註1)。時期的には中期後半から後期前半のものであり、ミトロ遺跡例よりも時期的には新しいが比較してみたい。例えば、J区での大溝6とSD406・SD506についてみてみたい。大溝6は幅約3.5m、J区内では北東方向から南西方向に流れる。SD406・SD506は幅約1mであり、出土遺物は少ない。両溝は方向・時期から接続しているものと推定されるが、攪乱のため接続部については検出されていない。大溝6とSD406・SD506の心々間の距離は約15～21mである。次にL区の例をみる。ここでは大溝2とSD103とSD104の3条の溝跡が並走している。接続関係が判然としないが、方向・時期等から何らかの有機的な関係を有していたものと推測できる。SD104は幅約1m、SD103は幅約0.5mで大溝2から離れるにつれ規模は小さくなる。大溝2とSD104の心々間の距離は約8mであり、L1区内では一定である。大溝2とSD103の心々間の距離は16～23mであり南にいくにつれ両溝の間隔がひろがる傾向があり、SD104とSD103の心々間の距離も8～15mと南にいくにつれ両溝の間隔がひろがる。他にもK区で大溝5と並走する溝跡が認められる。これら以外にも田村遺跡群では部分的に規模の異なる複数の溝跡が並走する例が散見される。しかし、検出遺構が非常に多く、複雑な重複関係から抽出することは困難である。最後確認された例から共通点を探ってみたい。田村遺跡群では大溝は基本的に北東部から流入し、南西方向に流れる。大溝1～5は調査区北半部では類似した軌跡を示し、調査区中程で大溝4・5は大きく方向を西側へむける。一方、大溝1～3は南西方向へとびる。大溝6と7については調査区内ですでに大溝1～5とは異なった流路方向を持つ。並走する溝のうち小規模のものは微地形的に標高が下がるほうに派生している。並走する地点には竪穴住居跡の遺構が疎らな地点である等、ミトロ遺跡例との共通点を指摘できる。



第56図 田村遺跡群検出の溝跡全体図



第57図 田村遺跡群検出の溝跡

	細頸広口壺	太頸広口壺	甕 高知平野西部系
Ⅱ-1期			
Ⅱ-2期			
Ⅲ-1・2期			

第58図 中期前半の土器変遷図

(2) 弥生中期末～後期初頭の遺構

当該期は土坑1基(SK1)を検出したのみである。周辺に当該期の遺構が展開している可能性があるが、このような単発的な状況は国衙跡の様相と類似している(註2)。田村遺跡群で最盛期を迎える時期であり、周辺地域の一様相として捉えておきたい。

(3) 弥生後期後半の遺構

当該期は土坑1基(SK4)を検出したのみであり、前段階(弥生中期末～後期初頭)同様、遺構は少ない。土坑自体は比較的整ったプランを有しており、図上で復原可能な土器が3点出土した。また、讃岐地域からの壺も出土した。

(4) 弥生後期末～古墳時代初頭の遺構

ST1・ST2・SB1・SD3・SD3S・SD3N・SK5等であり、当調査区では最盛期の時期であり、県内でも遺跡数が増加する。周辺では約2km北東に小籠遺跡が存在する。調査の結果20棟弱の竪穴住居跡が検出されている。ミトコ遺跡に比べ遺構の密集度合いも高く、規模の大きかったムラであり、両者は有機的な関連を有していたものと推測される。

ST1・ST2は小形の竪穴住居跡であり、出土遺物等からST1は鉄器製作に関連する工房跡の可能性が高い。また、溝跡ではSD3S廃絶後にSD3Nを掘削していることが調査で明らかとなった。両溝は大部分が重複しており、検出状況からは流末を少し北側へ変更しただけであり、この変更に如何なる意味があったのだろうか。SD3Sを埋めた後の祭祀行為と関連づけて検討していかなければならない。

出土遺物では庄内式土器と目される破片が小破片まで含めると約80点が出土している。在地の土器片に占める割合は限りなく0%に近いが、調査区の面積に比べれば南四国の遺跡での出土量は群を抜いている。土佐潟に面した立地と無関係ではないであろう。

第2節 出土遺物について

弥生時代中期前半の調査例は県下でも少なく、今次調査で得られた資料は溝跡の出土ではあるが、まとまりのあるものである。ここではSD1出土資料を前後の時期と比較し、編年的な位置づけについて述べてみたい。中期前半は『様式と編年』ではⅡ期をⅡ-1とⅡ-2期に、Ⅲ期をⅢ-1～Ⅲ-3期に細分され、Ⅲ-3期は凹線文の出現期に該当しており時期的にはⅢ-2期までを対象とする(註3)。また、器種構成では壺・甕・鉢であるが、鉢の出土量は少なく今回は主要器種である壺・甕についてのみ述べてみたい。

〔Ⅱ-1期〕 壺は細頸広口壺と太頸広口壺で構成される。甕については田村遺跡群出土資料の中から次の段階と関連しそうなものを抽出することができなかつたため、図面の提示は行っていない。

細頸広口壺(1・2)は球形、あるいは重心を下位に持つ形態であり、底部はやや上げ底を呈する。口縁部は肩部から稜線を持ち、ややシャープに外反する。口縁部・頸部・体部に文様帯を持つ。口唇部は凹状を成し上下端に刻目を施し、口縁部内面にも穿孔等の施文を行う。頸部・体部は櫛描文等を施す。太頸広口壺も細頸広口壺と同様の特徴を有する。4は口縁部があまりひらかなないタイプであり、文様もほとんど施されず、やや異質な壺であり系譜が異なるものと考えられる。

〔Ⅱ-2期〕Ⅱ-1に比べ壺の形態に大きな変化が認められる。Ⅱ-1では頸胴部境が稜線を持ち屈曲するがⅡ-2期では稜線を持たずに緩やかに屈曲するようになり、肩部の張りが弱くなり、「なで肩」を呈する。これ以降の在地系土器の形態的な特徴になっていく。甕についても同様であり、両者は連動している。ただ、底部を僅かな上げ底に仕上げることは継承される。壺は細頸広口壺と太頸広口壺で構成され前段階と同様である。細頸広口壺(5)には長頸化の萌芽が認められる。文様帯は口縁部と上胴部であり、頸部は無文となる。口縁部には粘土帯を貼付した後、円孔を穿つ。円孔以外にも何らかの施文を施すものがあり、古い要素が残存している。文様では簾状文が新たに加わり、櫛描直線文・波状文と組み合わせて上胴部に施される。簾状文は半裁竹管状の原体を用い、押し引き風に施す。一度に施される単位は2～3条程度である。小形の細頸広口壺も次の段階にもみられることから、この段階にも存在していると考えられる。太頸広口壺(6・7)は形態的に二種類に細分でき、両者は系譜を異にする可能性がある。6は細頸広口壺と同様の特徴を有している。施文部位・文様構成もほぼ同じである。甕(8～10)は、それぞれ系譜が異なっているものと考えられる。8は口縁部を欠くが、形態的な特徴から次の段階の20・21と関連してくると推測される。9は前期末からの系譜を辿ることができる。口縁部が「く」の字状を呈するもので、この段階で消滅する。10は形態的な特徴から甕に分類したが器壁は厚く、違和感のあるものである。それぞれ出土量は少なく、計算は行っていないが器種組成比率に甕の占める割合は少なく、壺の占める割合は多い。11は高知平野西部系の甕である。外面には浮文・微隆起突帯で飾られる。また、ミトロ遺跡から出土している高知平野西部からの搬入品と考えられる土器は、胎土に多量の砂粒を含み、肉眼でも容易に判別することができる。在地系土器に占める割合は正確には比率を計算していないが限りなく0%に近い。

〔Ⅲ-1・2期〕小形の細頸広口壺(12・13)は口縁部は貼付口縁であり、あまりひろがらない。なで肩であり、体部は中位に最大径を有し球形に近い。上胴部に櫛描文の文様帯を持つ。口縁部は貼付以外は無文である。細頸広口壺(14～16)では頸部が最も長くなる。口縁部は貼付口縁であり水平近くまで外反する。なで肩であり、体部は中位に最大径を有し球形に近い。施文帯は上胴部のみであり、櫛描文、突帯文を施す。口縁部は貼付以外は無文である。大形の細頸広口壺(17)は口縁部はあまりひらかず、なで肩である。文様は口縁部への粘土帯貼付以外は無文である。この時期以降、主流となっていく壺である。太頸広口壺(18)はなで肩であり、体部は最大径を中位もしくは中位より若干上がった位置に持つ。貼付口縁以外は無文である。大形壺(19)は口唇部、上胴部に施文され、他のものに比べ加飾傾向が強い。甕(20・21)は形態的には頸部は太く、口縁部は緩やかに外反させる。体部は中位に最大径を有する長楕円形である。文様は口縁部への粘土帯貼付と上胴部への施文である。上胴部の文様は、刺突文・浮文等が主流である。形態的な特徴、外面に煤が付着する例が多いことから田村遺跡群での当該期の甕と考えられる。甕(22)と壺(23)は高知平野西部系の土器である。詳述はしないが、甕(22)の頸部に施された縦方向の文様が前段階の微隆起突帯から沈線に変化している。

石器についても若干、触れておきたい。SD1からは蛇紋岩製の伐採斧及び未成品が出土しており、ミトロ遺跡で生産されていたことが窺える。田村遺跡群での伐採斧はほとんどすべてが緑色岩類・御荷鉾緑色岩製であり、蛇紋岩は使用されていないことから(註4)、集落単位で生産していた可能性を指摘できる。近隣の栄エ田遺跡から縄文後期～晩期の磨製石斧の製品・未成品がまとめて出土

しており、すべて蛇紋岩である(註5)。ミトロ遺跡例もこのような伝統的な伐採斧生産の流れのなかに位置付けられる。一方、柱状片刃石斧は緑色岩製であり田村遺跡群との関連を想定できる。以上のことから石器の種類により生産体制が異なっていたことが指摘でき、器種別に細かく検討していく必要がある。

註

1. 大溝跡全体については高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006『田村遺跡群Ⅱ』の第7分冊、J区は第5分冊、K区・L区は第6分冊である。
 2. 高知県南国市教育委員会 2001『土佐国衙跡発掘調査報告書第12集』
 3. 出原恵三 2000「5.土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社ではⅢ-2期の特徴は外面ヘラケズリと脚付き壺の出現を指標としているものの、これらの特徴からⅢ-2期の資料を峻別するのは現状では困難であると考えており、Ⅲ期を凹線文の出現前と出現後の二時期に区分したい。なお、坂本憲昭 2004「高知県中央部〈田村遺跡群〉の弥生中期中葉～中期末の土器」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会及び坂本憲昭 2006「Ⅵ弥生時代中後期の土器群」『田村遺跡群Ⅱ第9分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターでの時期区分を踏襲する。
 4. 小野由香 2006「Ⅷ弥生時代の石器・石製品」『田村遺跡群Ⅱ第9分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
 5. (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995『栄エ田遺跡』
- 図版出典
- 1・2 2005『田村遺跡群Ⅱ第3分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター E6SX601
 - 3・4 1986『田村遺跡群第5分冊』高知県教育委員会 L36ASD2
 - 5～10 『ミトロ遺跡』SD1
 - 12～17・21・22 2002『田村遺跡群・緑の広場調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター SD2
 - 20 2002『田村遺跡群・緑の広場調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター ST1
 - 18・19 2005『田村遺跡群Ⅱ第3分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター F3ST303
 - 23 1986『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)』高知県教育委員会 L49ST4

付 編

付編1. ミトロ遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

田中 義文・辻本 裕也・馬場 健司・高橋 敦

はじめに

ミトロ遺跡は、国分川の自然堤防上に立地し、弥生時代の住居や溝跡などを中心とする遺跡である（図1）。

調査区の現地表面の標高は約 3.0m であり、弥生時代の遺構検出面が約 2.2m となる。遺構検出面最下部には、砂礫層の累重が認められ、その上位に主に泥層からなる堆積物が覆う。弥生時代の遺構検出面は、この泥層を基盤としている。分析試料となった遺構埋土は、基盤層の粒度組成と類似した泥質堆積物で構成されている。

今回の分析は、遺構埋土の花粉分析や植物珪酸体分析、遺構出土材の樹種同定を行うことにより、当時の古環境に関する情報を得ることを目的として実施する。

1. 試料

土壌試料は、I 区 SD1 から 2 点（I 層、II 層）、I 区 SD3N から 1 点、II -1 区の SK5 から 1 点の計 4 点を分析する。一方、樹種同定用試料は、II -1 区の SK5、SP9 から検出された木材 2 点である。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.2）による

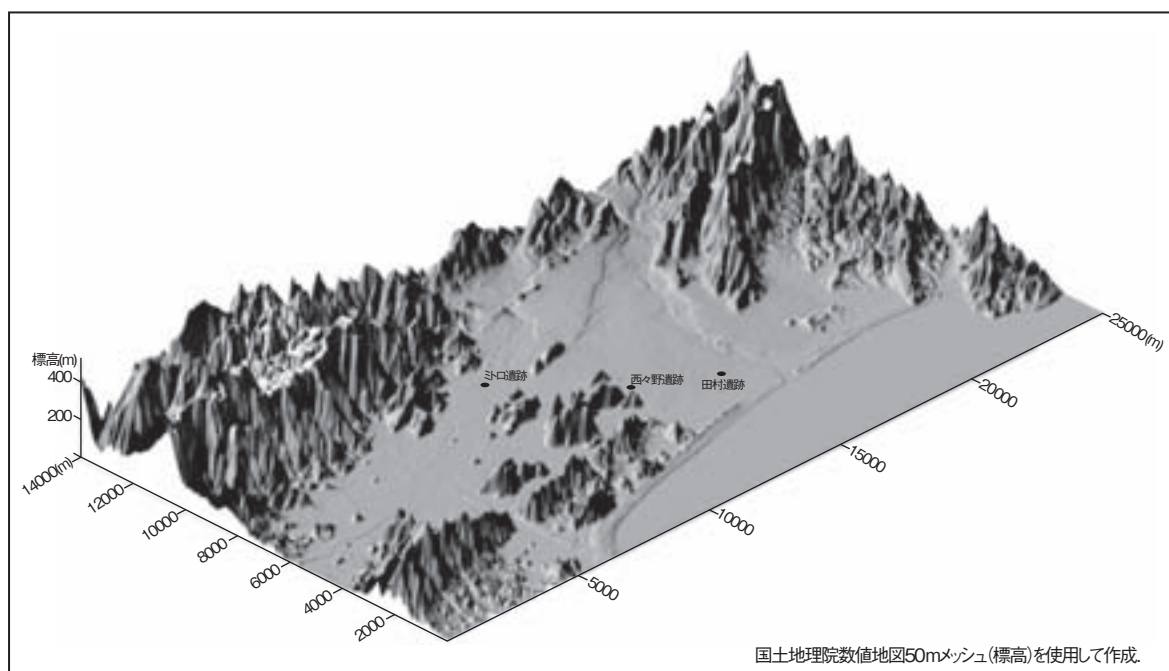


図1. 調査地点位置図

有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理、化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。これをカバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東 (1982) および Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林 (1990)、伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表 1、図 2 に示す。SD1 の II 層では花粉化石の検出数が少ないが、他の試料からは比較的多く検出される。また保存状態は全体的に悪い。図示した 3 点は、いずれも草本花粉の割合が高い。木本花粉組成をみると、アカガシ亜属とクリ属-シイノキ属の割合が高く、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、ヤマモモ属、コナラ亜属などを伴う。SD1 の I 層では、アカガシ亜属よりもクリ属-シイノキ属の割合が高いが、他の 2 試料は逆である。草本花粉をみると、イネ科の割合が高く、ヨモギ属も比較的多い。その他、ガマ属、カヤツリグサ科、クワ科、セリ科などが検出される。ソラマメ属、アズキ属などのマメ科も少量検出されるが、これらは近縁の野生種との区別が付か

表1. 花粉分析結果

種類	調査区・遺構名・層位			
	I 区		II-1 区	
	SD1		SD3N	SK5
	I 層	II 層	埋土	埋土
木本花粉				
マキ属	—	—	1	—
モミ属	2	1	8	7
ツガ属	9	2	19	9
マツ属	1	2	20	9
コウヤマキ属	9	2	15	21
スギ属	1	—	4	5
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	1	16	6
ヤマモモ属	6	1	10	3
クルミ属	—	—	1	1
クマシダ属-アサダ属	3	—	5	4
ハンノキ属	1	—	3	1
ブナ属	1	—	—	4
コナラ属コナラ亜属	9	2	20	7
コナラ属アカガシ亜属	20	2	51	101
クリ属-シイノキ属	40	—	34	27
ニレ属-ケヤキ属	—	—	2	1
ブドウ属	1	—	—	—
ハイノキ属	—	—	2	—
エゴノキ属	—	—	—	1
イボタノキ属	—	—	1	—
ムラサキシキブ属近似種	—	—	—	2
草本花粉				
ガマ属	4	1	48	—
イネ科	145	26	168	355
カヤツリグサ科	7	—	20	4
クワ科	—	—	—	12
ギンギン属	—	—	—	21
サナエタデ節-ウナギツカミ節	—	—	—	3
アカザ科	2	—	1	28
ナデシコ科	2	—	—	4
カラマツソウ属	2	1	—	—
タケニグサ属	—	—	—	4
アブラナ科	—	—	—	2
バラ科	—	—	—	1
ソラマメ属	—	2	2	—
アズキ属	—	—	—	1
マメ科	—	—	5	6
セリ科	16	2	12	27
ヒルガオ属	—	—	—	1
オオバコ属	—	—	—	17
ツリガネ属-ホタルブクロ属	1	—	—	—
ヨモギ属	81	15	78	51
キク亜科	8	1	3	7
タンポポ亜科	3	1	3	26
不明花粉	22	—	21	13
シダ類胞子				
ヒカゲノカズラ属	1	—	1	6
ゼンマイ属	—	—	1	2
イノモトソウ属	7	5	41	23
他のシダ類胞子属	35	7	94	88
合計				
木本花粉	106	13	212	209
草本花粉	275	49	343	643
不明花粉	22	0	21	13
シダ類胞子	43	12	137	119
総計 (不明を除く)	424	74	692	971

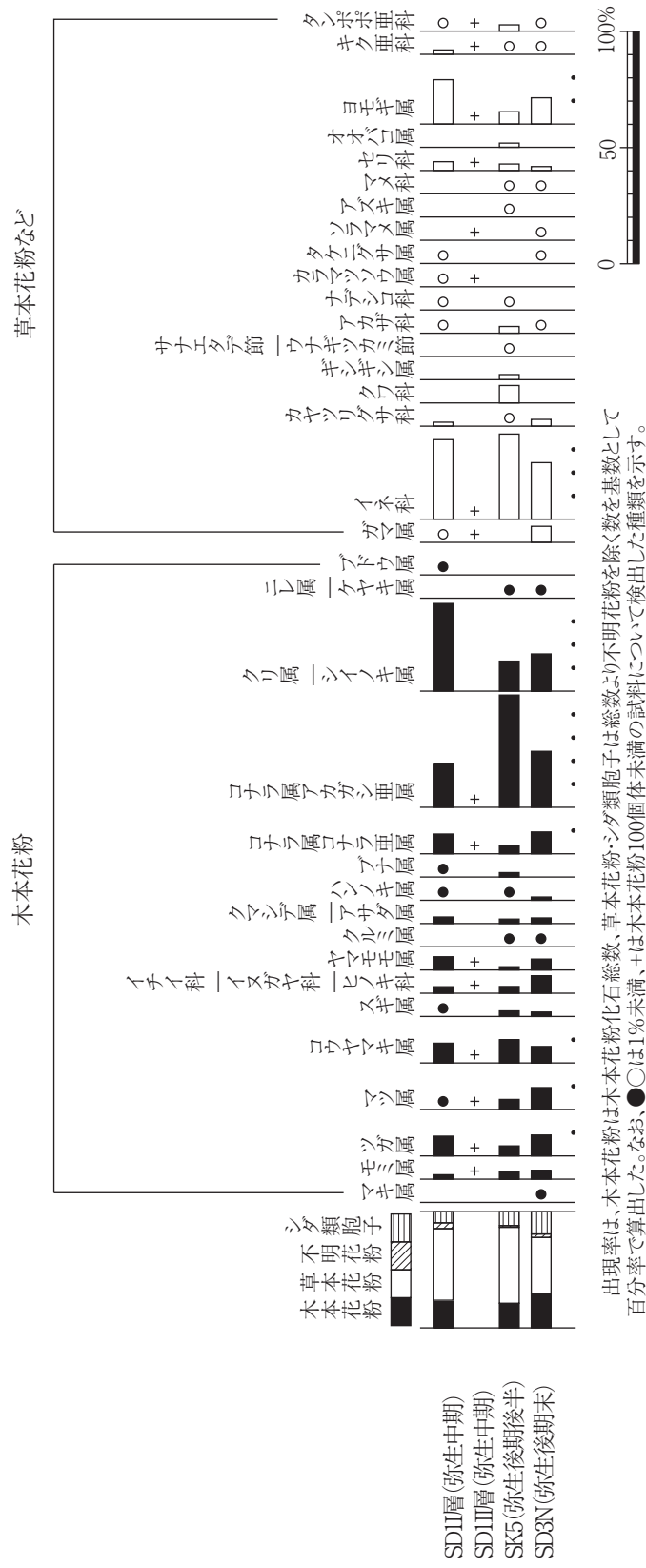


図2. 各地点の花粉化石群集

表2. 植物珪酸体含量 (個/g)

種類	調査区・遺構名・層位			
	I 区		II-1 区	
	SD1		SD3N	SK5
	I 層	II 層	埋土	埋土
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	—	700	100	—
タケ亜科ネザサ節	6,800	5,500	1,500	2,300
タケ亜科	10,100	8,600	5,100	5,400
ヨシ属	1,300	700	500	400
ウシクサ族ススキ属	500	600	1,100	100
イチゴツナギ亜科	200	200	—	100
不明キビ型	3,800	2,200	1,900	1,400
不明ヒゲシバ型	2,800	2,800	2,100	1,400
不明ダンチク型	4,900	2,700	2,800	2,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	200	2,700	100	—
タケ亜科ネザサ節	4,600	8,500	5,300	4,200
タケ亜科	2,300	9,300	6,200	5,100
ヨシ属	300	1,200	100	900
ウシクサ族	—	300	300	100
不明	1,800	2,900	1,400	3,400
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	30,300	24,000	15,000	13,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,200	24,900	13,400	13,700
総 計	39,500	48,900	28,400	27,000

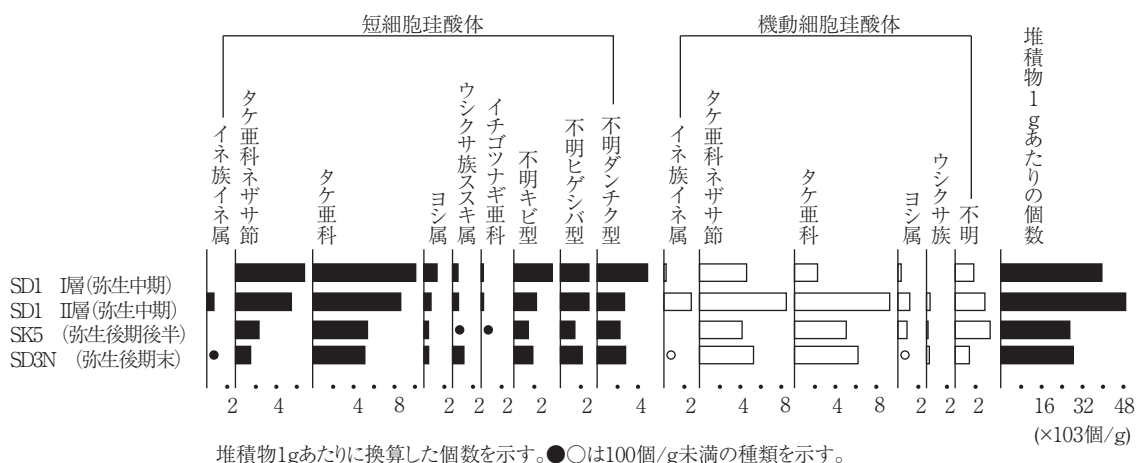


図3. 各地点の植物珪酸体含量

ないことから、栽培に由来するかどうかは不明である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

I区SD1のI層とII層では、植物珪酸体含量が40,000個/g前後である。いずれもネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、栽培植物であるイネ属も検出される。その含量はII層で多く、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約2,700個/gである。I層では機動細胞珪酸体のみが検出され、その含量は約200個/gである。

I区SD3Nの埋土では、SD1よりも植物珪酸体含量が少ないものの、同様な産出が見られる。すなわち、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。イネ属の含量はSD1埋土よりも少なく、それぞれ約90個/gである。

II-1区SK5の埋土でも、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。ただし、イネ属は検出されない。

(3) 樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。SK5出土材は針葉樹のマツ属複維管束亜属、SP9出土材は常緑広葉樹のツブラジイに同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

表3. 樹種同定結果

地区	遺構名	樹種
II-1	SK5(井戸跡?)	マツ属複維管束亜属
	SP9	ツブラジイ

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon)
マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ツブラジイ (Castanopsis cuspidata (Thunberg) Schottky) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

4. 考察

(1) 調査区および遺跡を取り巻く弥生時代の古植生

今回の分析では、弥生時代中期から後期の古植生についての情報を得ることが出来た。分析結果で注目される点は、草本花粉の比率が高いことにある。草本化石では、イネ科やヨモギ属の割合が高く、さらに随伴する種類も人里など開けた草地を作る種類が多いことが特徴としてあげられる。本遺跡は、国分川の氾濫原上に形成された自然堤防に立地していることから、当該期に地表

面付近で比較的乾燥した土壤環境が形成されていたと考えられる。植物珪酸体分析では、乾いた土地条件を好むネザサ節を含むタケ亜科が優占しており、遺跡の立地と調和的な傾向を示す。但し、ネザサ節を含むタケ亜科の植物珪酸体生産量は他のイネ科植物に比べ多く（杉山,1986）、また当社のこれまでの分析で自然堤防などを構成する氾濫堆積物で多産する傾向があるので、分析結果ほどは周囲に分布していなかったと思われる。ウシクサ族を含むススキ族もネザサ節を含むタケ亜科と同様の環境を好むことから、当時、調査区周辺に分布していたものと考えられる。

今回の分析試料は遺構堆積物であり、花粉化石のタフォノミーを考慮すると、遺跡を構成する土層に比べ、より局地的な古植生を反映しているものと考えられる。このことをふまえると、花粉分析結果で示された人里植物を含む草本を含む草本花粉の卓越は、弥生時代中期および後期における調査区およびその周辺の植生の一端を示しているものと解釈される。発掘調査では、調査区内が分析対象層準の時期である弥生時代中期および後期に集落域であったことが明らかにされている。このような発掘調査および花粉分析結果をふまえると、弥生時代中期および後期に調査区内では、草地を主体とした植生景観が広がっていたことが推定される。溝埋土で検出されたガマ属の花粉化石や植物珪酸体化石で確認されたヨシ属は、湿潤な場所を好むことから、溝内などの調査区内において相対的に低所に位置し、水が溜まり易いような場所や地下水位が高い場所に生育していたものと推測される。

次に木本花粉について着目してみると、出現率に違いがみられるものの、アカガシ亜属とシイノキ属の割合が高いことが指摘される。また、ヤマモモ属など常緑樹林の林縁等に生育する低木類もみられる。遺跡の立地と花粉化石のタフォノミーを考慮すると、これらの木本化石の多くは、調査区を取り巻く丘陵や山地斜面に分布していた樹木に由来するものと考えられる。今回得られた花粉分析結果のうち、得られた木本花粉の化石群集からは、周囲の丘陵や山地斜面でシイ・カシなどいわゆる照葉樹を中心とした森林植生が展開していたことがうかがえる。このような分析結果は、これまでに実施された高知県南部の花粉分析結果と調和的であることが指摘される（三宅・石川,2004;山中ほか,1992;中村,1965）。

なお、照葉樹林の主要な構成要素であるクスノキ科の花粉化石は、膜が弱く化石としてはほとんど残らない（Feagri and Iversen,1989）。このため、花粉化石からクスノキ科が生育していたかどうかを推測することは難しいが、花粉化石から推測される種類構成から推測すると、タブやクスノキなどのクスノキ科もこれらに混じって生育していたと思われる。その他、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科等針葉樹の花粉化石が検出されるが、これらについては調査区を取り巻く丘陵や山地斜面に当時、生育していた温帯性の針葉樹林に由来するものと推定される。

植物珪酸体分析の結果のうち、栽培種であるイネ属について見てみると、弥生時代中期中葉のSD1埋土（I層とII層）と後期末のSD3N埋土で検出されている。しかしながら、その含量は機動細胞珪酸体で数十から数百個/gである。稲作が行われた水田跡の土壤ではイネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多いとされるが（杉山,2000）、今回の含量は、これと比較すれば少ない。分析試料は溝や井戸跡の可能性のある土坑埋土から採取されており、これらは

稲作に直接関係した遺構で無いため、イネ属珪酸体の含量が少ないこと自体、納得できる分析結果である。これらのイネ属珪酸体の由来については、弥生時代中期および後期に居住域内に持ち込まれたイネか、これらの遺構が埋積する間に遺跡周辺で行われた稲作に由来する珪酸体を取り込まれものと想定される。このような分析結果からは、弥生時代中期および後期に、調査区およびその周辺においてなんらかのかたちでイネが利用されていたことが示唆される。なお、物部川河口右岸の低位な自然堤防上に立地する田村遺跡群では、弥生時代前期とされる環濠の埋土や弥生時代の層位からイネ属が検出され、周辺での稲作の存在が示唆されている（古環境研究所,2004）。

(2) SK5とSP9から検出された樹種について

SK5から検出された樹種は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。現在の四国に分布するマツ属複維管束亜属には、アカマツ、クロマツと雑種が認められる。いずれも日本産の針葉樹の中では重硬な部類に入るが、加工は容易で、樹脂（松脂）を多く含むために水湿の場所で耐朽性が高いとされる。

SP9から検出された樹種は、常緑広葉樹のツブラジイに同定された。ツブラジイは、やや重硬な部類に入り、強度は比較的高いが、耐朽性等は低いとされる。ツブラジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、花粉分析の結果から、当時周辺の丘陵や低山地等に分布していたと考えられている。このことから、ツブラジイは、遺跡周辺に生育し、木材の入手が可能であったと考えられる。

5. 小結

今回の自然科学分析によって、弥生時代に調査区およびその周辺では、以下のような古環境が推定された。

1. 弥生時代中期および後期に調査区内では、草地を主体とした植生景観が展開していたと考えられた。
2. 弥生時代中期および後期に調査区に展開した草地には、ネザサ節を含むタケ亜科やウシクサ族を含むススキ族といったイネ科およびヨモギ属など人里植物に分類される種類の草本が多く分布していたと考えられた。
3. 弥生時代中期および後期に調査区内において、溝内などの相対的低所には、ガマ属やヨシ属が分布していた。
4. 弥生時代中期および後期に遺跡を取り巻く丘陵や山地斜面では、シイ・カシなどいわゆる照葉樹を中心とした森林植生が展開していた。また、温帯性の針葉樹林に由来すると思われるモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も分布していた。
5. 弥生時代中期中葉のSD1と後期末のSD3N埋土からは、栽培種であるイネ属がわずかな含量ながら検出された。このイネ属は、居住域内に持ち込まれたイネないし周辺の稲作に由来するものと推定された。
6. SK5から検出された木材はマツ属複維管束亜属、SP9ではツブラジイに同定された。これらの樹種はいずれも遺跡周辺に生育が可能な樹木であった。

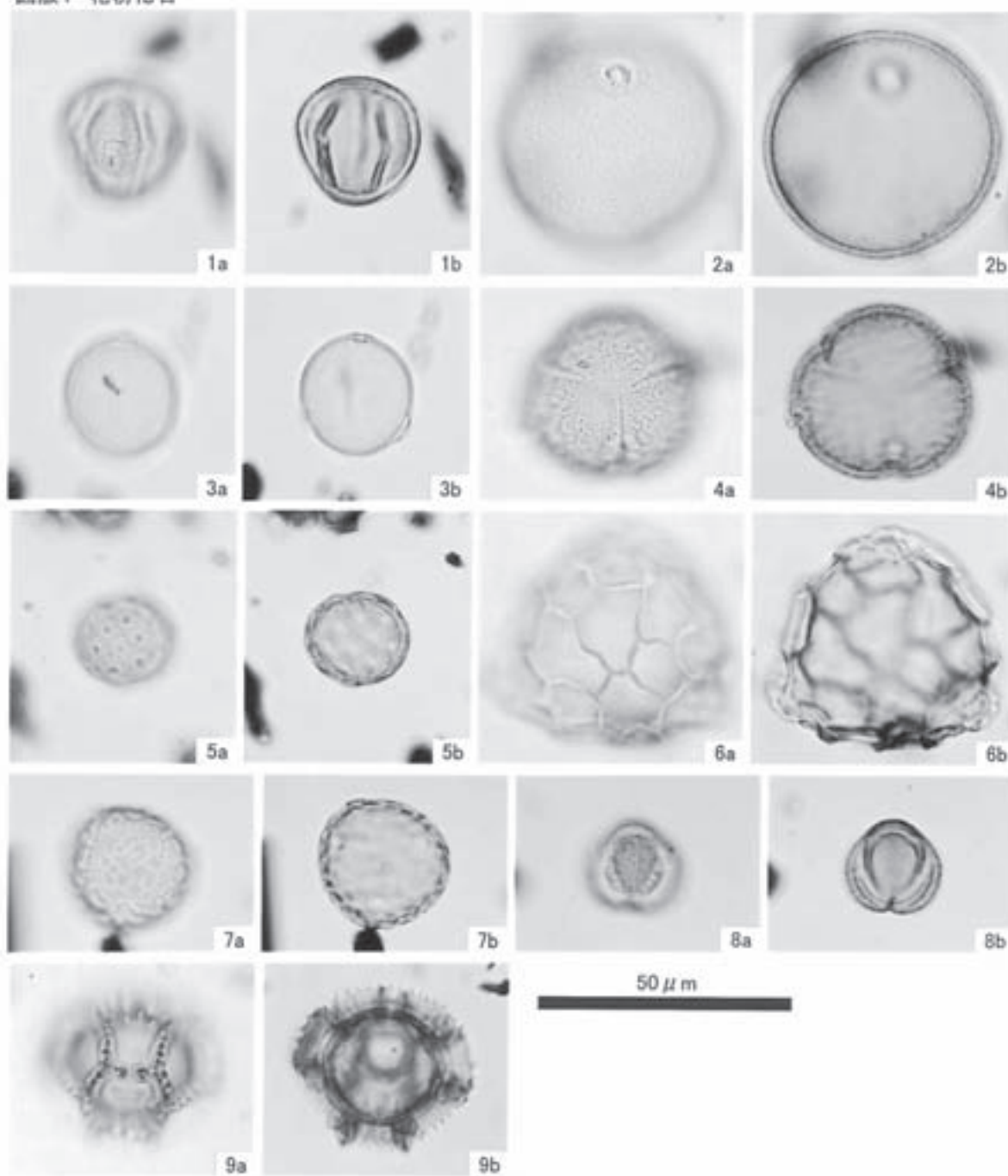
今回の分析では、上記のような調査区およびその周辺での景観復元の基礎的資料となる古植生

情報について得ることができた。調査区や遺跡周辺のより詳細な古植生や人間の植物利用については、溝や土坑埋土からの種実の洗い出し、炉跡や焼土坑内からの炭化材や炭化種実の検出、遺跡基本土層や流路堆積物の花粉化石と種実化石を併せた複合的古植生解析を行うことによって、さらに解像度の高い検討を行っていただけるものと思われる。

引用文献

- Feagri K. and Iversen J.,1989,Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press,328p.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 古環境研究所,1999,プラント・オパール分析から見た静清バイパス関連諸遺跡.静岡・清水平野の埋没古環境情報「考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相」—一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993—,財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所,83-86.
- 古環境研究所,2004,高知県、田村遺跡群における自然科学分析.高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集「田村遺跡群Ⅱ 高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第8分冊 自然科学編,高知県教育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター,283-288.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 三宅 尚・石川 慎吾,2004,高知県中村市具同低湿地周辺における完新世の植生変遷.日本花粉学会誌,50,83-94.
- 中村 純,1965,高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷,第四紀研究,4,200-207.
- 杉山 真二,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-.考古学と自然科学,19,69-84.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.山中 三男,1978,高知県の植生と植物相.林野弘済会高地支部,461p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山中 三男・伊藤 由美子・石川 真吾,1992,高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析.日本生態学会誌,42,21-30.

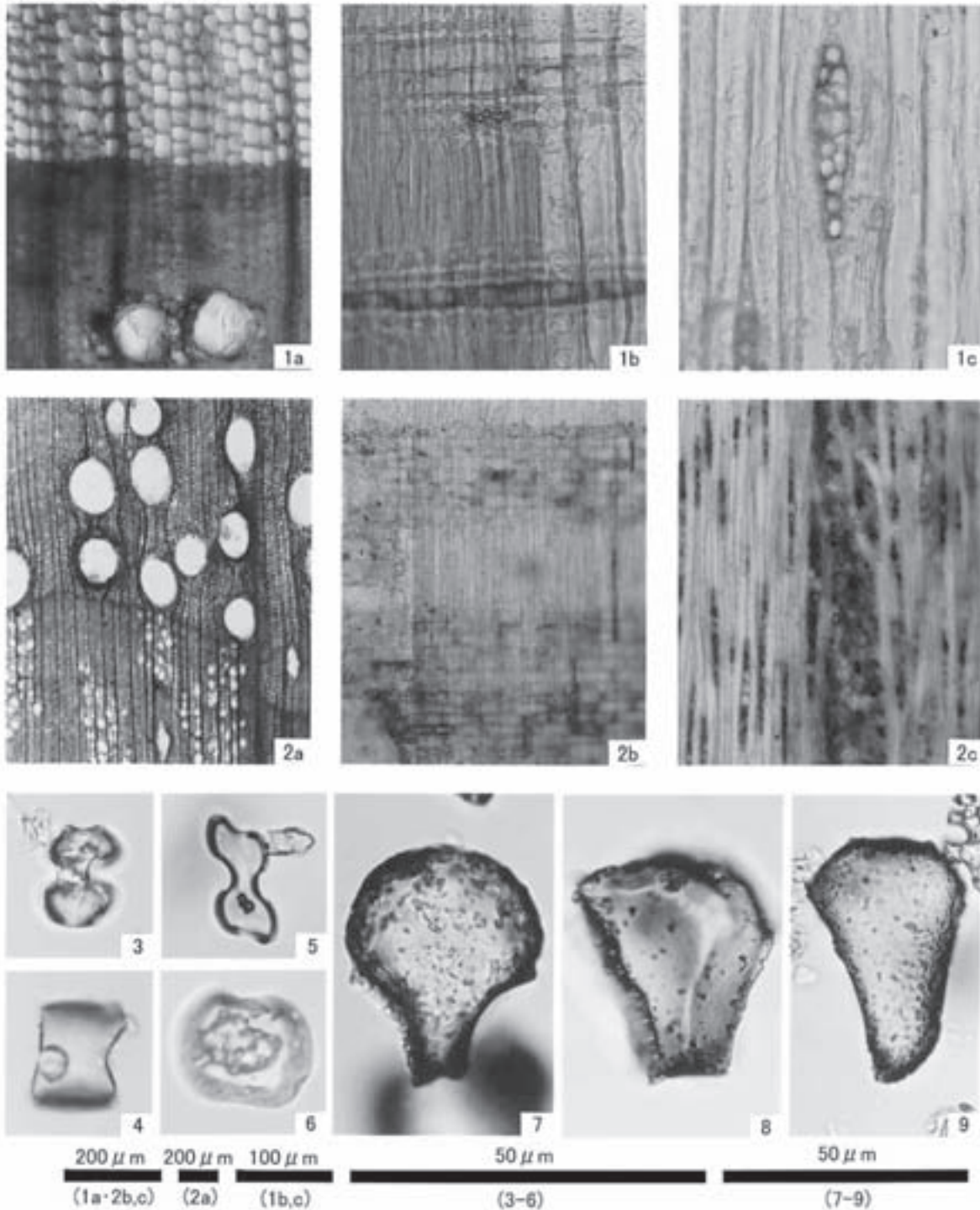
図版1 花粉化石



- 1. アカガシ亜属(SK5)
- 3. クワ科(SK5)
- 5. アカザ科(SK5)
- 7. オオバコ属(SK5)
- 9. タンポポ亜科(SK5)

- 2. イネ科(SK5)
- 4. ギンギン属(SK5)
- 6. アズキ属(SK5)
- 8. ヨモギ属(SK5)

図版2 木材・植物珪酸体



1. マツ属複維管束亜属(SK5)a:木口, b:柾目, c:板目
2. ツブラジイ(SP9)a:木口, b:柾目, c:板目
3. イネ属短細胞珪酸体(SD1;2層)
4. ネザサ節短細胞珪酸体(SD1;1層)
5. ススキ属短細胞珪酸体(SD3N)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(SD1;2層)
7. イネ属機動細胞珪酸体(SD1;2層)
8. ネザサ節機動細胞珪酸体(SD1;1層)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(SD3N)

付編2. 高知県ミトロ遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は高知県ミトロ遺跡から出土した農具1点、建築部材2点の合計3点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属(*Thujopsis* sp.)

(遺物No.1)

(写真No.1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

2) ブナ科シイ属(*Castanopsis* sp.)

(遺物No.2,3)

(写真No.2,3)

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管(~ 300 μ m)は単独でかつ大きい接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柁目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」京都大学木質科学研究所(1999)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

◆使用顕微鏡◆

Nikon

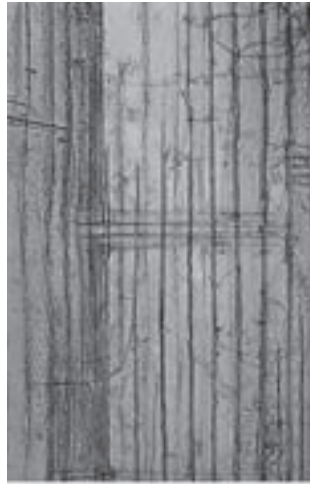
MICROFLEX UFX-DX Type 115

表1 木製品樹種同定表

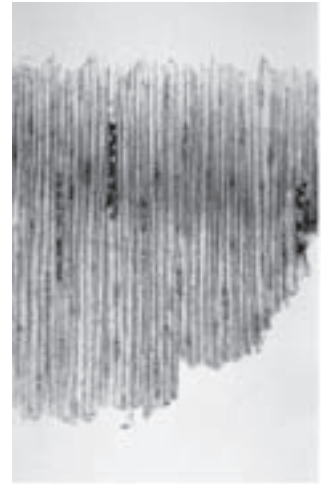
図No.	種別	樹種
332	柱	ブナ科シイ属
333	柱	ブナ科シイ属
366	田下駄	ヒノキ科アスナロ



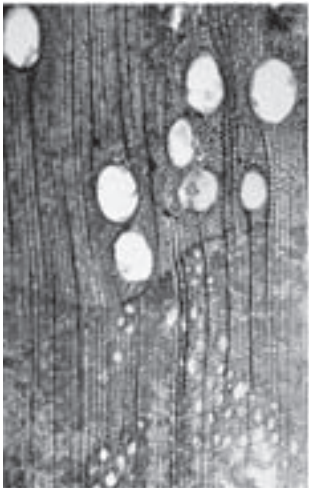
木口×40



柁目×40



板目×40



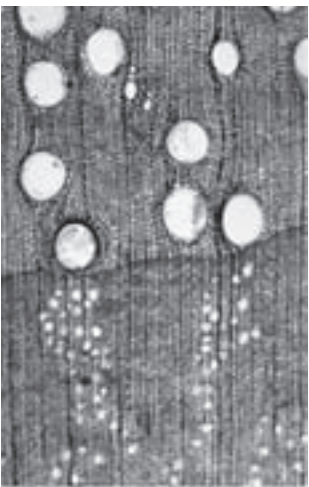
木口×40



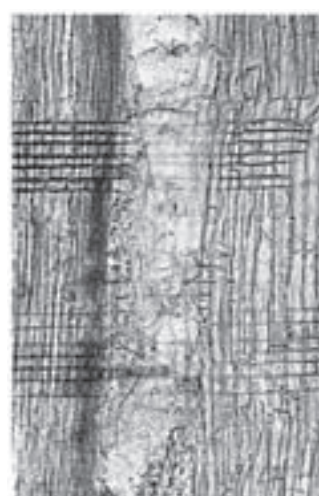
柁目×40



板目×40



木口×40



柁目×40



板目×40

遺物觀察表

図版番号	遺構・層序	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
3-1	TP22 ST1 マ	弥生土器	壺	-	-	(58)	10YR4/2 灰黄褐色	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	N3/0 暗灰色	平底。内外面、ナデ。	薄手式土器。
3-2	TP6 灰ネ	須恵器	壺	(128)	-	-	N6/0 灰色	N6/0 灰色	直径5mm 大以下の砂粒を含む。	口唇部、玉縁状。内外面、ナデ。	
3-3	TP9 ア灰ネ橙	土師質土器	杯	-	-	(68)	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	直径1mm 大以下の砂粒を含む。	ロクロナデ。底部、糸切り。	
3-4	TP3 ア灰	土師質土器	杯	-	-	(74)	25Y7/4 浅黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	直径3mm 大以下の小礫をごく少量含む、その他はほとんど砂粒を含まない。	ロクロナデ。底部、糸切り。	
3-5	TP16 灰ネ	土師質土器	鍋	-	-	-	5YR6/6 褐色	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	直径1mm 大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
3-6	TP22 表採	青磁	碗	-	-	-	25GY7/1 明オリーブ灰色	25GY7/1 明オリーブ灰色	精良な胎土。	削り出し高台。外底面は露胎。	D類。
13-7	I 区 ST1 No.13	弥生土器	壺	(15.0)	-	-	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	25Y7/3 浅黄褐色	直径3mm 大以下の砂粒を少量含む。	内外面、摩擦。ナデか？口唇部、凹状。	
13-8	I 区 ST1 No.14	弥生土器	甕	-	-	-	25Y7/2 灰黄褐色	25Y7/1 灰白色	直径3mm 大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後粗いハケ。内面、ハケか？	
13-9	I 区 ST1	弥生土器	鉢小	-	-	-	N4/0 灰色	25Y7/2 灰黄褐色	直径3mm 大以下の砂粒を含む。	外面、ナデ。内面、ハケ。	
13-10	I 区 ST1	弥生土器	鉢小甕	-	-	(5.0)	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	25Y6/1 黄灰色	直径2mm 大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。	
13-11	I 区 Q24 ST1 北へ	弥生土器	鉢	13.4	(4.3)	-	25Y8/3 淡黄褐色	25Y8/2 灰白褐色	直径4mm 大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。	
13-12	I 区 ST1 南へ	弥生土器	支脚	-	-	(8.6)	10YR2/1 黒色	25Y7/2 灰黄褐色	直径1mm 大以下の砂粒を含む。	手捏ね成形。	
18-16	I 区 Q23 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/2 に ぶい、黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	直径3mm 大以下の砂粒を少量含む。	貼付口縁。口唇部両端、刻目文。口縁部内面、櫛描波状文。	
18-17	I 区 P23 SD1 II層	弥生土器	壺小	-	-	-	10YR7/2 に ぶい、黄褐色	10YR7/2 に ぶい、黄褐色	直径2mm 大以下の砂粒をやや多く含む。	内外面、ナデ。微隆起突帯文2条。	薄手式土器。
18-18	I 区 L23 I層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y4/1 灰色	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	直径1mm 大以下の砂粒を多く含む。	口唇部両端、刻目文。内面、刺突文。	
18-19	I 区 H24 SD1 III層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	直径4mm 大の小礫をごく少量含む、直径1mm 大以下の砂粒を含む。	口唇部外面、刻目文。	薄手式土器。
18-20	I 区 J24 SD1	弥生土器	壺	(15.0)	(17.0)	-	25Y4/1 黄灰色	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	直径3mm 大以下の砂粒を含む。	頸部外面、ハケ。体部外面・口縁部・内面、ナデ。貼付口縁。口唇部全面、斜方向の刻目文。口縁部、穿孔。肩部、櫛描波状文・靡状文。	
18-21	I 区 O23 SD1 I層セクベ1	弥生土器	壺	(14.8)	(3.7)	-	7.5Y7/2 灰黄褐色	7.5Y7/4 に ぶい、黄褐色	直径3mm 大以下の砂粒を少量含む。	内外面、摩擦。ナデか？貼付口縁。口唇部全面、斜格子目文。口縁部、穿孔。	
18-22	I 区 M23 SD1 I層	弥生土器	壺	(16.8)	-	-	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	直径2mm 大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。口唇部、全面刻目文。口縁部、穿孔。	
18-24	I 区 Q23 SD1 II層	弥生土器	壺	(10.6)	-	-	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	直径2mm 大以下の砂粒を多く含む。	内外面、摩擦。ナデか？口唇部下端、刻目文。口縁部、穿孔。	薄手式土器。

()内、復原値

図版番号	遺構・層序	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
18-25	I区H24 III層 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR6/3に ぶい黄橙色	直径1mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、貼付突帯文。	
18-26	I区P23 I層ユニツト7 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR8/3浅 黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	7.5Y3/1オ リーブ黒色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。貼付口縁、全面、刻目文。弱い、微隆起突帯文。	薄手式土器。
18-27	I区G24 I層 SD1 F24 I層	弥生土器	壺	(160)	(20)	-	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y8/2灰白 色	直径1mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。貼付口縁。口唇部両端、刻目文。口縁部内面、微隆起突帯文・櫛描直線文。	
18-28	I区S23 SD1 II層ユニツト1	弥生土器	壺	(118)	(4.3)	-	5Y7/1灰白 色	10YR7/2に ぶい黄橙色	7.5Y6/1灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
18-29	I区J24 SD1	弥生土器	壺	(160)	-	-	10YR7/4に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	7.5Y4/0灰色		外面、ハケ。内面、ハケ・ナデ。貼付口縁。口唇部全面、刻目文。	
18-30	I区H25 III層 SD1	弥生土器	壺	(140)	(5.7)	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	N4/0灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ・ナデ。内面、ナデ。貼付口縁。口唇部全面、刻目文。口縁部内面、刺突文。	
18-31	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	(140)	(5.0)	-	2.5Y7/3浅黄 色	2.5Y7/3浅黄 色	7.5Y4/1灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。	
18-32	I区Q23 ユニツト5 SD1	弥生土器	壺	(102)	-	-	10YR6/2灰 黄褐色	10YR6/2灰 黄褐色	10YR1.7/1黒 色	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。貼付口縁、全面刻目文。外面、微隆起突帯文4条。	
18-33	I区Q23 I層 SD1	弥生土器	壺	(130)	(4.3)	-	2.5Y8/2灰白 色	2.5Y8/3淡黄 色	N4/0灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。口縁部下端、刻目文。	
18-34	I区H24 III層 SD1	弥生土器	壺	(128)	(4.2)	-	7.5Y7/4に ぶい黄橙色	7.5Y7/4に ぶい黄橙色	7.5Y7/4に ぶい黄橙色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、摩擦。調整不明。内面、ナデ。貼付口縁。	
18-35	I区N23 II層 SD1	弥生土器	壺	(150)	(2.8)	-	2.5Y7/2灰黄 色	10YR6/2灰 黄褐色	N4/0灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。口唇部、全面刻目文。	
18-36	I区Q23 II層 SD1	弥生土器	壺	158	(6.3)	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y5/1灰色	直径8mm大の小礫をごく少量含む、直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、磨耗。ナデか？貼付口縁。口唇部全面、刻目文。	
18-37	I区G25 III層 SD1	弥生土器	壺	(170)	-	-	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y6/2灰黄 色	N3/0暗灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ハケ・ナデ。貼付口縁。口唇部両端、刻目文。	
18-38	I区M23 II層バンク SD1	弥生土器	壺	(156)	-	-	5Y2/1黒色	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y7/2灰黄 色	直径3mm大以下の砂粒を含み、火山ガラス片をごく少量含む。	外面、ナデ・ハケ。内面、ナデ。口縁部両端、刻目文。	
18-39	I区Q23 II層 SD1	弥生土器	壺	(170)	(5.6)	-	7.5Y7/4にぶ い黄橙色	7.5Y8/4浅 黄褐色	N3/0暗灰色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ハケ。口縁部両端、刻目文。	
18-40	I区M23 II層バンク SD1	弥生土器	壺	(136)	-	-	10YR6/1褐 灰色	10YR8/3浅 黄褐色	10YR8/3浅 黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。	

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		底径	色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高		内面	外面	断面			
18-41	I区Q23 II層 SD1	弥生土器	壺	16.0	(3.6)	-	25Y6/2 灰黄色	25Y5/2 暗灰黄色	25Y6/2 灰黄色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。	
18-42	I区L23 I層 SD1	弥生土器	壺	(14.2)	(3.8)	-	25Y7/3 浅黄褐色	10YR7/4に ぶい黄褐色	N5/0 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。	
18-43	I区Q23 ユニット5 SD1	弥生土器	壺	(15.6)	(2.3)	-	10YR8/4 浅黄褐色	25Y7/2 灰黄色	10YR8/4 浅黄褐色	直径1mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。ナデか？やや作りが雑な印象。	
18-44	I区M23 I層 SD1	弥生土器	壺	(15.8)	(5.6)	-	25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	N4/0 灰色	直径5mm大の小礫をごく少量含み、直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。	
18-45	I区H24 I層バンク SD1	弥生土器		(16.2)	(4.3)	-	25Y7/2 灰黄色	10YR7/3に ぶい黄褐色	5Y6/1 灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内面、ナデ。外面、ハケ？口縁部上端、刻目文。	
19-46	I区O23 II層セクベ1・Q23 II層 SD1	弥生土器	壺	(14.6)	(12.0)	-	10YR8/3 浅黄褐色	25Y7/2 灰黄色	N4/0 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、ナデ。内面、ナデ・ハケ。	
19-47	I区S23 ト1・S23 SD1 II層	弥生土器	壺	(15.0)	8.7	-	25Y7/2 灰黄色	25Y6/2 灰黄色	N5/0 灰色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	頸部外面、摩耗。調整不明。口縁部、粗いハケ。内面、ナデ。貼付口縁？	
19-48	I区N23 II層 SD1	弥生土器	壺	(18.0)	(5.8)	-	5YR5/4に ぶい赤褐色	25YR6/6 橙褐色	N3/0 暗灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部・外面、ナデ。内面、ハケ。	
19-49	I区H24 SD1	弥生土器	壺	(19.4)	5.1	-	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ハケ。貼付口縁。	
19-50	I区N23 II層 SD1	弥生土器	壺	(18.8)	(7.5)	-	5YR5/6 明赤褐色	10YR7/3に ぶい黄褐色	10YR7/3に ぶい黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、摩耗。ナデか？	
19-51	I区O23・M23 SD1 II層 L23 I層 SD1	弥生土器	壺	19.0	(7.7)	-	10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/3に ぶい黄褐色	5Y6/1 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。口縁部両端、刻目文。口縁部、穿孔。	
19-52	I区N23 II層No.1 SD1	弥生土器	壺	(18.6)	-	-	10YR7/3に ぶい黄褐色	25Y7/3 浅黄褐色	25Y5/1 黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	頸部、粗いハケ。口縁部、ナデ。	
19-53	I区N23 II層 SD1	弥生土器	壺	(20.0)	(5.75)	-	7.5YR7/4に ぶい橙褐色	10YR7/3に ぶい黄褐色	N4/0 灰色	直径7mm大の小礫をごく少量含み、直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ハケ。	
19-54	I区O23 II層 SD1	弥生土器	壺	(18.1)	-	-	25Y8/2 灰白色	25Y8/2 灰白色	25Y8/2 灰白色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。ミガキか？ナデか？貼付口縁。	

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
19-55	I区M23 II層・L23 SD1 I層	弥生土器	壺	(198)	-	-	25Y7/2 灰黄色	10YR7/3に ぶい、黄褐色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。	
19-56	I区J24 SD1	弥生土器	壺	(200)	-	-	25Y7/3 浅黄色	25Y7/2 灰黄色	N3/0 灰色	直径8mm大の小礫をごく少量含む、 直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。貼付口縁。口 唇部上端、刻目文。	
19-57	I区M23 SD1 I層	弥生土器	壺	(170)	(3.4)	-	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、磨耗・刻目。調整不明。口縁 部下端、刻目文。	
19-58	I区P23 SD1 II層ユニツト10	弥生土器	壺	(238)	5.8	-	75YR6/4に ぶい、黄褐色	75YR6/6 橙 ぶい、黄褐色	75YR7/4に ぶい、黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁。頸 部、貼付突帯文。	
19-59	I区J24 SD1	弥生土器	壺	(196)	(3.2)	-	5Y4/1 灰色	5Y4/1 灰色	5Y4/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒を非常に多 く含む。仁淀川流域の胎土。	内外面、ナデ。口縁部外面、刻目文。	薄手式土器。
20-60	I区G24 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3に ぶい、黄褐色	25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	直径3mm大以下の砂粒を含む。砂つ ばい胎土。	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁、全 面刻目文。肩部、うすい粘土帯貼付、 全面刻目文。	薄手式土器。
20-61	I区G24 SD1 I層	弥生土器	壺	(148)	(4.2)	-	10YR6/3に ぶい、黄褐色	10YR6/3に ぶい、黄褐色	10YR6/3に ぶい、黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。砂つ ばい胎土。	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁、全 面刻目文。	薄手式土器。
20-62	I区R23 SD1 II層ユニツト2	弥生土器	壺	(264)	(10.0)	-	10YR4/3に ぶい、黄褐色	10YR6/4に ぶい、黄褐色	10YR4/3に ぶい、黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を非常に多 く含む。砂つばい胎土。	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁、全 面刻目文。肩部、刻目文。	薄手式土器。
20-63	I区H24 SD1 III層	弥生土器	壺	(208)	(4.0)	-	25Y6/2 灰黄色	25Y5/2 暗灰 黄色	5/0 灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。口縁部外面、刻目文。口 唇部下端、刻目文。	
20-64	I区M23 SD1 II層	弥生土器	壺	(210)	-	-	25Y4/2 暗灰 黄色	75YR5/2 灰 褐色	75Y4/1 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。口縁部両端、 刻目文。内面、刺突文。	
20-65	I区F24 SD1 I層	弥生土器	壺	(108)	-	-	25Y5/4にぶ い、赤褐色	5YR7/3にぶ い、黄褐色	10YR8/2 灰 白色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。口縁部両端、 刻目文。口縁部内面、籐状文。	
20-66	I区L23 SD1 I層3回目	弥生土器	壺	216	(2.5)	-	10YR7/3に ぶい、黄褐色	75YR7/4に ぶい、黄褐色	N3/0 暗灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。		
20-67	I区G25 SD1 III層	弥生土器	壺	(230)	(4.3)	-	75YR6/4に ぶい、黄褐色	10YR5/2 灰 黄褐色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。貼付口縁。口唇部下端、 刻目文。	
20-68	I区P23 SD1 II層	弥生土器	壺	(300)	(1.3)	-	25Y4/2 暗灰 黄色	25Y4/2 暗灰 黄色	25Y4/2 暗 灰黄色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁。口 唇部、凹状。口縁部、穿孔。内面、扁平 な刻目状突帯文3条。	
20-69	I区P23 SD1 II層	弥生土器	壺	(230)	(2.5)	-	25Y7/1 灰白 色	25Y7/1 灰白 色	25Y7/1 灰白 色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ハケ。貼付口縁。口唇部両端、 刻目文。口唇部、凹状。穿孔。	
20-70	I区L23 SD1 I層	弥生土器	壺	(238)	(3.7)	-	25Y8/2 灰白 色	10YR8/3 浅 黄褐色	10YR8/4 浅 黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。口縁部内面、刻目文。	

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
20-71	I区SD1 II層・M23 I層	弥生土器	壺	(27.2)	(4.8)	-	10YR7/4に ぶい黄橙色	10YR7/4に ぶい黄橙色	5Y6/1灰色	内外面、磨耗。調整不明。貼付口縁。口唇部両端、刻目文。口唇部、凹状。		
20-72	I区H25 SD1 I層	弥生土器	壺	(30.0)	(5.2)	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	N3/0 暗灰色	内外面、ナデ。貼付口縁。口縁部下端、刻目文。		
20-73	I区M23 SD1 II層	弥生土器	壺	(28.0)	(5.6)	-	7.5YR7/4に ぶい黄橙色	10YR6/3に ぶい黄橙色	5Y4/1灰色	内面、ハケ。口縁部両端、刻目文。口縁部内面、刺突文。外面、櫛描直線文・櫛描波状文。		
21-74	I区M23 SD1 I層	弥生土器	壺	(23.7)	(5.9)	-	10YR8/3 浅 黄橙色	10YR8/3 浅 黄橙色	10Y4/1灰色	外面、ハケ。内面、ナデ。口唇部全面、刻目文。口縁部内面、櫛描波状文。		
21-75	I区J24 SD1	弥生土器	壺	(23.0)	-	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR8/4 浅 黄橙色	N5/0 灰色	内外面、ナデ。貼付口縁。口唇部全面、刻目文。		
21-76	I区H24 SD1 III層	弥生土器	壺	23.6	(3.1)	-	7.5YR8/3 浅 黄橙色	7.5YR7/4に ぶい黄橙色	7.5YR7/4に ぶい黄橙色	外面、工具ナデ。内面、ナデ。貼付口縁。		
21-77	I区P23 SD1 II層	弥生土器	壺	(27.0)	2.9	-	2.5Y2/1 黒色	10YR7/2に ぶい黄橙色	2.5Y2/1 黒色	内面、磨耗。外面、ナデか？	薄手式土器。	
21-78	I区N23 SD1 II層	弥生土器	壺	(27.3)	(4.1)	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	外面、ハケ。内面、ナデ。		
21-79	I区G25 SD1 III層	弥生土器	壺	(26.6)	-	-	2.5Y8/4 淡黄 色	10YR7/4に ぶい黄橙色	10YR5/1 褐 灰色	頸部外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。口唇部全面、刻目文。		
21-80	I区R23 SD1 III層 ユニット2・ R23 SD1 III層・ Q23 SD1 II層	弥生土器	壺	(23.3)	(15.6)	-	5Y6/1 灰色	2.5Y8/3 淡黄 色	10YR7/3に ぶい黄橙色	頸部、ハケ。口縁部・体部、ナデ。貼付口縁、下端に刻目文。肩部、櫛描直線文・櫛状文・櫛描波状文。口縁部内面、櫛描文。		
22-81	I区P23 SD1 II層 ユニット7	弥生土器	壺	-	-	-	5YR2/1 黒褐 色	5Y4/1 灰色	10YR4/1 褐 灰色	内外面、ナデか？外面、櫛状文・櫛描波状文。		
22-82	I区H24 SD1 I層 バンク	弥生土器	壺	-	-	-	2.5Y8/2 灰白 色	2.5Y8/2 灰白 色	2.5Y8/2 灰白 色	内面、ナデ、凹凸有り。外面、櫛描直線文・櫛描波状文・櫛状文。		
22-83	I区N23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y7/1 灰白 色	2.5Y8/2 灰白 色	2.5Y7/3 浅黄 色	内面、ナデ。外面、櫛描櫛状文、櫛描波状文。		
22-84	I区F24 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR4/1 褐 灰色	7.5YR8/2 灰 白色	10YR8/2 灰 白色	内外面、ナデ。外面、櫛状文。		
22-85	I区Q23 SD1 II層	弥生土器	壺	-	-	-	2.5YR8/2 灰 白	2.5Y8/3 淡黄 色	2.5YR8/2 灰 白	内面、ナデか？外面、櫛描櫛状文・櫛描直線文・櫛描波状文。	外面、赤色塗彩。	
22-86	I区H24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y8/3 淡黄 色	2.5Y4/1 黄灰 色	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、刺突文・櫛状文。		

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
22-87	I区H25 皿層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	5Y5/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含み、雲母片をごく少量含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、刺突文・籐状文。	
22-88	I区F24 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y5/1 黄灰色	75YR8/3 浅黄褐色	25Y8/2 灰白色	直径3mm大以下の砂粒を含み、雲母片を少量含む。	内外面、ナデ。外面、櫛描直線文・刺突文・籐状文。	
22-89	I区Q23 SD1 ユニット5	弥生土器	壺	-	-	-	5Y3/1 オリーブ黒色	25Y7/3 浅黄褐色	N4/0 灰色	直径1mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ミガキ。内面、ナデ。外面、籐状文・櫛描波状文。	スス付着。
22-90	I区G25 I層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y6/1 灰色	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、櫛描波状文。	
22-91	I区F24 I層	弥生土器	壺	-	-	-	7.5Y3/1 オリーブ黒色	10YR7/2 にぶい黄褐色	10Y4/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内面、ハケ。外面、櫛描直線文・櫛描波状文。	
22-92	I区F24 I層	弥生土器	壺	-	-	-	7.5Y2/1 黒色	25Y7/2 黄褐色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、櫛描直線文・櫛描波状文・刺突文。	
22-93	I区G25 皿層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y5/1 灰色	25Y4/1 黄褐色	25Y4/1 黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、工具ナデ。内面、ナデ。外面、刺突文。	
22-94	I区P23 SD1 I層ユニット8	弥生土器	甕	-	-	-	25Y7/3 浅黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	25Y7/3 浅黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ。外面、刺突文。	外面、スス付着。
22-95	I区M23 SD1 I層・L・ML2 I層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y4/1 灰色	25Y6/3 にぶい黄褐色	5Y4/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内面、ナデ? 外面、櫛描直線文・刺突文。	
22-96	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2 黄褐色	25Y6/1 黄褐色	N4/0 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。内面、凹凸有り。外面、櫛描直線文・櫛描波状文。	
22-97	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	25Y3/3 暗オリーブ褐色	75YR7/2 明褐色	25Y5/2 暗黄褐色	直径1mm大以下の砂粒を非常に多く含む。砂っぽい胎土。	外面、刻目文。	薄手式土器。
22-98	I区O23 SD1 II層ユニット14・SD1 サブトレ2	弥生土器	壺	-	-	-	25Y3/1 黒褐色	25Y6/4 にぶい黄褐色	25Y3/1 黒褐色	直径4mm大以下の砂粒をやや多く含む。	内外面、ナデか? 外面、貼付突帯文。	
22-99	I区O23 II層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y2/1 黒色	10YR4/2 灰黄褐色	5Y2/1 黒色	直径1mm大以下の砂粒をやや多く含む。	内外面、ナデか? 外面、貼付突帯文2条。	
22-100	I区G24 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/2 にぶい黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。突帯文1条。	
22-101	I区SD1 サブトレ2	弥生土器	壺	-	-	-	7.5Y2/1 黒色	7.5Y2/1 黒色	7.5Y2/1 黒色	直径2mm大以下の砂粒をやや多く含む。	内外面、ナデか? 外面、貼付突帯文2条。	
22-102	I区P23 SD1 II層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	2.5Y5/1 黄褐色	直径4mm大以下の砂粒をやや多く含む。	内外面、ナデ。外面、貼付突帯3条。	
22-103	I区L23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	N3/0 暗灰色	10YR8/3 浅黄褐色	N3/0 暗灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。外面、横方向と縦方向の櫛描直線文。	

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
22-104	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	5Y2/1黒色	25Y8/2灰白 色	5Y2/1黒色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ。外面、櫛描直線文。	
22-105	I区P23 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。	
22-106	I区N23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y8/2灰白 色	10YR8/2灰 白色	5Y4/1灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。調整不明。外面、櫛状文。	
22-107	I区H24 III層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y5/1灰色	10YR7/2に ぶい黄橙色	25Y8/2灰白 色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、櫛描直線文・扁平な刻目状突帯文。	
22-108	I区L23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/3浅黄 色	10YR6/3に ぶい黄橙色	75YR7/4に ぶい橙色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、貼付突帯文4条。	
22-109	I区M23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	直径1mm大以下の砂粒をごく少量含む。	内外面、ナデ。外面、櫛描直線文・沈線文。	
22-110	I区M23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y8/2灰白 色	75YR8/4浅 黄橙色	25Y8/2灰白 色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、波状文? 重弧文?	
22-111	I区H24 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	75YR6/6橙 色	75YR6/6橙 色	5Y5/1灰色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量含む。	内外面、ナデ。外面、櫛描直線文・半截竹管文・直線文。	
22-112	I区P23 SD1 II層	弥生土器	壺	-	-	-	75Y6/3にぶ い褐色	75Y2/1黒色 色	75Y3/1黒褐 色	直径1mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。外面、刻目文・微隆起突帯文。	薄手式土器。
22-113	I区H24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	75YR7/6橙 色	5YR6/6橙色 色	10YR4/1褐 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ナデ。内面、摩耗、調整不明。外面、波状文か?	
22-114	I区L・M23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y5/1灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内面、網離か? 外面、波状文。	
22-115	I区G25 SD1 III層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR6/3に ぶい黄橙色	75YR7/4に ぶい褐色	5Y4/1灰色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量含む。	内外面、摩耗。調整不明。	
23-116	I区F24 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量含む。	内面、ハケ・ナデ。外面、ハケ。外面、櫛描直線文・刺突文。内面、櫛描直線文。	
23-117	I区P23 SD1 II層 ユニツト6	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/4に ぶい黄橙色	75YR7/4に ぶい褐色	75YR7/4に ぶい褐色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、摩耗。調整不明。肩部、貼付突帯文1条。	
23-118	I区P23 SD1 II層 ユニツト9	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR8/2灰 白色	75Y2/1黒色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。肩部、刻目文・櫛描直線文・櫛描波状文。	
23-119	I区Q23 SD1 III層 O・P23 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	75Y2/1黒色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、櫛描直線文・櫛描波状文。	
23-120	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR8/3浅 黄褐色	10YR6/6明 黄褐色	10YR8/3浅 黄褐色	直径1mm大以下の砂粒を少量含む。	内面、網離。外面、ミガキ。櫛描波状文か?	
23-121	I区H24 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2灰黄 色	25Y7/2灰黄 色	5Y5/1灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、刺突文。	

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
23-122	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/4に ぶい黄橙色	25Y5/2暗灰 黄色	7.5Y4/1灰色	直径1mm大以下の砂粒を少量含む。 外面、ハケ?内面、ナデ。外面、扁平な 刻目状突帯文、ドーナツ状浮文。		
23-123	I区H24 I層 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	10YR3/1黒 褐色	25Y5/2暗灰 黄色	10YR6/2灰 黄褐色	内外面、ナデ。外面、ドーナツ状浮文・ 扁平な刻目状突帯文。		
23-124	I区M23 I層 SD1	弥生土器	壺	-	-	-	7.5YR7/4に ぶい黄褐色	10YR8/3浅 黄褐色	10YR8/3浅 黄褐色	内外面、摩耗。ナデか?		
23-125	I区S23 II層ユニツト1 SD1	弥生土器	大形壺	-	-	-	10YR7/2に ぶい黄褐色	10YR8/4浅 黄褐色	5Y6/1灰色	内外面、ハケ。外面、ミガキ?		
23-126	I区S23 II層ユニツト1 SD1	弥生土器	壺	-	(17.3)	(5.0)	25Y2/1黒色	10YR7/2に ぶい黄褐色	2.5Y2/1黒色	外面、ハケ。内面、ナデ。 外面、黒斑有り。		
23-127	I区Q23 II層ユニツト7・Q23 SD1 I層・ユニツト5	弥生土器	壺	-	(13.4)	7.0	5Y7/4にぶ い黄褐色	5Y7/4にぶ い黄褐色	N4/0灰色	平底。内外面、摩耗、ナデか?		
24-128	I区G24 I層 SD1	弥生土器		-	(2.9)	(3.4)	2.5Y4/1黄灰 色	2.5Y2/1黒色	N4/0灰色	上げ底。内外面、ナデ。		
24-129	I区H24 I層 SD1	弥生土器		-	(3.15)	4.0	5Y2/1黒色	10YR7/3に ぶい黄褐色	5Y2/1黒色	外面、ミガキ。内面、ナデ。		
24-130	I区O23 II層 SD1	弥生土器	底部	-	-	(5.8)	5Y2/1黒色	25Y5/4にぶ い赤褐色	10Y4/1灰色	やや上げ底。内外面、ナデ。 被熱変色。		
24-131	I区M23 II層 SD1	弥生土器	甕	-	-	(5.8)	10YR7/3に ぶい黄褐色	10YR1.7/1 黒色	10YR1.7/1黒 色	内外面、摩耗。調整不明。		
24-132	I区S23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	(2.6)	5.15	2.5Y8/1灰白 色	2.5Y3/1黒褐 色	N4/0灰色	やや上げ底。外面、ハケ。内面、ナデ。		
24-133	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	-	(7.0)	2.5Y2/1黒色	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y2/1黒色	底端部、突出。内外面、ナデ。		
24-134	I区O23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	3.4	6.9	2.5Y5/1黄灰 色	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y6/1黄灰 色	外面、ハケ。内面、ナデ。		
24-135	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	(3.15)	6.6	10YR4/1褐 灰色	2.5YR7/3浅 黄色	7.5Y5/1灰色	平底。外面、ハケ。内面、ナデ。		
24-136	I区S23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	(2.2)	9.5	10YR6/3に ぶい黄褐色	10YR5/2灰 黄褐色	10YR8/1灰 白色	やや上げ底。内外面、摩耗。調整不明。 薄手式土器。		
24-137	I区N23 サブトレ3 SD1	弥生土器	壺	-	(3.7)	(8.4)	2.5YR6/4に ぶい黄褐色	2.5YR6/4に ぶい黄褐色	10Y4/1灰色	やや上げ底。底端部、突出。内外面、ナ デか?		

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
24-138	I区G24 I層 SD1	弥生土器	壺	-	-	8.2	25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	25Y4/1 黄灰色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	上げ底。外面、ミガキ。内面、ナデ。	
24-139	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	-	(10.2)	25Y5/1 黄灰色	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/2 灰白色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ナデ?内面、剝離。	
24-140	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	(3.2)	(10.0)	N4/0 灰色	5YR7/6 橙褐色	N4/0 灰色	直径5mm大の小礫をごく少量含む、 直径2mm大以下の砂粒を含む。	平底。内外面、剝離・摩擦、調整不明。	
24-141	I区M23 II層 SD1	弥生土器	壺	-	(4.8)	10.1	25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	N5/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ミガキ。内面、ナデ。	
24-142	I区J24 SD1	弥生土器	壺	-	6.2	10.0	5Y4/1 灰色	7.5YR8/4 浅黄褐色	5Y4/1 灰色	直径7mm大の小礫をごく少量含む、 直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩擦。調整不明。	
24-143	I区 SD1 サ プトレ3	弥生土器	壺	-	-	(9.0)	7.5Y2/1 黒色	10YR6/3 に ふい、黄褐色	7.5Y2/1 黒色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	やや上げ底。内外面、ナデか?	
24-144	I区Q23 SD1 II層 ニツト3・SD1 II 層 ニツト4	弥生土器	壺	-	(26.3)	6.0	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	N4/0 灰色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	外面下半、ミガキ。内面、ナデ。	
24-145	I区L・M23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	-	13.6	7.5Y4/1 灰色	7.5Y7/4 に ふい、橙褐色	7.5Y4/1 灰色	直径8~10mm大の小礫をごく少量含む、 直径2mm大以下の砂粒を含む。	粘土紐接合面で剝離。	
25-146	I区S23 SD1 II層 ニツト1	弥生土器	甕	(18.0)	(6.4)	-	2.5Y7/3 浅黄褐色	2.5Y7/3 浅黄褐色	2.5Y7/3 浅黄褐色	直径7mm大以下の砂粒を含む。	体部外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。	外面、スス付着。
25-147	I区S23 SD1 II層 ニツト1	弥生土器	甕	(15.8)	(9.0)	-	10YR7/2 に ふい、黄褐色	7.5YR7/3 に ふい、橙褐色	N5/0 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	体部外面、工具ナデ。口縁部・内面、ナデ。貼付口縁。	外面、スス付着。
25-148	I区O23 SD1 II層 セクベ2・P23 SD1 II層・ SD1 サフトレ2	弥生土器	甕	(18.4)	-	-	2.5Y2/1 黒色	2.5Y2/1 黒色	2.5Y2/1 黒色	直径5mm大の小礫をごく少量含む、 直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。貼付口縁、全面刻目文。 肩部、突帯文2条。	薄手式土器。
25-149	I区 SD1 I層	弥生土器	甕か	-	-	-	10YR7/3 に ふい、黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	10YR8/3 浅黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	150と同一個体の可能性有り。
25-150	I区L23 SD1 I層・L・M23 SD1 I層 L23 SD1 I層	弥生土器	甕か	16.3	-	-	2.5Y6/1 灰黄色	2.5Y6/1 灰黄色	2.5Y6/1 灰黄色	直径4mm大以下の砂粒をやや多く含む。特徴的な胎土。	内外面、ナデ。口頸部境に弱い段部。	149と同一個体の可能性有り。
25-151	I区R・O・P23 SD1 I層(II層含む)	弥生土器	甕	-	-	-	10YR8/2 灰白色	10YR7/2 に ふい、黄褐色	5Y4/1 灰色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	内面、ナデ。外面頸部、縦方向の微隆起突帯文7条。刻目文。口頸部境に微隆起突帯状之条。浮文。	薄手式土器。

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
25-152	I区J24 SD1	弥生土器	甕	-	-	-	25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	N3/0 暗灰色	直径5~8mm大の小礫をごく少量含む、直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、貼付突帯文2条。	
25-153	I区L23 SD1 I層	弥生土器	甕	-	-	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR8/3 浅 黄褐色	N3/0 暗灰色	直径1mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。外面、縦方向の微隆起突帯文5条。	薄手式土器。
25-154	I区P23 SD1 II層	弥生土器	甕	-	-	-	7.5Y2/1 黒色	7.5Y2/1 黒色	7.5Y2/1 黒色	直径1mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデか? 外面、縦方向の微隆起突帯文5条。	薄手式土器。
25-155	I区J24 SD1	弥生土器	甕か鉢	(10.2)	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y8/2 灰白 色	5Y5/4 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	体部外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。	甕の可能性有り。
25-156	I区G25 SD1 III層	弥生土器	鉢か	(22.7)	-	-	7.5YR7/4に ぶい橙色	5YR6/6 橙色	5Y5/4 灰色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ? 口唇部全面、刻目文。	
25-157	I区Q23 SD1 II層	弥生土器	鉢か	(14.0)	-	-	2.5Y6/1 灰黄色	2.5Y6/1 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	甕の可能性有り。
25-158	I区S23 SD1 II層	弥生土器	鉢	(23.0)	(4.9)	-	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/2に ぶい黄褐色	N3/0 暗灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
25-159	I区L・M23 SD1 I層・ L23 SD1 I 層・N23 SD1 II層	弥生土器	鉢か	(30.0)	(10.8)	-	10YR8/3 浅 黄褐色	10YR8/3 浅 黄褐色	10YR5/3 浅 黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、摩耗。調整不明。貼付口縁。	
26-160	I区N23 SD1 I層	庄内式土器	甕	(17.2)	(2.5)	-	10YR4/3に ぶい黄褐色	2.5Y2/1 黒色	10YR4/3に ぶい黄褐色	直径2mm大以下の砂粒、角閃石を含む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	外面、スス付着。 畿内からの搬入品。
26-161	I区N23 SD1 I層	庄内式土器	甕	(18.0)	(2.7)	-	2.5Y3/3 暗オ リーブ褐色	10YR3/2 黒 褐色	10YR5/3に ぶい黄褐色	直径2mm大以下の砂粒、角閃石、火山ガラス片を含む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	畿内からの搬入品。
26-162	I区N23 SD1 I層	庄内式土器	甕	(19.8)	1.9	-	2.5Y4/3 オ リーブ褐色	5Y4/3 暗オ リーブ褐色	2.5Y5/3 黄褐 色	直径1mm大以下の砂粒、角閃石、火山ガラス片を含む。	内外面、ナデ。	外面、スス若干付着。 畿内からの搬入品。
26-163	I区S23 SD1	弥生土器	甕か	-	-	-	2.5Y7/3 浅黄色	N1.5/0 黒色	2.5Y7/3 浅黄色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、太い沈線文か?	スス付着。
26-164	I区N23 SD1 I層	弥生土器	壺	-	(3.4)	(8.0)	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	N4/0 灰色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	丸底。外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。	
26-165	I区N23 SD1 I層・M23 SD1 I層・ N23 SD1 ~2 I層	弥生土器	支脚	(7.0)	8.0	(9.2)	10YR7/3に ぶい黄橙色	2.5YR8/3 淡 黄色	2.5Y6/1 黄灰 色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	中空。手握ね成形。	
26-166	I区M23 SD1 I層	弥生土器	支脚	-	-	(8.0)	7.5YR6/6 橙 色	7.5YR6/6 橙 色	2.5Y5/1 黄灰 色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	中実。手握ね成形。	
28-177	I区 SD2 No.7	弥生土器	壺	(23.0)	-	-	2.5Y7/1 灰白 色	N5/0 灰色	N2/0 黒色	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。口唇部下端、刻目文。	薄手式土器。

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
28-178	I区P24 SD2	弥生土器	壺	-	-	-	25Y5/1黄灰色	10YR8/3浅黄褐色	N1.5/0黒色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ?外面、櫛描直線文・櫛描波状文。	
28-179	I区N24 SD2	弥生土器	壺	-	-	-	5Y6/1灰色	25Y7/1灰白色	25Y7/1灰白色	直径1mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。外面、籐状文・櫛描波状文。	
28-180	I区Q24 SD2	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/1灰白色	25Y7/2灰黄色	25Y5/1黄灰色	直径1mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。外面、刻目文・縦方向の櫛描文。	
28-181	I区S24 SD2	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/4にぶい黄褐色	7.5YR8/4浅黄褐色	2.5YR6/1黄灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。外面、籐状文。	
28-182	I区 SD2 No.8	弥生土器	壺	-	8.9	8.4	N3/0暗灰色	7.5YR5/4にぶい褐色	N3/0暗灰色	直径4mm大以下の砂粒をやや多く含む。	外面、ハケ。内面、摩擦、ナデか?	
28-183	I区 SD2 No.6	弥生土器	(甕)底	-	-	(7.5)	2.5Y3/1黒褐色	2.5Y6/2灰黄色	7.5Y5/1灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	上げ底。底端部、突出。外面、ハケ。内面、ナデ。	
28-184	I区P24 SD2 No.1	弥生土器	壺	-	(7.9)	9.3	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	5Y6/1灰色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩擦。調整不明。	
28-185	I区P24 SD2 No.3 ・SD2 No.4 ・SD2 No.5	弥生土器	鉢か	(17.0)	-	-	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデか?	外面、スス付着。
28-186	I区 SD2 No.9	弥生土器	鉢	(18.0)	-	-	10YR3/3暗褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR3/3暗褐色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	若干、摩擦。ナデか?本来は貼付口縁。	
29-187	I区M24 SD1-2 上層	弥生土器		-	-	-	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。肩部、沈線文。	
29-188	I区N23 SD1-2 I層	弥生土器	体部	-	-	-	7.5YR7/4にぶい褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。		
31-189	I区O25 SD3 No.34	弥生土器	壺	(20.2)	-	-	2.5Y7/2灰黄色	5Y7/1灰白色	N3/0暗灰色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
31-190	I区O25 SD3 No.31	弥生土器	壺	-	(14.2)	6.55	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	N5/0灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	若干、上げ底。外面、ハケ。内面、ナデ。スス付着。	
31-191	I区O25 SD3S上層	弥生土器	壺	(14.8)	-	-	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y6/1黄灰色	2.5Y6/1黄灰色	直径3mm大以下の砂粒をやや多く含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。内面、ラントル管状の文様。	
31-192	I区O25 SD3 No.32	弥生土器	壺	-	-	5.0	2.5Y7/3浅黄色	2.5Y7/2灰黄色	N3/0暗灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、叩き後ハケ。内面、口縁部ハケ・体部ナデ。	
31-193-1	I区O25 SD3 No.33	弥生土器	壺	(14.1)	-	-	5YR6/8褐色	5YR6/3にぶい褐色	2.5Y4/1黄灰色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
31-193-2	I区O25 SD3 No.33	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3にぶい黄褐色	5YR6/4にぶい褐色	7.5Y4/1灰色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	外面、ナデか?内面、粗いハケ。体部に2カ所、穿孔有り。	
31-194	I区O25 SD3S 上層	弥生土器	甕	14.8	(8.7)	-	10YR8/2灰白色	10YR7/1灰白色	N6/0灰色	直径6mm大以下の砂粒を少量含む。	平底。内外面、ハケ。	外面、黒斑有り。

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
31-195	I区O25 SD3S上層	弥生土器	甕	-	-	-	5Y4/1灰色	25YR7/4 淡 赤褐色	5Y5/1灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後ハケ。内面、ハケ・ナデ。	外面、スス付着。
31-196	I区N25 SD3S No.35	弥生土器	甕	(15.0)	(13.0)	-	10YR7/4に ぶい黄褐色	10YR7/4に ぶい黄褐色	7.5YR7/4に ぶい褐色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	口縁部、ナデ。外面、ハケ。内面、上半 ハケ・ナデ。下半ケズリ。	外面、スス付着。
33-197	I区P25 SD3 中下層	弥生土器	壺	(9.2)	-	-	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	5YR7/4にぶ い褐色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量 含む。	内外面、ナデか？	
33-198	I区S25 SD3中 下層	弥生土器	壺	(10.4)	-	-	7.5YR7/4に ぶい褐色	7.5YR8/4 浅 黄褐色	N6/0灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
33-199	I区S25 SD3 中下層	弥生土器	壺	(13.0)	-	-	7.5YR6/6 橙 色	2.5YR5/6 明 赤褐色	7.5YR7/6 橙 色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。ナデか？	
33-200	I区 SD3 No.6	弥生土器	壺	(9.7)	-	-	7.5YR4/3 褐 色	7.5YR4/3 褐 色	5YR6/4にぶ い褐色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	短頸蓋か？内外面、摩耗。ナデか？頸 部に貼付突起。刻目文。	
33-201	I区Q25 SD3 上中層七クハ 2	弥生土器	壺	18.2	-	-	7.5YR6/6 橙 色	7.5YR7/4に ぶい褐色	2.5Y5/1 黄灰 色	直径5mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、摩耗。外面、ハケか？	
33-202	I区R25 SD3 上層・R25 SD3中下層	弥生土器	壺	(16.0)	-	-	2.5Y7/2 灰黄 色	10YR8/4 浅 黄褐色	2.5Y7/1 灰白 色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部、ナデ。体部外面、叩き後ハケ。 体部内面、ハケ。	
33-203	I区P25 SD3 中下層・P25 上層	弥生土器	壺	(20.4)	-	-	10YR7/3に ぶい黄褐色	10YR7/2に ぶい黄褐色	7.5Y6/1 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、やや粗いハケ。内面、剥離。	
33-204	I区P25 SD3 最下層・Q25 SD3中下層・ P25 SD3下層	弥生土器 複合 縁壺	口 縁壺	(15.6)	13.6	-	10YR5/3に ぶい黄褐色	10YR6/3に ぶい黄褐色	N2/0 黒色		内外面、ハケ・ナデ。	
33-205	I区S25 SD3 上層	弥生土器	複合 縁壺	-	-	-	10YR5/2 灰 黄褐色	10YR7/4に ぶい黄褐色	5Y5/1 灰色	直径4mm大以下の砂粒をごく少量 含む。	内外面、ナデ。二次口縁部が剥離。	
33-206	I区R25 SD3 中層・Q25 SD3 上層・ SD3上層・R25 SD3 中下 層・R25 SD3 上層	弥生土器	複合 縁壺	(16.2)	-	-	10YR7/2に ぶい黄褐色	10YR7/2に ぶい黄褐色	10YR7/2に ぶい黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部・内面、ハケ。外面、叩き後ハ ケ。	
33-207	I区Q25 SD3 中層・下層	弥生土器	甕	(21.0)	-	-	10YR6/4に ぶい黄褐色	10YR5/3に ぶい黄褐色	5Y5/1 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部、ナデ・ハケ。体部内面、ケズ リ。	208と同一個体の 可能性有り。
33-208	I区Q25 SD3 上層	弥生土器	甕	(23.0)	-	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	5Y5/1 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後ハケ。内面、凹凸有り。	207と同一個体の 可能性有り。

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		底径	色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高		内面	外面	断面			
33-209	I区Q25 上中層	弥生土器	甕	(204)	(5.7)	-	10YR7/4に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	N4/0灰色	直径8mm大の小礫をごく少量含み、 直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部、ナデ。外面、ハケ。内面、ケズ リ。	
33-210	I区S25 上中層	弥生土器	甕か壺	(200)	-	-	7.5YR7/4に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/1 灰 白色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、やや摩耗。ナデか？	
33-211	I区S25 中下層	弥生土器	甕	(140)	(4.0)	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y5/1 黄灰 色	2.5Y6/1 黄灰 色	直径2mm大以下の砂粒を少量、雲母 片を含む。	口縁部・外面、ナデ。内面、ハケ。内面、 指頭圧痕有り。	搬入品か？
34-212	I区S25 上中層	弥生土器	甕	(17.4)	-	-	10YR4/2 灰 黄褐色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y3/1 オリー ブ黒色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	外面、叩き。口縁部・内面、ハケ。	
34-213	I区Q25 上層	弥生土器	甕	16.2	(10.2)	-	10YR8/3 浅 黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR8/3 浅 黄橙色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、叩き。内面、ハケ。	
34-214	I区Q25、SD3 中下層・七クベ2	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	10YR6/4に ぶい黄橙色	2.5YR5/6 明 赤褐色	5Y4/1 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。調整不明。	
34-215	I区R25 上層	弥生土器	甕	(20.0)	-	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/1 灰白 色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
34-216	I区R25 上中層	弥生土器	甕	(12.4)	-	-	2.5Y7/3 浅黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	N2/0 黒色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	口縁部、粗いハケ。外面、叩き。内面、 粗いハケ。	
34-217	I区Q25 中層	弥生土器	甕	(10.8)	-	-	10YR7/6 明 黄褐色	7.5YR6/6 橙 色	10YR7/4に ぶい黄橙色	直径5mm大以下の砂粒をやや多く 含む。	外面、叩き。内面、ナデ。	
34-218	I区Q25 中層	弥生土器	甕	-	-	-	7.5YR7/4に ぶい黄 色	10YR7/3に ぶい黄橙 色	5Y7/1 灰白 色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
34-219	I区Q25 中層	弥生土器	甕	(15.3)	-	-	10YR7/2に ぶい黄橙色	7.5YR7/3に ぶい黄橙 色	N6/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	外面、ハケ。内面、ナデ。	
34-220	I区Q25 下層	庄内式土器	甕	(15.0)	(2.7)	-	2.5Y6/2 灰黄 色	2.5Y3/1 黒褐 色	2.5Y5/3 黄褐 色	直径2mm大以下の砂粒、火山ガラス 片を含み、角閃石(?)をごく少量含 む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	畿内からの搬入品。
34-221	I区Q24・25 SD3 中下層	庄内式土器	甕	(18.4)	-	-	2.5Y4/2 晒灰 黄色	2.5Y3/1 黒褐 色	2.5Y6/2 灰黄 色	直径1mm大以下の砂粒、火山ガラス 片を含む。直径3mm大の砂粒をごく 少量含む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	スス付着。畿内か らの搬入品。
34-222	I区 SD3	庄内式土器	甕	(16.0)	-	-	2.5Y6/2 灰黄 色	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y4/1 黄灰 色	直径2mm大以下の砂粒を含み、角閃 石、火山ガラス片を少量含む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	畿内からの搬入品。
34-223	I区S25 中下層	庄内式土器	甕	(16.1)	-	-	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y6/2 灰黄 色	2.5Y4/1 黄灰 色	ほとんど砂粒を含まない。雲母片を 含む。	口縁部、ナデ。体部内面、ケズリ。	外面、スス激しく 付着。畿内からの 搬入品。
34-224	I区Q25 中層	庄内式土器	甕	(14.7)	-	-	10YR3/2 黒 褐色	10YR4/2 灰 黄褐色	10YR5/3に ぶい黄褐色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量 含み、角閃石・火山ガラス片を含む。	口縁部、ナデ。外面、叩き後ハケ。内 面、ケズリ。	外面、スス付着。畿 内からの搬入品。

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
34-225	I区S25 中下層	弥生土器	甕	-	-	(41)	25Y8/3 淡黄色	25Y8/2 灰白色	10Y5/1 灰色	外面、ミガキ?内面、ナデ。	
34-226	I区Q25 中下層	弥生土器	甕	-	-	(40)	25Y7/3 浅黄色	25Y7/2 灰黄色	5Y3/1 オリーブ黒色	平底。外面、叩き。内面、ナデ。	
34-227	I区S25 上中層・中下層	弥生土器	甕	-	(5.7)	(50)	10YR5/3 に ぶい黄褐色	10YR7/2 灰白色	10YR7/2 灰白色	丸底。外面、叩き後ハケ。内面、ハケ。	搬入品か?
34-228	I区R25 中下層	弥生土器	甕	-	-	-	7.5YR5/3 に ぶい褐色	10YR7/4 に ぶい黄褐色	2.5Y6/1 黄色	丸底。叩き後ハケ。内面、ハケ・ナデ。	スス付着。
34-229	I区Q25 中下層七クベ2	弥生土器	甕	-	-	3.1	2.5YR6/6 橙黄色	2.5YR6/6 橙黄色	7.5YR5/1 褐色	外面、叩き。内面、ナデ。	被熱変色。
34-230	I区R25 中層・上中層	弥生土器	鉢?	11.0	-	-	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	5Y5/1 灰色	外面、粗いハケ。内面、ナデ。器壁、厚い。	外面、黒斑有り。異質な印象の土器。
34-231	I区Q25 サブトシ	弥生土器	甕	-	-	3.0	2.5Y7/3 浅黄色	10YR8/4 浅黄褐色	5Y5/1 灰色	平底。外面、叩き。内面、ナデ・ハケ。	外面、黒斑有り。
34-232	I区Q25 中下層七クベ2	弥生土器	鉢	(18.0)	-	(6.6)	10YR7/3 に ぶい黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y5/1 黄灰色	底部、突出。外面、ナデ。内面、ハケ。	
34-233	I区Q25 中層	弥生土器	鉢か	-	-	-	7.5Y2/1 黒色	5Y4/1 灰色	5Y6/1 灰色	内外面、ナデ。	搬入土器
34-234	I区S25 中下層	弥生土器	ミニチュア	-	-	(5.0)	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/2 灰黄色	7.5YR7/4 に ぶい褐色	外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。	
34-235	I区O24・25 SD3中下層 O25 SD3上層・P25 SD3中下層	弥生土器	鉢	7.9	8.4	4.6	7.5YR6/6 橙黄色	7.5YR6/6 橙黄色	2.5Y5/1 黄灰色	ほとんど砂粒を含まない。	
34-236	I区P25 中下層	弥生土器	鉢	(20.0)	-	-	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR7/3 に ぶい黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	
35-237	I区P25 下層	弥生土器	脚部	-	-	5.3	10YR6/3 に ぶい黄褐色	10YR5/1 褐色	10YR8/4 浅黄褐色	直径4mm大以下の砂粒をやや多く含む。	
35-238	I区R25 上中層	弥生土器	底部	-	-	(5.2)	5Y4/1 灰色	7.5YR8/3 浅黄褐色	5Y4/1 灰色	底部、突出。内外面、磨耗。調整不明。	
35-239	I区R25 中層	弥生土器	鉢	-	-	4.1	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	内外面、ナデ。	
35-240	I区M2? 上層	弥生土器	高杯	-	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y8/2 灰白色	N3/0 暗灰色	杯部、碗形。脚部に4カ所の円孔。脚部外面、ミガキ。分割成形。	

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
35-241	I区SD3Q25 上層 O24・25 中下層 R25 上中層	弥生土器	高杯	(180)	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	25Y4/1 黄灰色	外面、ミガキ。内面、摩擦、ナデ?ミガキ?分割成形。	
35-242	I区R25 中下層	弥生土器	高杯	-	-	133	75YR7/6 橙褐色	75YR7/4 に ぶい、黄褐色	75YR7/6 橙褐色	内外面、摩擦。調整不明。	
35-243	I区R25 上層	弥生土器	高杯	-	-	-	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	10Y4/1 灰色	内外面、摩擦。調整不明。	
35-244	I区P25 中下層	弥生土器	高杯	-	-	-	25Y7/1 灰白色	25Y7/1 灰白色	N4/0 灰色	外面、ミガキ?内面、ナデ。	
35-245	I区Q25 中層	弥生土器	高杯	-	-	-	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	75YR6/4 に ぶい、黄褐色	5Y6/1 灰色	円孔有り。外面、ミガキ。内面、ナデ。	
35-246	I区S25 中下層	弥生土器	支脚	-	-	(11.2)	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	5Y5/1 灰色	中空。手捏ね成形。	
35-247	I区S25 中下層	弥生土器	支脚	-	-	-	25Y6/2 灰黄色	25Y6/1 黄灰色	25Y6/2 灰黄色	手捏ね成形。	スス付着。
35-248	I区S25 中下層	弥生土器	支脚	-	-	-	-	10YR7/2 に ぶい、黄褐色	25Y5/1 黄灰色	手捏ね成形。叩き目有り。	スス付着。
35-249	I区N24 下層	弥生土器	支脚	-	-	-	75YR7/4 に ぶい、黄褐色	75YR7/3 に ぶい、黄褐色	N4/0 灰色	手捏ね成形。	
35-250	I区S25 中下層	弥生土器	支脚	-	-	(60)	-	10YR7/2 に ぶい、黄褐色	25Y7/1 灰白色	中実か?手捏ね成形。	
35-251	I区R25 中下層	弥生土器	支脚	-	-	(74)	25YR6/6 橙褐色	25YR5/4 に ぶい、赤褐色	5Y4/1 灰色	中実。手捏ね成形。	外面、スス付着。
35-252	I区P25 中下層	弥生土器	壺	(125)	-	-	75YR5/4 に ぶい、褐色	5YR6/6 橙褐色	25Y5/1 黄灰色	内外面、摩擦。ナデか?	混入。
35-253	I区P25 下層	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3 に ぶい、黄褐色	5YR7/6 橙褐色	10YR4/1 褐色 灰色	内外面、摩擦。ナデか?ヘラ描文か?	
35-254	I区R25 中下層	弥生土器	壺	-	-	-	5Y5/1 灰色	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	5Y4/1 灰色	内外面、ハケ。外面、縦方向の沈線文・横描直線文。	混入。
37-258	I区O24・25 SD3N	弥生土器	壺	(142)	-	-	25Y6/2 灰黄色	10YR7/4 に ぶい、黄褐色	5Y4/1 灰色	外面、やや摩擦。ナデか?内面、ハケ。	

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
37-259	I区K24 SD3N	弥生土器	壺	-	-	-	7.5YR7/4に ぶい 橙色	7.5YR7/4に ぶい 橙色	7.5YR6/1 灰 色	直径6mm大以下の砂粒を少量含む。 外面、粗いハケ。内面、ナデ。外面頸部に貼付突起。		
37-260	I区M24・L24 SD3N	弥生土器	壺	-	-	-	2.5Y7/3 浅黄 色	2.5Y7/3 浅黄 色	2.5Y6/1 黄灰 色	丸底。外面、叩き。内面、ハケ。 少し被熱変色。		
37-261	I区L24 SD3N	弥生土器	甕	-	-	-	10YR7/4に ぶい 黄橙色	10YR7/4に ぶい 黄橙色	10YR7/4に ぶい 黄橙色	丸底。外面、叩き。内面、ナデ。		
37-262	I区 SD3N	弥生土器	壺	-	-	-	10YR6/4に ぶい 黄橙色	7.5YR6/6 橙 色	7.5YR7/4に ぶい 橙色	外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。		
37-263	I区N24 SD3N	弥生土器	鉢	14.0	6.6	-	10YR7/3に ぶい 黄橙色	10YR7/3に ぶい 黄橙色	-	丸底。外面、叩き後ナデ。内面、ハケ。外面、スス付着。		
37-264	I区O24・25 SD3N	弥生土器	甕	-	-	-	2.5Y6/1 黄灰 色	10YR7/4に ぶい 黄橙色	2.5Y6/1 黄灰 色	外面、叩き。内面、摩擦。調整不明。		
37-265	I区L24 SD3N・M24	弥生土器	鉢	10.0	2.6	6.6	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/2 灰黄 色	N4/0 灰色	手捏ね成形。		
37-266	I区O24 SD3N	弥生土器	脚付き 鉢	-	-	4.6	7.5YR6/4に ぶい 橙色	7.5YR6/4に ぶい 橙色	7.5YR6/4に ぶい 橙色	脚付鉢か？内外面、摩擦。ナデか？		
37-267	I区N24 SD3N上層	弥生土器	鉢	(14.4)	-	-	7.5Y5/1 灰色	2.5Y7/2 灰黄 色	7.5Y5/1 灰色	直径7mm大の小礫をごく少量含む、 直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、スス付着。	
37-268	I区 SD3N サブトシ	弥生土器	脚付き 鉢か	(12.8)	11.7	5.0	7.5YR7/4に ぶい 橙色	7.5YR7/4に ぶい 橙色	7.5YR7/4に ぶい 橙色	内外面、摩擦。外面、叩き。内面、ハケ。		
37-269	I区O24・25 SD3N	弥生土器	高杯	-	-	-	10YR7/6 明 黄褐色	10YR7/4に ぶい 黄橙色	10YR7/1 灰 白色	内外面、摩擦。ナデか？		
37-270	I区N24 SD3N上層	弥生土器	支脚	-	-	(4.6)	10YR7/2に ぶい 黄橙色	2.5Y7/2 灰黄 色	5Y5/1 灰色	手捏ね成形。		
38-271	I区N24 SD2.3 上層	弥生土器		-	-	-	10YR7/4に ぶい 黄橙色	5YR7/4に ぶい 黄橙色	10YR7/4に ぶい 黄橙色	内外面、ナデ？外面、刻目文。 薄手式土器。		
40-272	I区M22 SD4	弥生土器	壺	-	-	-	10YR8/2 灰 白色	10YR8/2 灰 白色	10YR8/2 灰 白色	内外面、若干摩擦。ナデ。貼付口縁。		
40-273	I区M22 SD4	弥生土器	壺	(10.8)	-	-	10YR8/3 浅 黄褐色	10YR7/2に ぶい 黄橙色	5Y4/1 灰色	内外面、ナデか？口唇部全面、刻目文。		
40-274	I区O22 SD4	弥生土器	壺	(14.0)	-	-	2.5Y7/3 浅黄 い赤褐色	5YR5/4に ぶい 赤褐色	5Y2/1 黒色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。 仁淀川流域の胎土か？		

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
40-275	I区N22 SD4	弥生土器	壺	(220)	-	-	25Y7/2 灰黄色	25Y8/2 灰白色	25Y7/2 灰黄色	直径5mm大の小礫をごく少量含み、直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、摩耗。ナデか。貼付口縁。	
40-276	I区O22 SD4	弥生土器	壺	(230)	-	-	25Y3/1 黒褐色	10Y7/3 にぶい橙色	25Y4/1 黄灰色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	外面、ナデ？内面、ハケ？貼付口縁。外面、櫛描波状文・櫛描直線文。	
40-277	I区O22 SD4	弥生土器	壺	(132)	-	-	25Y7/3 浅黄色	N3/0 暗灰色	N3/0 暗灰色	直径6mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、摩耗。ナデか？肩部に籬状文。	
40-278	I区M21 SD4	弥生土器	壺	-	(100)	-	10YR3/1 黒褐色	75YR6/4 にぶい橙色	10YR3/1 黒褐色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内面、ナデ。外面、櫛描波状文・櫛描直線文。	
40-279	I区M22 SD4	弥生土器	壺	-	-	-	25Y4/1 黄灰色	25Y6/1 黄灰色	10YR6/2 灰黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ。外面、櫛描直線文・縦方向の沈線文・重弧文。	
40-280	I区O22 SD4	弥生土器	壺	-	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	N2/0 黒色	直径6mm大以下の砂粒を少量含む。	内面、剥離。外面、櫛描波状文・櫛描直線文。	
40-281	I区M22 SD4	弥生土器	壺	-	-	-	25Y7/2 灰黄色	10Y8/3 浅黄色	7.5Y3/1 オリーブ黒色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ？外面、櫛描直線文・櫛描波状文。	
40-282	I区N22 SD4	弥生土器	甕	(116)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR8/3 浅黄色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。口唇部、拡張。2条の凹線文。	
40-283	I区N22 SD4	弥生土器	甕	-	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR6/4 にぶい橙色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。口唇部、拡張。2条の凹線文。	
40-284	I区N22 SD4	弥生土器	甕	(128)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。口縁部・外面、ナデ？内面、ケズリ。	
40-285	I区N22 SD4	弥生土器	鉢	(190)	-	-	10YR8/3 浅黄褐色	25Y8/3 淡黄色	N4/0 灰色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。	
40-286	I区L22 SD4	弥生土器	鉢	(300)	-	-	10YR8/3 浅黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	5Y3/1 オリーブ黒色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。	
40-287	I区N21 SD4	弥生土器	鉢	(211)	-	-	25Y8/2 灰白色	25Y8/2 灰白色	25Y8/2 灰白色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
40-288	I区N22 SD4	弥生土器	複合口縁壺		-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5Y3/1 オリーブ黒色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。外面、櫛描波状文。	
40-289	I区O22 SD4	弥生土器	小形鉢	(126)	5.0	(1.9)	75Y2/1 黒色	5Y7/1 灰白色	75Y2/1 黒色	直径2mm大以下の砂粒を少量含む。	丸底。内外面、摩耗。外面、ナデ？内面、ハケ。	
40-290	I区 SD4 七ヶ	弥生土器	鉢	(144)	-	-	75YR7/4 にぶい橙色	75YR7/3 にぶい橙色	5Y5/1 灰色	直径5mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	外面、スス付着。
40-291	I区O22 SD4	弥生土器	壺			(5.0)	25Y3/1 黒褐色	25Y3/1 黒褐色	25Y3/1 黒褐色	直径2mm大以下の砂粒を非常に多く含む。	内外面、摩耗。調整不明。	薄手式土器。
40-292	I区O22 SD4	弥生土器	壺			7.8	25Y8/2 灰白色	5Y7/2 灰白色	N6/0 灰色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩耗。ナデか？	

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
42-294	I区K23 SD5	弥生土器	壺	(116)	(9.5)		7.5YR6/6 橙 色	2.5YR6/6 橙 色	2.5Y6/1 黄灰 色	外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。	
42-295	I区J23 I層 ・J24 I層	弥生土器	壺	(222)			10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	2.5Y2/1 黒色	内外面、ハケ。貼付口縁、口縁部両端、 刻目文。口唇部、凹状。肩部、縹状文。	
42-296	I区I24 SD5	弥生土器	壺				2.5Y4/1 黄灰 色	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y5/1 黄灰 色	内面、ナデ。外面、櫛描波状文・ドー ナツ状浮文・櫛描直線文。	
42-297	I区K23 SD5	弥生土器	壺	(122)			5YR7/6 橙 色	5YR7/6 橙 色	2.5Y7/1 灰白 色	内外面、磨耗。調整不明。櫛描直線文 か？	
42-298	I区K23 SD5 I層	弥生土器	壺	(110)	(5.3)		10YR7/4に ぶい黄橙色	5YR7/6 橙 色	5YR7/6 橙 色	内外面、ナデ。外面、櫛描波状文。	
42-299	I区J25 SD5 II層	弥生土器	壺			(8.5)	7.5YR7/1 灰 白色	7.5YR7/1 灰 白色	2.5Y7/2 灰白 色	内外面、ナデ。外底面に糊圧痕有り。	
42-300	I区K23 SD5 I層	弥生土器	壺				10YR8/3 浅 黄橙色	10YR8/4 浅 黄橙色	N3/0 暗灰色	器面のほとんどが剥離。穿孔有り。	
42-301	I区K22 SD5	弥生土器	脚付き 鉢小		(4.6)	5.3	2.5Y8/2 灰白 色	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y5/1 黄灰 色	底部、突出。外面、叩き後ハケ。内面、 剥離、調整不明。	つまみ径5.2cm
42-302	I区J24 SD5 II層	弥生土器	蓋		(2.6)		2.5Y7/3 浅黄 色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y4/1 灰色	外面、ハケ。内面、ナデ。	
42-303	I区I24 SD5	弥生土器	甕	(204)			7.5YR5/4に ぶい褐色	10YR3/2 黒 褐色	5Y2/1 黒色	内外面、ナデ。貼付口縁、下端、刻目 文。	外面、スス付着。
42-304	I区J24 SD5	弥生土器	壺	(134)			10YR7/3に ぶい黄橙色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y4/1 灰色	外面、ハケ・ミガキ？内面、ナデ。	
42-305	I区I24 SD5 II層	弥生土器	鉢	(238)			5YR8/3 淡橙 色	10YR8/3 浅 黄橙色	5YR7/2 明褐 灰色	内外面、ナデ。	
42-306	I区J23 SD5 I層・III層	弥生土器	甕	(300)	3.3		5Y4/1 灰色	10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y4/1 灰色	内外面、磨耗。ナデか？	
42-307	I区K23 SD5 I層	弥生土器	壺	(162)			5YR6/6 橙 色	2.5Y5/6 明 赤褐色	2.5Y5/1 黄灰 色	内外面、磨耗。外面、ハケ。	
42-308	I区K23 SD5 I層・I区 III層・K24 SD5 II層	弥生土器	壺				7.5YR7/4に ぶい褐色	10YR8/3 浅 黄橙色	2.5Y7/1 灰白 色	外面 粗いハケ。内面、ナデ。頸部、刻 目突帯を貼付。	
42-309	I区J25 SD5	弥生土器	甕	(122)			10YR7/3に ぶい黄橙色	5Y2/1 黒色	N5/0 灰色	外面、叩き後ナデ。口縁部、叩き後ハ ケ。内面、ハケ。	外面、ススが激し く付着。

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
42-310	I区K23 I層 SD5	弥生土器	甕	(17.0)			25Y7/3 浅黄色	25Y7/3 浅黄色	直径6mm大以下の砂粒を少量含む。	体部外面、叩き。口縁部、ハケ。内面、ハケ後ナデ。器壁がうすい。	
43-311	I区J23 I層 SD5	弥生土器	甕	(18.9)			10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	直径8mm大の小礫をごく少量含む。直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き後ハケ。口縁部、ハケ。内面、ケズリ・ナデ。	外面、黒斑有り。
43-312	I区J23 I層 SD5	弥生土器	甕	(22.4)			10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。口縁部、ナデ。内面、ハケ・ナデ。	
43-313	I区K23 I層・J23 III層・I区 J23 SD5 I層	弥生土器	甕				7.5YR7/4に ぶい橙色	7.5YR7/4に ぶい橙色	直径5mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ハケ。口縁部、ナデ。	
43-314	I区J25 I層 SD5	弥生土器	甕			(5.0)	10YR7/4に ぶい黄褐色	10YR6/3に ぶい黄褐色	直径5mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ハケ。内面、ケズリ・ナデ。	外面、スス付着。
43-315	I区J24 I層・J25 SD5 II層・J25 SD5 I層	弥生土器	甕			2.8	10YR7/4に ぶい黄褐色	10YR7/4に ぶい黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を多く含む。	外面、叩き後ハケ。内面、ナデ。	
43-316	I区J24 I層・III層 SD5	弥生土器	底部		(4.8)		2.5Y7/2 灰黄色	5Y4/1 灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	丸底。外面、叩き。内面、ナデ。	外面、黒斑有り。
43-317	I区J25 I層・J26 SD5 I層	弥生土器	鉢	(16.4)	6.7	2.2	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	丸底。外面、叩き。内面、ハケ。	
43-318	I区J24 I層 SD5	弥生土器	脚付き鉢		(5.5)	5.4	10YR8/3 浅黄褐色	5Y7/1 灰白色	直径6mm大以下の砂粒をごく少量含む。	外面、ナデ。杯部内面、ミガキ。	
44-320	I区 SK1 七ヶ	弥生土器	壺	(10.4)			7.5YR4/4 褐色	10YR7/4に ぶい黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、ナデ。口唇部に2条の凹線入文。	高松平野からの搬入品。
44-321	I区 SK1	弥生土器	甕	(11.8)			2.5Y7/1 灰白色	7.5Y3/1 オリーブ黒色	直径1mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
46-322	II-1区 No.7 ST2	弥生土器	壺	15.5			10YR7/4に ぶい黄褐色	10YR7/3に ぶい黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、叩き後ハケ。内面、ハケ。内面、粘土帯接合痕跡有り。	歪む。
46-323	II-1区 No.7 ST2内 SK1	弥生土器	壺	(11.8)			2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	直径3mm大以下の砂粒を(少量)含む。	内外面、ハケ。	
46-324	II-1区 No.7 ST2	弥生土器	壺	(16.8)			10YR7/4に ぶい黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ?口唇部、面取り。	
46-325	II-1区 ST2	弥生土器	壺				2.5Y6/3に ぶい黄色	10YR6/3に ぶい黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。雲母片をごく少量含む。	内外面、ナデ。ドーナツ状浮文。	

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量			色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	断面			
46-326	II-1区 ST2 No.4 No.5	弥生土器	壺				25Y7/3 浅黄 色	25Y7/2 灰黄 色	25Y5/1 黄灰 色	直径7mm大前後の小礫を少量含み、 半径3mm大以下の砂粒をやや多く 含む。	外面、叩き後ハケ。内面、ナデ・ハケ。	
46-327	II-1区 ST2 内SK1	弥生土器	壺		34		7.5YR6/4に ぶい、橙色	10YR7/3に ぶい、黄橙色	2.5Y4/1 黄灰 色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	丸底。外面、叩き後ハケ。内面、ハケ。	
46-328	II-1区 S19 ST2	弥生土器	底部				N4/0 灰色	10YR8/3 浅 黄橙色	10YR8/2 灰 白色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	丸底。外面、叩き。内面、ナデ。	
46-329	II-1区 ST2 内SK1	弥生土器	鉢	(13.2)	6.9					直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	ボール状。外面、叩き後ナデ。内面、ハ ケ。	重ね焼きの痕跡？
50-334	II-1区 U20 SK4	弥生土器	壺	(13.6)			7.5YR7/3に ぶい、橙色	7.5YR7/4に ぶい、橙色	7.5Y7/4にぶ い、橙色	直径11mm大の小礫をごく少量含 み、直径5mm大以下の砂粒を多く含 む。	体部外面、ハケ。口縁部・内面、ナデ。 口唇部、面取り。	
50-335	II-1区 U20 SK4	弥生土器	壺				2.5Y6/2 灰黄 い黄色	2.5Y6/3にぶ い、黄色	5Y5/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒、角閃石を含 む。	外面、ハケ。下半、ハケ後ミガキ。内面 下半、ケズリ。上半、指頭圧痕顕著。	高松平野からの搬 入品。
50-336	II-1区 U20 SK4	弥生土器	甕	(14.5)	28.2	(4.0)	2.5Y6/1 黄灰 色	10YR7/2に ぶい、黄橙色	10YR7/2に ぶい、黄橙色		外面、叩き後ナデ。内面、ナデ。	外面、スス付着。
50-337	II-1区 U20 SK4	弥生土器	甕			(5.0)	10YR3/1 黒 褐色	2.5Y6/2 灰黄 色	10YR3/1 黒 褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ハケ。内面、ハケ・ナデ。	
50-338	II-1区 U20 SK4	弥生土器	甕			4.6	2.5Y7/2 灰黄 色	2.5Y7/1 灰白 色		直径5mm大以下の砂粒を含む。	外面、ミガキ・ハケ。内面、ハケ。	
50-339	II-1区 U20 SK4	弥生土器	底部			(5.2)	5YR3/1 オ リーブ黒色	7.5YR6/4に ぶい、褐色	5Y6/1 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、摩擦。ミガキか？	
50-340	II-1区 U20 SK4	弥生土器	甕		(2.6)		10YR7/4に ぶい、黄橙色	10YR7/3に ぶい、黄橙色	10YR7/3に ぶい、黄橙色	直径5mm大以下の砂粒を少量含む。	丸底。外面、叩き。内面、ナデ。	混入か。
50-341	II-1区 U20 SK4	弥生土器	脚部	(6.7)		(7.6)	7.5YR6/4に ぶい、褐色	2.5YR6/8 橙 色	2.5Y2/1 黒色	直径2mm大以下の砂粒をやや多く 含む。	内外面、ナデ。	
50-342	II-1区 U20 SK4	弥生土器	鉢	(26.3)	18.4	5.6	2.5Y7/2 灰黄 色	10YR7/4に ぶい、黄橙色	2.5Y2/1 黒色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	外面下半、ナデか？上半、ハケ。内面 下半、ナデ。上半、ケズリ・ナデ。	
50-343	II-1区 U20 SK4	弥生土器	鉢	(11.0)			2.5YR7/1 灰 白色	2.5YR7/2 灰 黄色	5Y5/1 灰色	直径8mm大の小礫をごく少量含み、 直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面下半、ナデ。上半、粗いハケ。口縁 部・内面、ナデ。	
50-344	II-1区 U20 SK4	弥生土器	鉢	(10.4)	14.4	(5.0)	7.5YR7/6 橙 色	10YR7/4に ぶい、黄橙色	2.5Y5/1 黄灰 色	直径4mm大以下の砂粒を含み、雲母 片をごく少量含む。	底部、凹盤状。内外面、摩擦。外面、ハ ケ。内面、調整不明。	
51-346	II-1区 SK5	弥生土器	壺	(14.7)	(3.8)		10YR8/3 浅 黄褐色	10YR7/3に ぶい、黄橙色	5Y5/1 灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ハケ。口縁部、ナデ。	スス付着。348と同 一物体か？

()内、復原値

図版番号	遺構・層位	器種	器形	法量		色調			胎土	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面	外面			
51-347	II-1区 T20 SK5	弥生土器	壺			(50)	7.5YR7/4に ぶい、橙色	7.5YR7/4に 2.5Y6/1黄灰 色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	外面、ナデか？ミガキか？内面、ハケ。	
51-348	II-1区 T20 SK5	弥生土器	壺			(40)	2.5Y7/2灰黄 色	2.5Y7/2灰黄 色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、細かなハケ。内面、ハケ。	外面、スス付着。搬入品か？
51-349	II-1区 T20 SK5	弥生土器	支脚				10YR7/2に ぶい、黄橙色	10YR7/2に N5/0灰色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	手捏ね成形。脚部内面、絞り目有り。	スス付着。
52-350	II-1区 Q18 SK6	弥生土器	壺	(9.4)	1.3		2.5Y3/1黒褐 色	2.5Y3/1黒褐 色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
52-351	II-1区 Q18 SK6	弥生土器	壺				10YR6/1褐 灰色	10YR4/1褐 灰色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、櫛描波状文、櫛描直線文。	
53-352	II-1区 U20 SD6	弥生土器	甕				10YR7/3に ぶい、黄橙色	2.5Y5/1黄灰 色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	
53-353	II-1区 SD6	弥生土器	壺	(20.8)			7.5Y7/4にぶ い、橙色	N3/0黒色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口唇部、凹面状。内外面、ハケ。	
53-354	II-1区 T19 SD6	弥生土器	底部			(4.8)	5Y3/1オ リーブ黒色	2.5Y7/3浅黄 色	直径1mm大以下の砂粒を含む。	上げ底。内外面、ナデか？	
53-355	II-1区 SD6	弥生土器	壺			(7.6)	2.5Y8/2灰白 色	10YR8/2灰 白色	直径2mm大以下の砂粒をごく少量 含む。	若干、上げ底。内外面、ミガキか？	
54-356	II-1区 SD7	弥生土器	鉢	(18.5)	5.6	(6.0)	5Y2/1黒色	2.5Y7/2灰黄 色	直径7mm大以下の砂粒をごく少量 含む。	丸底。外面上半、粗いハケ。下半、叩 き。内面、ナデ。	
55-357	I区 III層	弥生土器か	鉢か甕				2.5YR6/4に ぶい、橙色	10YR7/3に ぶい、黄橙色	砂粒をほとんど含まない。	内外面、ナデ。	
55-358	包含層 I層 III層	庄内式土器	甕				10YR4/3に ぶい、黄褐色	10YR4/3に ぶい、黄褐色	直径1mm大以下の砂粒、角閃石を多 く含む。	内外面、ナデ。	外面、スス付着。畿 内からの搬入品。
55-359	I区、そうじ 包含層	布留式土器	甕				10YR7/3に ぶい、黄橙色	10YR7/2に ぶい、黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ナデ。	搬入品。
55-360	I区 III層	弥生土器	鉢	9.1	3.4		7.5YR7/6橙 色	10YR7/4に ぶい、黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、ナデ。	
55-361	I区 III層	弥生土器	鉢				10YR8/3浅 黄褐色	10YR8/3浅 黄褐色	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	内外面、やや摩擦。ナデか？口唇部全 面、刻目文。	
55-362	I区 III層	弥生土器	高杯				2.5Y7/3浅黄 色	2.5Y6/4にぶ い、黄色	直径5mm大以下の砂粒を少量含む。	外面、ミガキ。内面、ナデ。絞り目有 り。3カ所に凹孔。	
55-363	I区 包含層	土師質土器	椀				10YR7/4に ぶい、黄褐色	2.5Y6/2灰黄 色	ほとんど砂粒を含まない。		

図版番号	遺構・層序	器形	法量cm			石材	特徴	備考
			全長	全幅	全厚			
14-13	I区 ST1 No.3	叩石	145	79	3.5	砂岩	両面中央部と短辺の一端を使用する。鉄器生産に使用か？	
14-14	I区 ST1 No.1	叩石	124	10.4	5.6	砂岩	自然石か？鉄分が付着。	
14-15	I区Q24 ST1	磨り石	127	91	6.4	砂岩	両面に弱い敲打痕跡有り。両端に使用痕有り。	水銀朱が付着。
26-167	I区P23 SD1 II層	磨製石包丁	3.3	7.8	1.1	砂岩	片刃。刃部付近に最大厚。穿孔は両面からの敲打による。	
26-168	I区H24 SD1	磨製石斧	6.6	5.6	1.65	蛇紋岩	刃部は側縁に対し斜行。	
26-169	I区H24 SD1	扁平片刃石斧	5.3	3.3	10.0	蛇紋岩	平面形はいびつ。縁は不明瞭。刃部は鋭い。	
26-170	I区Q23 セクベ2 SD1 II層	磨製石斧	6.7	4.3	3.2	緑色岩？	片刃。	
26-171	I区F24 SD1 I層	大型蛤刃石斧	-	-	-	蛇紋岩	大部分が欠損。	
26-172	I区G24 SD1 I層	柱状片刃石斧	10.3	4.8	2.4	緑色片岩	断面形は台形。鈍、不明瞭。	
26-173	I区L23 SD1 I層	剥片	5.1	3.8	1.4	サヌカイト	フィッシャー・リング、有り。自然面、有り。	
26-174	I区M23 SD1	大型蛤刃石斧	13.7	8.1	5.5	蛇紋岩	未製品。フラットな自然面を残す。	
26-175	I区L23 SD1 I層	叩石	13.0	4.2	2.1	砂岩	棒状。先端部のみ使用。	
26-176	I区Q23 SD1 I層	叩石	9.2	5.4	4.8	砂岩	棒状。両端を激しく使用。	
36-255	I区S25 SD3中下層	砥石	(74)	(3.8)	(0.9)	泥岩	欠損。残存している二面に使用痕跡。	
36-256	I区M25 SD3S 上層	叩石	10.5	7.4	2.8	砂岩	両面中央部・両端部に使用痕跡有り。	
36-257	SD3 上層	台石	46.8	24.4	8.5	砂岩	全面、自然面。使用痕跡は認められない。	
50-345	SK4	打製石包丁	7.3	3.8	0.6	頁岩	両面とも、主要剥離面を大きく残す。両端に抉り。片刃。	

図版番号	遺構・層位	器形	法量cm			樹種	特徴	備考
			全長	全幅	全厚			
48-330	II-1区 P9	柱	(78)	9.2	7.9	ツブラジイ	-	
48-331	II-1区 P9	柱	(10.0)	8.7	4.6	ツブラジイ	-	
48-332	II-1区 P5	柱	26.5	12.6	10.4	ブナ科シイ属	-	
48-333	II-1区 P4	柱	(12.3)	11.5	9.9	ブナ科シイ属	-	
55-366	I区 M27 III層	田下駄	9.2	2.8	1.3	ヒノキ科アスナロ属	-	

図版番号	遺構・層位	銭種	法量cm			特徴	備考
			外径	内径	全厚		
55-364	包含層	寛永通宝	2.50	2.05	0.10	孔径0.60 「マ」頭通。新寛永。	

()内、復原値

写真図版



調査区遠景



I 区完掘状況全景



SD1完掘状況



SD1・5付近完掘状況



SD2・ST1完掘状況



SD3完掘状況



完掘状況



完掘状況



I 区基本層序



I 区基本層序

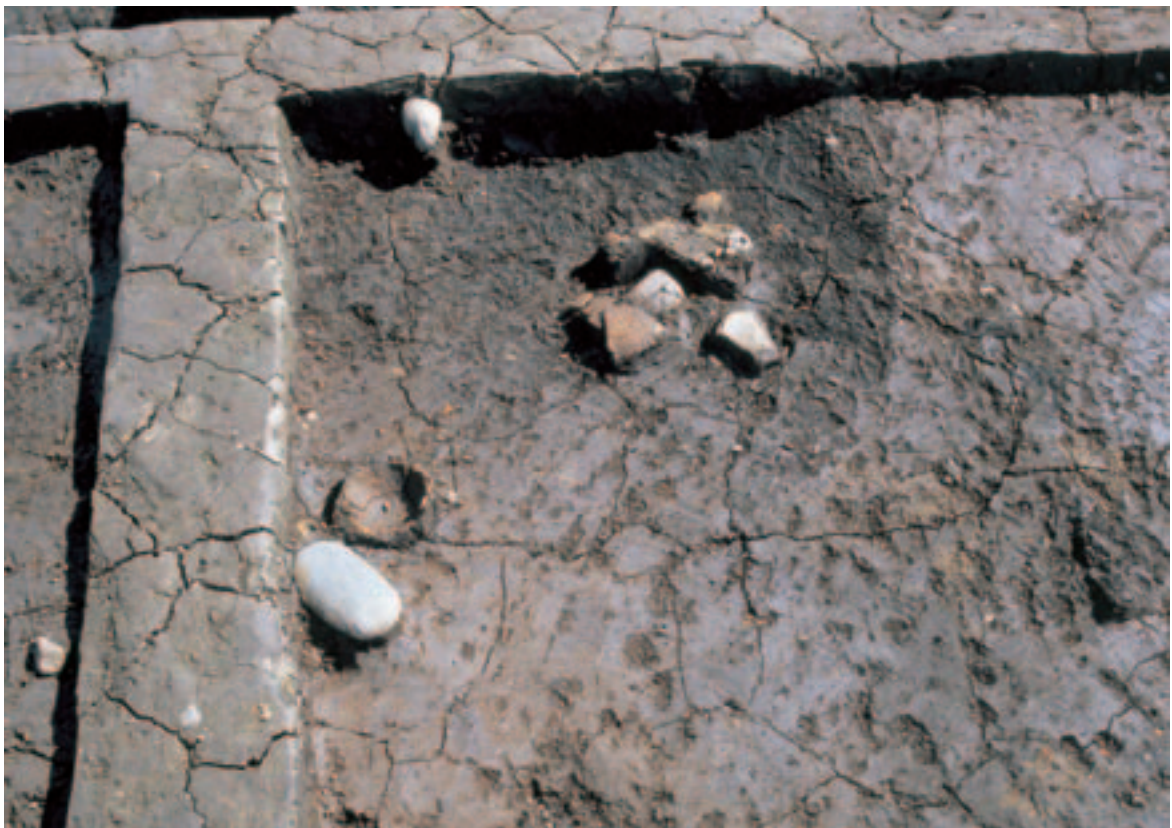


ST1完掘状況

PL.4



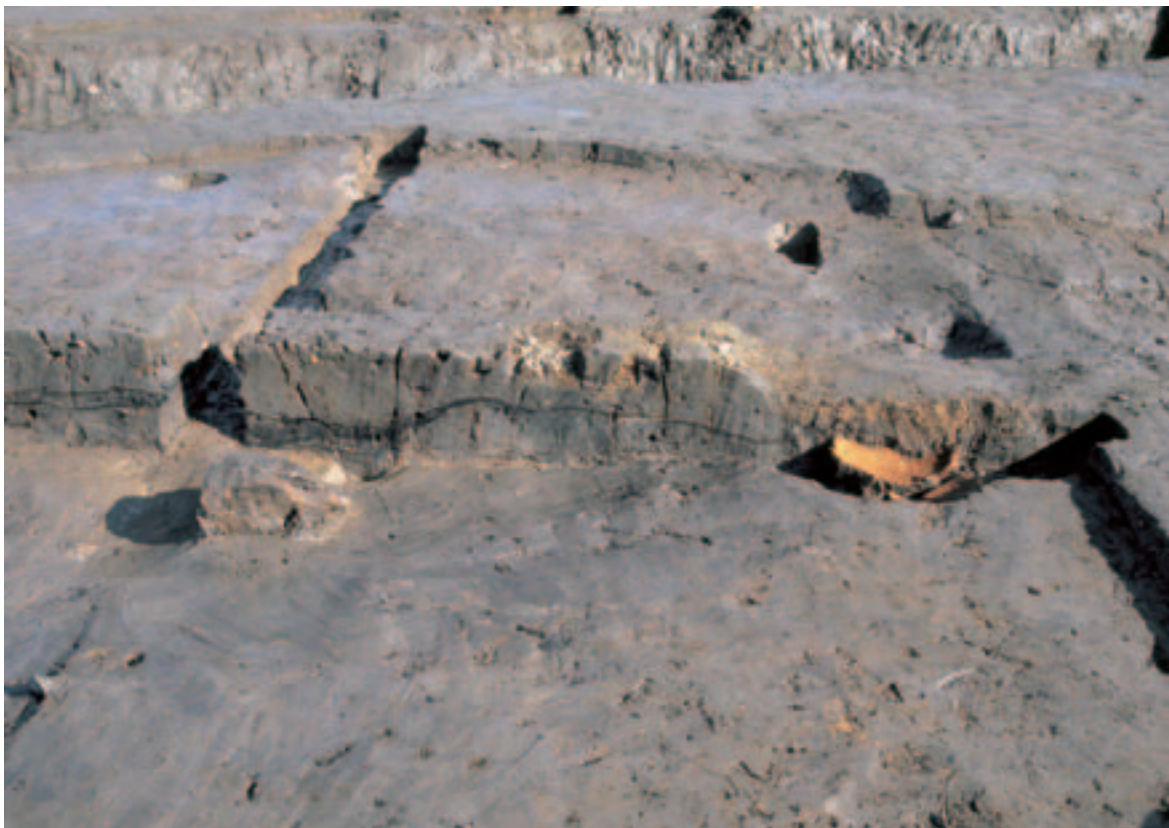
ST1遺物・焼土・炭化物出土状況



同上近景



ST1東西セクション



同上



SK1セクション



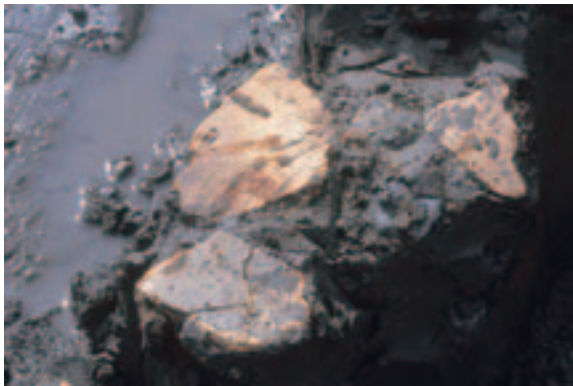
SD1セクション



SD1セクション



SD1セクション



SD1遺物出土状況



SD1遺物出土状況



SD1遺物出土状況



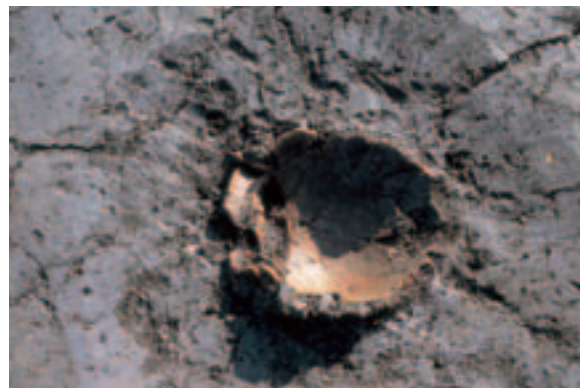
SD1遺物出土状況



SD3Sセクション



SD3S遺物出土状況



SD3S遺物出土状況



II区完掘状況



II-1区完掘状況



II区完掘状況遠景



II-1区西壁セクション



II-1区南壁セクション



ST2完掘状況



ST2セクション



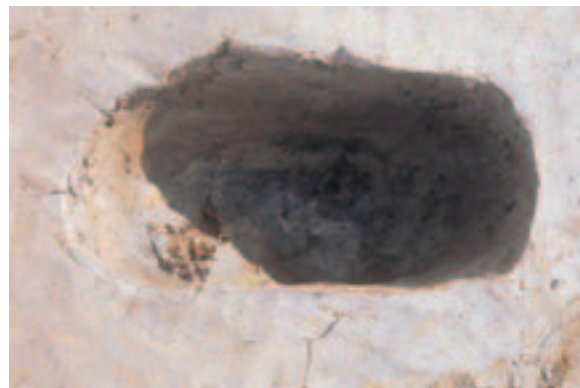
ST2-SK1遺物出土状況



SB1完掘状況



P5セクション



P3



P4



P4



SK3セクション



SK5セクション



SK4遺物出土状況



同左



SK5完掘状況





125



126



144



150



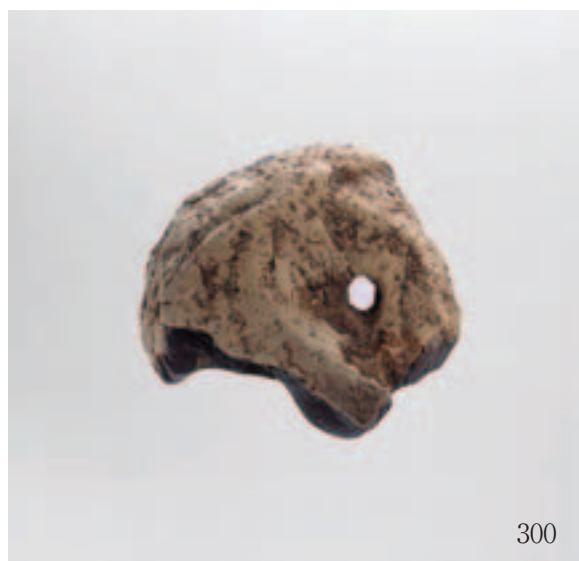
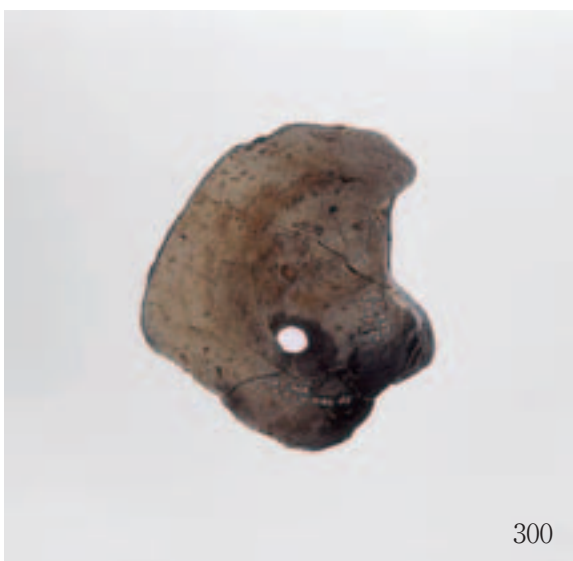
172



174







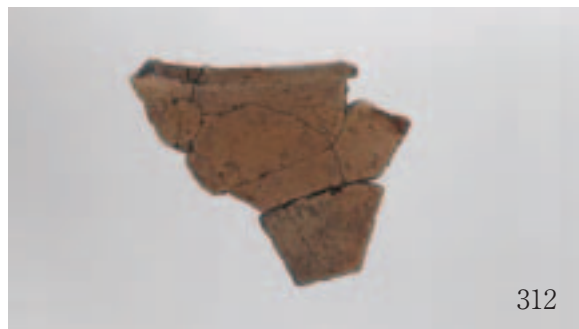




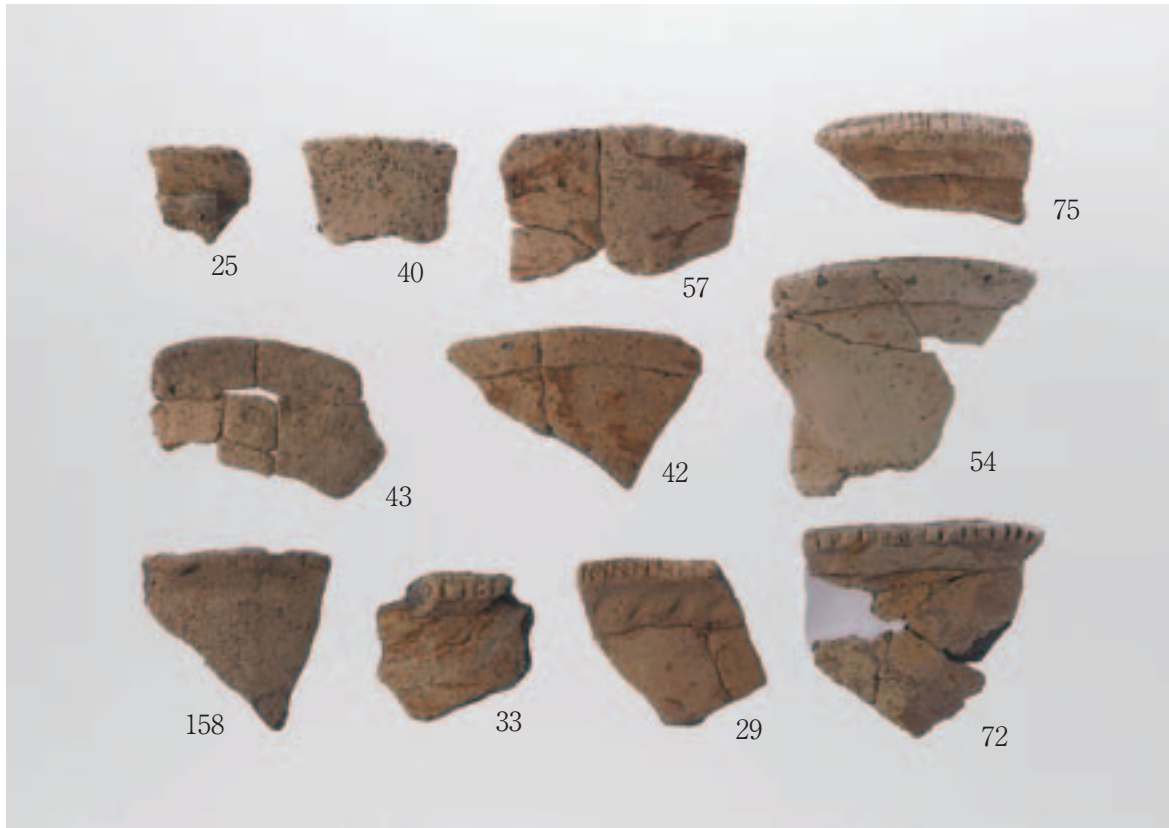




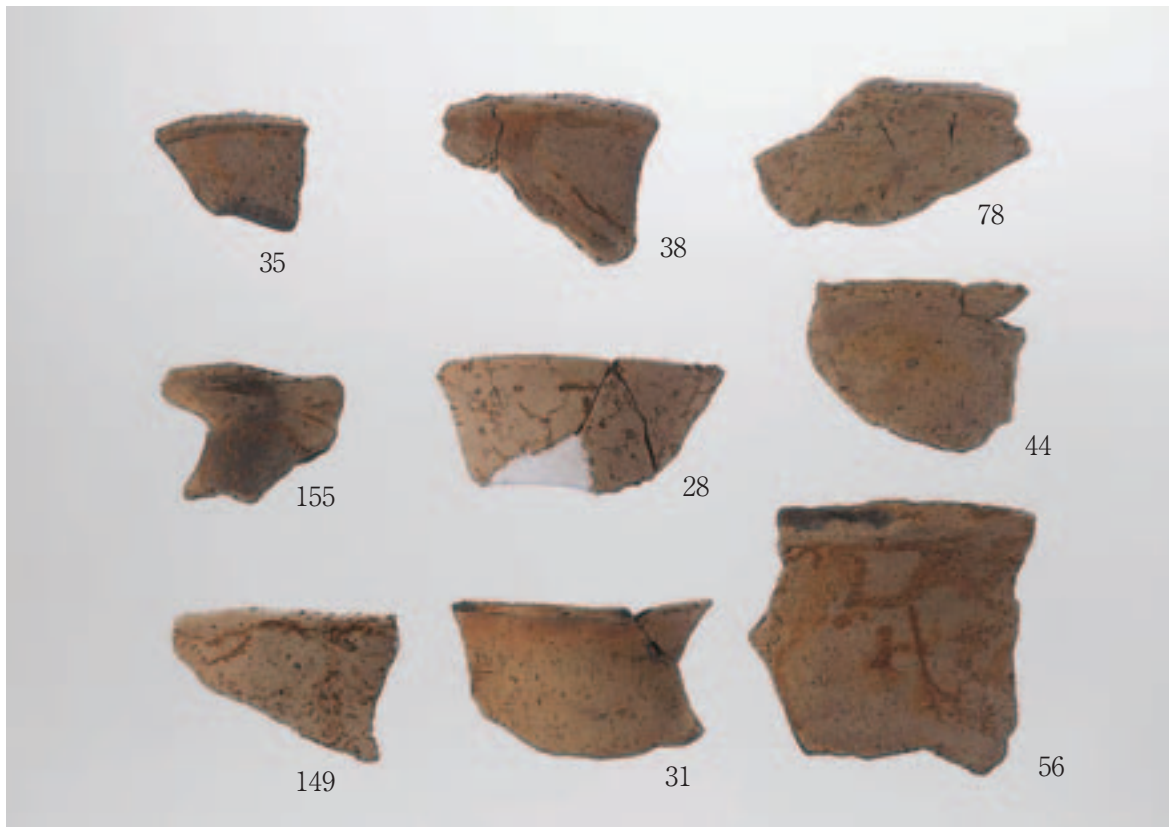




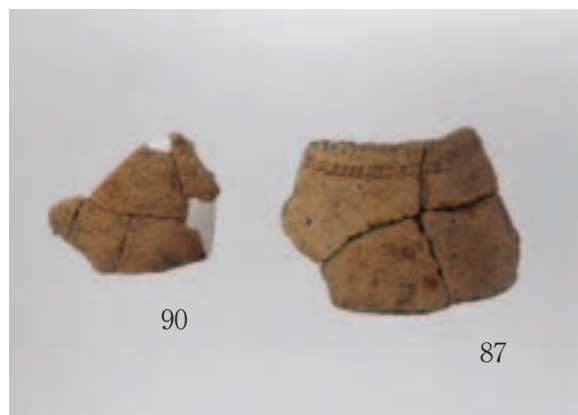
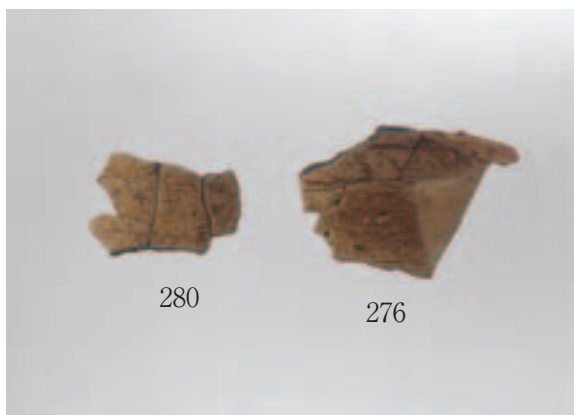
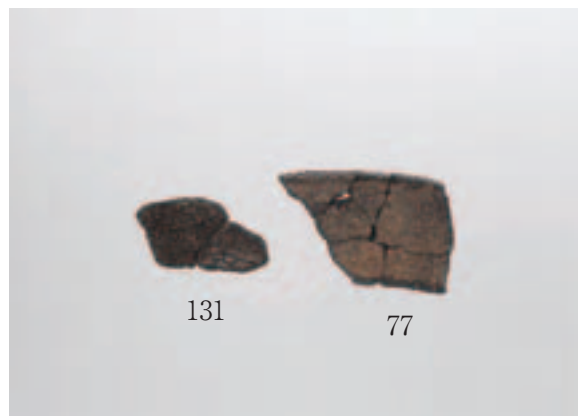
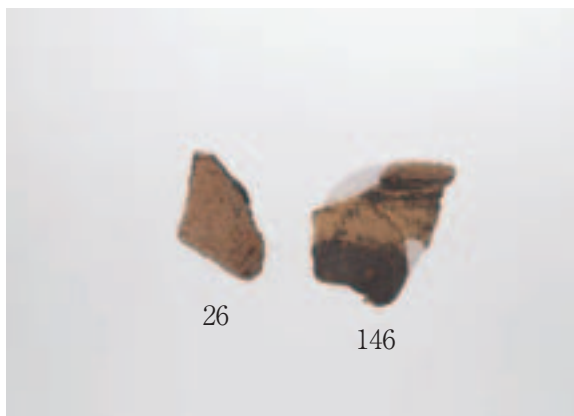




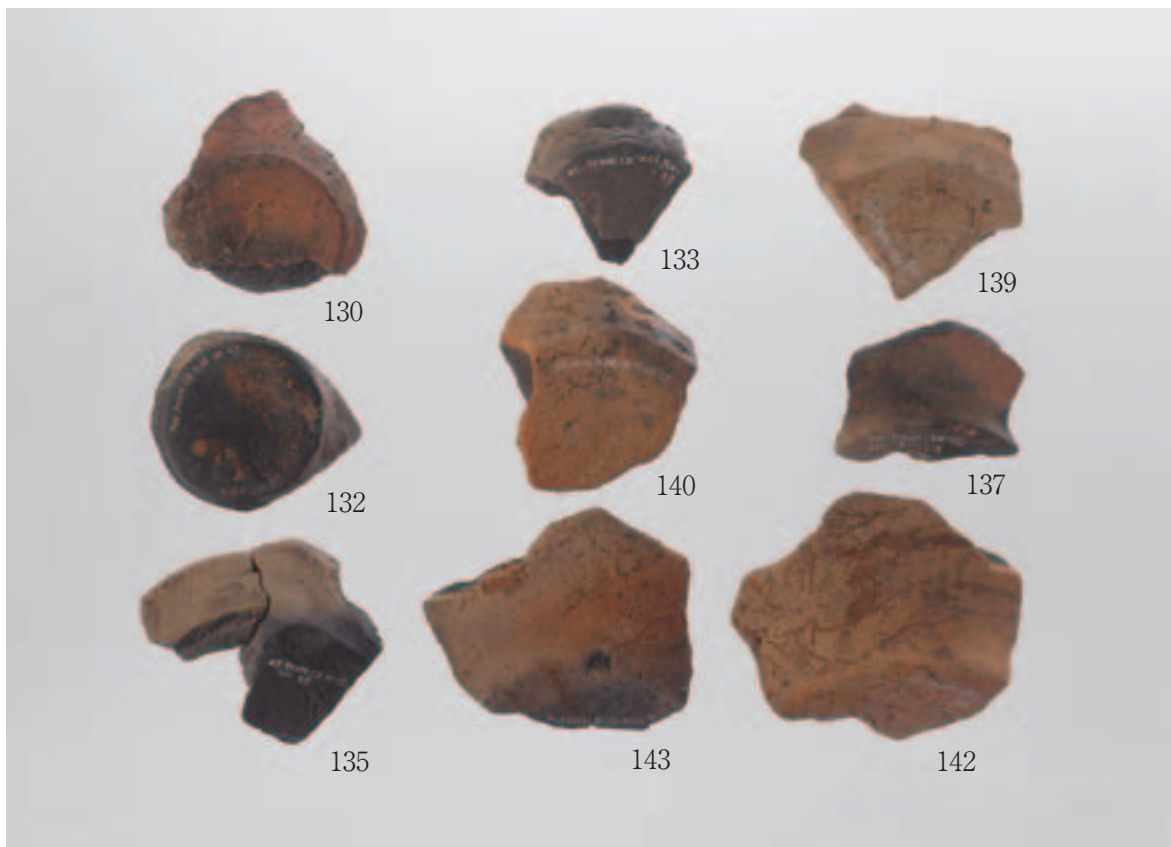
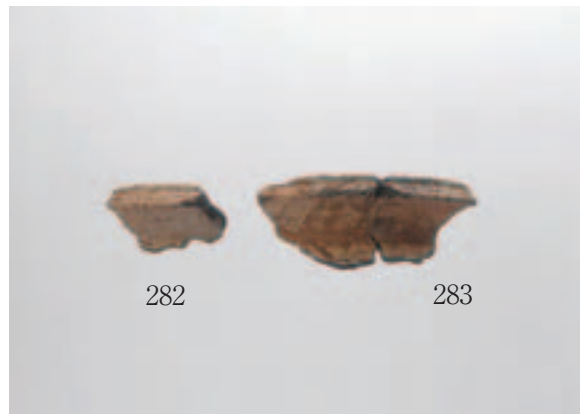
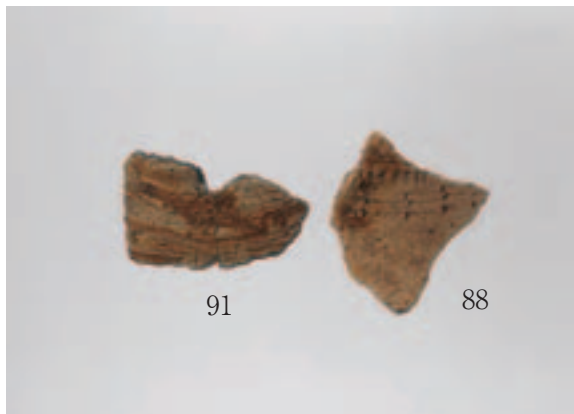
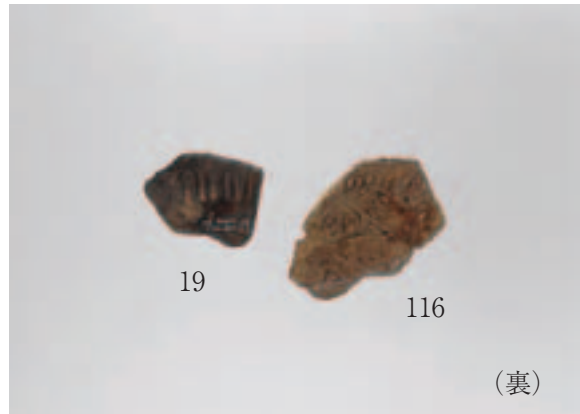
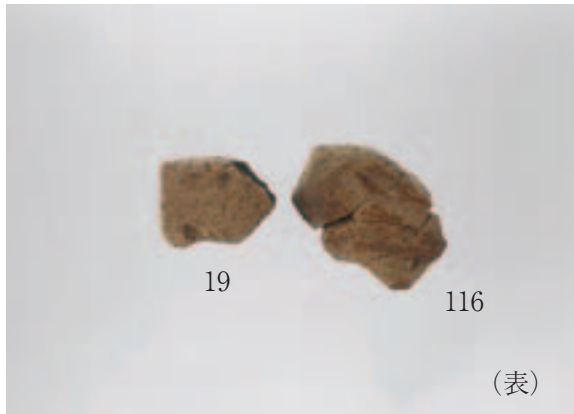


















香川県からの搬入土器（表）



香川県からの搬入土器（裏）

報告書抄録

ふりがな	みとろいせき							
書名	ミロ遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	岩本繁樹・久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2007年12月19日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みとろいせき ミロ遺跡	こうちけんこうちし 高知県高知市 ぬのしだ 布師田	39201	010164	33° 34' 59"	133° 36' 27"	2005.1.11 ～ 2005.2.28 2005.8.22 ～ 2005.12.5	108㎡ 2,414㎡	国道195号 道路改築工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
ミロ遺跡	集落跡	弥生時代 中期前半 弥生時代 中期末～ 後期初頭 弥生時代 後期後半 弥生時代 後期末 ～古墳時代 初頭	溝跡2条、土坑1基 土坑1基 土坑1基 竪穴住居跡2棟、 掘立柱建物跡1棟、 溝跡3条、土坑1基		弥生土器、 石器 弥生土器 弥生土器 弥生土器、 石器、 木柱			
要約	<p>土佐潟に面した、幅の狭い自然堤防上に立地する遺跡である。</p> <p>弥生時代中期前半の溝跡から土器群が出土した。また、伐採斧、加工斧も出土しており、当該期の石器組成も明らかにできる資料である。また、伐採斧は蛇紋岩製のものであり、未成品も出土していることから当遺跡において生産している。</p> <p>弥生後期末～古墳時代初頭では、小形竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出された。今次調査区の最盛期であり、県内の動向とも連動する。また、庄内式土器の破片も多く出土している。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 99 集

ミトロ遺跡

国道 195 号道路改築工事に伴う発掘調査報告書

2007 年 12 月 19 日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉 1437-1

Tel.088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社